

なし。城兵機をつめて待ちに待てども敵よせず、是はいかにと齒がみをなせど甲斐もなし。斯くする事三度に及びしかば城中の輩いよ／＼氣を勞らせ切つて出て追拂はんと罵るを、大將山中之を止め是は寄手の謀、味方を勞らかせ其虚に乗入らんとす者なり聞かぬ振して音なせそと諫めて一人も門外へ出す事なければ詮方なげに持場々々に扣へたり。兎角する内に曉近くなりしかば木下時分よきぞと人数を繰上げ城近くなりて隙を作り鐵砲を厳しく打かけ手痛く攻めたりけれども、城兵今は氣も勞れ力もぬけし處なれば狼狽うろたへぐのみにしてはか／＼しく働く者もなし。爰に搦手へ向ひし五百余人の者共はさしもに嶮しき山路を二時計りにおし上り城の後に廻り井樓せいろうを組上げたり。是は木下が下知にて手に／＼材木一本宛かづかせたるを何の用ともいはざりしかば但不審してのみありけるが、こゝにて始めて井樓の用なりけりと知れば今に始めぬ事乍ら木下が深慮の程を感じけり。彼是といふ中に井樓三ヶ處組上げしかば之に登りて城中を見るに、僅に廿間許を引去りし間なり役所々々はいふに及ばず手に取るやうなりしかば、是に登

## 秀吉の機智

りて大手の容子を窺ふに早あけ渡る東雲の空にうつるは炬たいまつの影木間このま／＼に翻る旗の氣色も勇ましく木魂こだまに響く関の聲次第に近く聞ゆれば、追手の軍既に始まりぬと覺ゆるぞ、さらば此方も鐵砲を撃掛けて搦手を破れやといふ儘に五百余人の者共代る／＼井樓の上より火箭を射かけ作り並べし役所々々を焼たてこれを防がんとあわてふためく所を見濟まし鐵砲を放ちしかば、玉の飛ぶ事雨霰の如く、拳下こぶしがりに射る箭は更に仇箭なく、殊にこの處へは鳥獸すら容易く通はねば人の來べき路なしと心を許し、夜と共に酒酌みかはし戯れ興じいつしか眠を催して誰怠るとなく甲を脱いで枕とし前後も知らず臥したれば、さばかりの大勢が井樓組むをも知らざりけり。大手の方に聞ゆる関の聲をば餘所の事に聞きなしこゝはかく許り要害よし翼なき者の企て、も及ぶべからずと思ひ驕るも酒の咎ぞかし箇様に打解けたりける耳元に一聲響く矢叫と共に役所々々の燃上るを見て、これは如何にと驚けども猶敵の廻りしとは思ひもよらず、これは下部が手過ぞはや打消せよはせ廻る其有様を井樓よりよく／＼見定め、さしつめ引詰射たりければ以ての外



に散亂し疵を蒙る者數を知らず。さる程に黒烟天をこがし大手の方へ靡きしかば、大手の大將山中田中之をみて搦手の雜兵等が怠りにて手過ぞと思ひしかば、山中は田中に向ひ御邊搦手へ御廻りありて火の手を防ぎ給へ早く鎮めずば本丸危しといふにより、三百計の人數を従へ田中は搦手へ走り行く。又本丸の武者頭青木玄蕃も燒亡に驚き駈付け見れば、搦手に置きし侍五百余人烟の中に醉眠しける其處へ思ひもよらの山上より火箭鐵砲を射かけ出しけるにより之が爲に大方討たれ、討殘されし者共は火に焼かれ烟に迷うて倒臥しあきれ惑うてあるのみなれば、青木玄蕃本丸より召具したる兵士に下知して先役所々々の火を鎮めんと働くを、木下が手の者共山上より之を見てこゝをはづさず乗入れやと身輕に出立ち忍びになれし者共ひし／＼と塀に取付きかけ上り五百餘人が一人も残らず城中へ亂れ入り火を消さんと駈走る城兵等をえらみ打に斬倒し打伏せ馳せ廻り勇を振ひしかば、さなきだに亂立ちたる驅武者共一支も支へず落足になりけるにより、青木も今は防ぎかね一先こゝを引退き方便てだてをかへて之を攻めんとなしける處へ、治部大輔三百餘

人にて馳來りしかども味方は散亂して纏まらず敵は城中に満みちたれば、扱は早織田勢搦手を乗取りしならん爰にて防ぎ止めん事誠に難儀なるべし。然らば本丸へ引籠り重ねて謀をめぐらし取替へすべしとて、本丸さして引退く。山中山城守は大手に在りて此處を大事と防ぎけるが木下藤吉郎城中の騒動を見て、時こそよければや進め速に乗入れよと下知しければ此手の勇士三千餘人一瞬もせず堀際へ押詰め無二無三に攻立つれば、山中も死物狂に働くといへども搦手既に破れ敵城中へ亂入りしと聲々に呼ばるるを聞きて、こはいかに豫ての手配皆空しくなりけるにやと驚き騒ぎ心もこゝにあらざれば防く鐵砲守る箭先もまばらになるを得たりと木下が兵共乗入りけるにより山中もあきれ惑うて立ちたる處へ、田中が兵士走り來り敵本丸を攻めんとす、そこを棄て、早々此方へ引給へと呼取りけるにより、山中もせん方なく打殘されし兵士を引纏め本丸へ退きたれば、木下勢心安く大手の丸を乗取りたり。偕本丸へ押寄せて一攻せめんとなしける處へ搦手より廻りし五百餘人も一所に集まりけるにより木下之を賞し、さて總軍を集め急に攻む



る勢をなし乍らばかゝしくも攻めざりければ城中にても今は城を渡して箕作と一つにならばやと思ふ者も多くなりける氣色をみて使を本丸へ遣し、軍の習弓箭の道是までに候罪なき士卒を失ひて何かせん面々も信長に恨なし一旦義の向ふ處止む事を得ざるのみなれば早く出城ありて承禎入道にも和議を勧め給はん事一族家老衆の忠義あるべしと申送りけるにより、山中中も理に折れ籠城の兵士の命を御助あらんとならば我々兩人降仕り城を御渡し申すべくと返答せしにより、木下謀成就せしと悦び其通り相違なきの旨を申遣しけるにより籠城の兵士悉く出し果て、山中中兵仗を帶せず木下の陣に降参す。秀吉之を請取り二人を召具し本陣へ到りけるに時は未辰の初なり。實にも一時半許に和田山をば攻落し大將二人を降参させ味方に手負さへなく十分の勝利なりとて第一の勳功とぞ感せられける。木下即山中中を大將の前に引出し見参の式を取繕ひければ、神妙の事と宣ひ木下次第たるべしと仰出されしかば、則木下の組下となしけるに山中は六角家へ歸参して和議を取扱ふべし田中は止りて忠勤を盡すべしとぞ定めたりけり。

箕作城攻落 附 觀音寺城開退

信長記

事にあふ兵  
精悍用に堪ふ  
べき兵ないふ

和田山城

箕作城

佐々木 承禎  
父子ないふ

さる程に拔關齋承禎子息右衛門頭義弼もかねて家老の者共召寄せ、信長當國に發向せば定めて海道筋の城々を先攻むべし。然れば和田山の城は今度の手當として内々拵へ置きたり。これ幸にとて南郡にても事に合うたる兵共をすぐりすぐつて籠置きたり。信長卿當國の繪圖を委細に拵へ、山野溝洫の難易等並に敵の謀る所をも賂を入れ細々しく問尋ねられしかば、觀音寺和田山へ押寄する様にして、和田山には美濃三人衆を押へとして差向けられ、和田山よりは奥なる箕作の方へ勢を押廻し給へば、佐々木案に相違してぞ見えたる。佐久間右衛門尉木下藤吉郎丹羽五郎右衛門尉淺井新八はかねて箕作の攻手に定められたる事なれば関を作り懸け、攻寄せける城の内にも吉田某建部源八等籠りたれば山下へ人數を下し一支へさへんとしけるに、態と弱々とあひしらうて人數を繰りよせ息をも繼がずをめき叫んで攻めける間、かなはずして城の内に引取らんとしけるを追詰め山の半にして

箕作城攻落附觀音寺城開退



敵 箕作城兵  
たり

持ちは持つ  
城を幸うじて  
支へ来りしな  
いふ  
注進 報告す  
るをいふ

はやよき兵共二百騎計討捕り勇みに勇んだる事なれば、此勢を抜かず懸れや者共  
と四人の大將下知しければ元より望む所也なじがは少しも弛むべき、皆ひた／＼  
と堀際へつけて旗差物などを投入れ打入れ面も振らず込み入らんとしければ、  
敵堪へ難くや思ひけん笠を出して夫に詰められたるは誰々やらんといひければ、  
佐久間が手に組せし佐久間久六原田與助、木下が手に組せし竹中半兵衛尉蜂須賀  
彦右衛門尉木村隼人正、丹羽が手に組せし林志の島杯と答へければ、是までは持ち  
は持つて候へども一命を助けられ候はゞ旗を卷き鉾を逆にして降るべきと申しけ  
る間、即此由四人の大將へ注進しけるに、信長卿も幸ひ彼が手に御座しましける間、  
佐久間進み出で、先城中の者共の一命を助け城を請取り申すべくと存するは如何  
候べきと伺ひ申しければ、ともかくも事のよき様に計らひ候へと宣ひし間、箕作  
を請取りて関を咄とぞ上げたりける。佐々木案に相違してこそ見えたりけれ。箕  
作の城落去せしに依つて和田山の城も其夜開け退く。観音寺にも兎やせん角やあ  
らましましなんど犇めき騒ぎけるに三雲新左衛門尉同じく三郎左衛門尉申しけるは、

箕作城陥る

詰めて 包圍  
せられてはの  
意  
居城 三雲の  
居城 石部(甲  
賀郡石部町)  
なり

是に應へさせ給ふとも詰めては叶ふべからず一先落ちさせ給ひ身を全うして時節  
を待ち一度會稽の恥を雪がんと思召さばとく／＼我等が居城へ退せられ候へ。さ  
り乍ら家老の面々如何ばかり存せられ候。と聲を放つて申しければ各も内々退き  
たくはあり、尤をこそ申されける者かな、あの鬼神の様なる信長に斯様になり果  
中々敵對申す事思ひも寄らず候。とかうせば夜も明けなんす、はや疾々と同じけ  
れば、多年住馴れし所なれば名残惜くはあんなれご上下共に唯命を助かりたく思  
ひければ、自ら執着は切つてけり。何の御曹子をば誰圍み申すぞ、尊丈其は何と  
したなごといふ計りにて君臣上下の分ちもなく上を下へと観音寺坂を下り立ち  
て女子共は聲を計りに悲みあひて誰彼と呼ぶ聲々餘りに分けも定かならねば聞え  
て答ふる人もなし。誠に一とせ平家の人々都を落ちさせ給ひし形勢も斯くやと知  
られて哀れなり。斯くて観音寺の城落去しければ處々にたて籠りし城々共一日二  
日の内に十八箇所まで開退く。其外味方に下る輩をば人質を取り其儘己が居城に  
置かせ給ふもあり、退散したる城々には宗徒の人々入置かれけり。

観音寺城陥る

十八箇所  
江國各地の  
何れも佐々  
木の城近

箕作城攻落附観音寺城開退



日野籠城

氏郷記

織田信長 明  
智光秀に弑せ  
られたる後の  
條 賢秀 蒲生郡  
日野城主  
安土の留守  
信長出陣の爲  
安土城を留守  
するをいふ  
此由 信長の  
弑せられしを  
いふ

御臺所 信長  
公の御妻をい  
ふ  
君達はその御  
子等をいふ

蒲生左兵衛大夫賢秀は例の安土の御留守居にて候ひけるが、此由聞きて口惜き事共哉と涙に咽びけれども甲斐ぞなき。安土何となく騒ぎしかば、いや／＼隠しても詮なしとて家子なりし外池甚五左衛門を以て觸れさせけるは「君は明智が爲御自害候ひぬされども御城に於ては堅固たるべし。下々騒ぎ申すな」とて裸馬に乗つて觸れければ、上下萬民わつと泣き立て、こはいかに御恩の君を、あの明智奴が討ち奉る事よと喚き叫ぶ聲暫しは鳴も静まらず。左兵衛大夫「あはれ明智が寄せよかし此城を枕として御供申さん」と一途いっとうに思切りけるを賢秀の侍外池新介進出で、申しけるは「もし此御城にて御自害候は、信長公御臺君達など下鵜の囚人とならせ給はんこと故將軍への御忠節にて候べけん」と申し、かば、賢秀實にもとや思はれけん「さあらば御臺所君達其外女房達を日野の谷へ退け申して我居城にこそ籠城をばせめ」とて子息忠三郎氏郷方へ乗物五十丁鞍置き馬百疋傳馬二百疋召

腰越 觀音寺  
山の麓の地名

後醍醐天皇北  
條高時をうづ  
べく笠置へ潛  
幸の途賊を誑  
かさん爲山賢  
なして叡山に  
臨幸の体に擬  
せしめられし  
其條 師賢卿は  
尹大納言正  
頼山にて大納  
言に於て見あ  
はれざるや  
遁れて笠置に  
ゆくと笠置に

連れ腰越まで急ぎ參るべき由申遣はし、明くれば三日卯刻にぞ退かれける。女房達より御城に火を懸けて寶取り給へと宣ひけるに、賢秀申されけるは、信長公の御切立ての城を蒲生が焼き候はんは冥加も恐ろしく候。縦ひ明智が手へ渡り候とも天命の候へば世の保ち候まじ。次に寶物を取り候は、欲に耽り金銀にめで、御臺君達をのけ申すかど人存候べし。少しも取り申すまじとて御城をば木村次郎右衛門尉に預け置きてぞ退かれける。誠に義深き侍なりと人々感じ合へりけり。

師賢登山附唐崎濱合戦

太平記

尹大納言師賢卿は主上の内裏を御出で有りし夜三條河原迄被供奉たりしを、大塔宮より様々仰せられつる子細あれば臨幸の由にて山門へ登り衆徒の心をも窺ひ又勢をも付けて合戦を致せと被仰ければ師賢法勝寺の前より袞龍の御衣を著て瑤輿に乗替へて山門を登り給ふ。四條中納言隆資、二條中將爲明、中院左中將定平皆衣冠正しくして供奉の體に相順ふ、事の儀式誠敷ぞ見立たりけり。西塔の釋迦

師賢登山附唐崎濱合戦



や帝を扶けて  
 出た處に捕へ  
 られ憂憤鬱す  
 年三十二別格  
 官幣社小御門  
 神社として祀  
 らる  
 大塔宮 護良  
 親王  
 山門 叡山延  
 曆寺 發表す  
 披露 發表す  
 戸津 下坂本  
 村大字 坂本  
 の古字  
 叡山防備  
 東使 鎌倉よ  
 りの使者城越  
 後守二階堂出  
 羽入道道蘊或  
 は二階堂下野  
 判官長井遠江  
 守といふ  
 局町 後宮女  
 官の局々ない  
 赤山 比叡山  
 西麓山城愛宕  
 郡修學院離宮  
 の北にあたる

堂を皇居と被成、主上山門を御憑有りて臨幸成りたる由披露有りければ、山上坂  
 本は申すに及ばず大津・松本・戸津・比叡辻・仰木・衣川・和邇堅田の者迄も我先にご  
 馳參る。其勢東西兩塔に充滿して雲霞の如くにぞ見えたりける。かゝりけれども  
 六波羅には未だ曾て是を知らず。夜明けければ東使兩人、内裏へ參りて先行幸を  
 六波羅へなし奉らんとして打立ちける處に、淨林房阿闍梨豪譽が許より六波羅へ  
 使者を立て、今夜の寅の刻に、主上山門を御憑有りて臨幸成りたる間三千の衆徒  
 悉く馳せ參り候。近江越前の御勢を待ちて明日は六波羅へ寄せらるべき評定あり  
 事のみに成り候はぬ先に急ぎ東坂本へ御勢を被向候へ。豪譽後攻仕りて、主上を  
 ば取り奉るべしとぞ申したりける。兩六波羅大に驚きて、先内裏へ參りて見奉る  
 に、主上は御座無く只局町の女房達此彼にさしつごひて泣聲のみぞしたりける。  
 さては山門へ落ちさせ給ひけること子細なし、勢つかぬ間に山門を攻めよとて四  
 十八ヶ所の籌に畿内五ヶ國の勢を差し添へて五千餘騎追手の寄手として赤山の麓  
 下松の邊へ指し向けらる。搦手へは佐々木三郎判官時信、海東左近將監長井丹後

妙法院主 後  
 醍醐天皇御  
 宗真親王  
 八王子 日吉  
 神社 山腹  
 の高處に在り  
 解脱同相の御  
 衣生を解きて  
 づなを解きて  
 佛果同體の相  
 を顯したる衣  
 の衣は袈裟を  
 いふなり  
 垂迹和光 佛  
 は本地神は  
 垂迹和光 佛  
 けて佛の光を和  
 衆生に利益を  
 與ふるに利益な  
 唐崎の戦

守宗衛、筑後前司貞知、波多野上野前司宣道、常陸前司時朝に美濃尾張丹波但馬  
 の勢をさしそへて七千餘騎、大津松本を経て唐津の松の邊まで寄せ懸けたり。坂  
 本には兼ねてより合圖を指したる事なれば妙法院大塔宮兩門主宵より八王子へ御  
 上りありて御旗を被揚たるに御門徒の護正院の僧都祐全・妙光坊の阿闍梨玄尊を  
 始めとして三百騎五百騎此彼より馳參り居る程に一夜の間に御勢六千餘騎に成り  
 にけり。天台座主を始めて解脱同相の御衣を脱ぎ給ひて堅甲利兵の御貌に替り垂  
 迹和光の砌り忽ちに變じて勇士守禦の場と成りぬれば神慮も如何有らんと計り難  
 くぞ覺えたる。さる程に六波羅勢已に戸津の宿の邊まで寄せたりと坂本の内騷動  
 しければ南岸の圓宗院、中坊の勝行房、早尾の同宿共取る物も取りあへず唐崎の  
 濱へ出合ひける。其の勢皆かち立にて然も三百人には過ぎざりけり。海東之を見  
 て敵は小勢也けるぞ後陣の勢の重ならぬ前に懸け散さでは叶ふまじつゞけや者共  
 と云ふ儘に三尺四寸の太刀を抜きて鎧の射向の袖をさしかざし敵の渦巻きて控へ  
 たる真中へ懸入り敵三人切りふせ波打つ際に控へて續く御方をぞ待ちたりけ



上巻は總角に  
て鑑の後の紅  
の組結なり

唐輪 唐子監  
にて所謂ちこ  
姿

麴麴の筒丸  
黄に青みを帯  
びたる色の筒  
丸さいふ鑑の  
一種なり

大口 袴の名  
にて裾の口大  
きくあきたる  
より名付らる

る。岡本房の播磨の豎者快實遙に之を見て前につき並べたる持楯一帖岸破と踏み  
倒し二尺八寸の小長刀水車に回して躍り懸る。海東之を弓手にうけ冑の鉢を眞二  
つに打破らんと隻手打に打ちけるが打外して袖の冠板より菱縫の板まで片筋かひ  
に懸けず切つて落す。二の太刀を餘りに強く切らんとて、弓手の鑑を踏みをり已に  
馬より落ちんとしけるが乗直りける處を、快實長刀の柄を取延べ内甲へ鋒上りに  
二つ三つ透間もなく入りたりけるに、海東あやまたず喉笛を突れて馬より眞逆に  
落ちにけり。快實馳て海東が上巻に乗懸り鬢の髪を掴んで引懸けて首かき切つて  
長刀に貫き、武家の大将一人討ち取りたり物始よしと悦びてあざ咲ひてぞ立ちた  
りける。爰に何者とは知れず見物衆の中より年十五六年なる小兒の髪唐輪に上げ  
たるが麴麴の筒丸に大口のそば高く取り金作の小太刀を抜きて快實に走り懸り甲  
の鉢をしたゝかに三打四打ぞ打ちたりける。快實屹と振り返つて是を見るに齡二  
八許なる小兒の大眉に鐵漿黒也、是程の小兒を討留めたらんは法師の身に取りて  
は情無し、打たじとすれば走り懸り、手繁く切り回りける間、よし／＼さらば

長刀の柄にて太刀を打落して組み止めんとしける處を比叡辻の者共が田の畔に立  
ち渡りて射ける横矢に此兒胸板をつと被射抜て矢場に伏して死にけり。後に誰  
ぞと尋ぬれば海東が嫡子幸若丸と云ひける小兒、父が留め置けるに依りて軍の伴  
をばせざりけるが猶も覺束なくや思ひけん見物衆に紛れて後に付きて來ける也。  
幸若稚しといへども武士の家に生れたる故にや、父が討れけるを見て同じく戰場  
に討死して名を残しけるこそ哀なれ。海東が郎等之を見て二人の主を目の前に討  
たせ剩へ首を敵に取らせて生きて歸る者や可有とて、三十六騎の者其轡を雙べて  
懸入り、主の死骸を枕にして討死せんと相争ふ。快實之を見てから／＼と打ち咲  
ひて「心得ぬ者哉御邊達は敵の首をこそ取らんするに御方の首をほしがるは武  
家自滅の瑞相顯はれたり、ほしからば取らせん」と云ふ儘に持ちたる海東が首を  
敵の中へかばと投げ懸け坂本様の拜み切り八方を拂ひて火を散らす。三十六騎ど  
も快實一人に被切立て馬の足をぞ立てかねたる。佐々木三郎判官時信後に控へ  
て御方討すな續けやと下知しければ、伊庭自賀多木村馬淵三百餘騎をめて懸



り、快實既に討れぬと見えける處に、桂林房の惡讚岐、中房の小相模、勝行房の侍從豎者定快、金蓮坊の伯耆直源四人左右より渡り合ひて鋒を指し合はせて切つて回り、讚岐と直源と同じ處にて撃れにければ後陣の衆徒五十餘人續いて又討つて懸る。唐崎の濱と申すは東は湖にて其の汀崩れたり。西は深田にて馬の足も立たず平沙渺々として道せばし。後へ取りまはさんとするも叶はず、中に取籠めんとするも叶はず。されば衆徒も寄手も互に面に立たる者計戦ひて後陣の勢はいたづらに見物してぞ控へたる。已に唐崎に軍始まりたりと聞えければ御門徒の勢三千餘騎白井の前を今路へ向ふ。本院の衆徒七千餘人三の宮林を下り降り和邇堅田の者共は小舟三百餘艘に取り乗つて敵の後を遮らんと大津をさして漕ぎ回す。六波羅勢之を見て叶はじとや思ひけん志賀の閻魔堂の前を横切に今路に懸りて引返す。衆徒は案内者なれば此彼の逼々に落合ひて散々に射る。武士は皆無案内なれば堀峪ほりがけともいはず馬を馳せ倒して引きかねける間、後陣に引ける海東が若黨八騎波多野が郎等十三騎、眞野入道父子二人、平井九郎主從二騎谷底にして討たれに

けり。佐々木判官も馬を射させて乗かへを待つ程に、大敵左右より取巻きて既に討たれぬと見えけるを、名を惜み命を輕んずる若黨共返し合はせし所々にて討死しける其間に、萬死を出で、一生に遇ひ白晝に京へ引返す。此頃迄は天下久しく靜にして軍といふ事は敢て耳にも觸れざりしに、俄なる不思議出來ぬれば人皆あわて騒ぎて天地も只今打返す様に沙汰せぬ處もなかりけり。

山門の大衆唐崎の合戦に打勝つて「事始よし」と喜びあへること斜ならず。こゝに西塔を皇居に定めらるゝ條本院面目なきに似たり。壽永の古、後白河院山門を御憑ありし時も先横川へ御登山有りしかども懸て東塔の南谷圓融坊へこそ御移りありしか。且は先蹤なり且は吉例なり、早く臨幸を本院へなし奉るべしと西塔院へ觸れ送る。西塔の衆徒理にをれて仙躰を促さん爲に皇居に參列す。折節深山嵐烈しく御簾を吹上げたるより龍顔を拜し奉りたれば、主上にてはおはしまさず尹大納言師賢の、天子の衰衣を着し給へるにてぞ有りける。大衆之を見てこは如何なる天狗の所行ぞやと興をさます。其後よりは參る大衆一人もなし。かくては山門

本院  
根本中  
堂をいふ



笠置の石室  
後醍醐の御幸  
したまへる笠  
置寺をいふ

如何なる野心をか存せんすらんと覺えければ、其夜の夜半計に尹大納言師賢、四條中納言隆資、一條中將爲明、忍びて山門を落ちて笠置の石室へまゐらる。さる程に上林房阿闍梨豪譽は元來武家へ心を寄せしかば、大塔宮の執事安居院の中納言法印澄俊を生捕りて六波羅へ之を出す。護正院僧都猷全は御門徒の中の大名にて八王子の一の木戸を堅めたりしかばかくては叶はじとや思ひけん、同宿手の者引連れて六波羅へ降参す。是を始として一人落ち二人落ち、落ち行きける間、今は光林坊律師源存、妙光房の小相模、中の坊の悪律師三四人より外は落止まる衆徒もなかりけり。妙法院と大塔宮とは其夜まで尙八王子に御座ありけるが、かくては悪かりぬべし一先落延びて君の御行方をも承らばやと思召ければ、廿九日の夜半計に八王子に篝火を數多所に燒きて、未大勢籠りたる由を見せ、戸津の濱より小舟に召され、落止まる所の衆徒三百人許を被召具て、先づ石山へ落ちさせ給ふ。此にて兩門主一所へ落ちさせ給はん事計畧遠からぬに似たる上、妙法院は御行歩もかひなくしからねば只暫く此邊に御座有るべしと石山より二人引別れさせ給ひて、妙

法院は笠置へ越させ給へば、大塔宮は十津川の奥へと志して、先南都の方へぞ落ちさせ給ひける。さしもやごとなき一山の貫主の位を捨て、來習はせ給はぬ方里漂泊の旅に浮かれさせ給へば、醫王山王の結縁も是や限りと名殘惜しく竹園連枝の再會も今は何をか可期と御心細く被思召ければ互に隔たる御影の隠るゝまでに顧みて、泣くく、東西へ別れさせ給ふ御心の中こそ悲しけれ。

山門攻附日吉神託

太平記

主上 後醍醐  
天皇 去ぬる春  
の云々 延元々々  
年正月 足利尊  
氏の大 擧犯し  
奉るを 帝こゝ  
に避け 給ひて  
二月尊 氏を九  
州に走 らしめ  
たるを いふ  
將軍左 馬頭  
朝敵足 利尊氏  
をいふ  
東寺 京都東  
寺なり

主上二度山門へ臨幸なりしかば、三千の衆徒去ぬる春の勝軍に習ひて二心なく君を擁護し奉り北國奥州の勢を待つ由聞えければ、將軍左馬頭高上杉の人々東寺に會合して合戦の評定あり。事延引して義貞に勢付きなば叶ふまじ、勢未微なるに乗りて山門を責むべしとて、六月二日四方の手分を定めて追手搦手五十萬騎の勢を山門へ差向けらる。追手には吉良石堂・澁川・畠山を大將として其勢五萬餘騎、大津松本の東西の宿、園城寺の燒跡、志賀、唐崎、如意が嶽まで充滿したり。搦

山門攻附日吉神託



**叡山 攻撃**  
 西坂本 延暦寺の東口即滋賀郡坂本に對して西口即山城國愛宕郡修學院より登る坂をいふ

左兵衛督 義貞をいふ

山王 日吉神社  
 大師 傳教大師  
 大宮 日吉神社  
 三塔 東塔西塔横川をいふ

手には仁木・細川・今川・荒河を大將として四國中國の勢八萬餘騎、今道越に三石の麓を経て無動寺へ寄せんと志す。西坂本へは高豐前守師重・高土佐守・伊豫守・南部遠江守・岩松・桃井等を大將として三十萬騎、八瀬・藪里・しづ原・松か崎・赤山・下松・修學院・北白川まで支へて音無の瀧・不動堂・白鳥よりして寄せたりける。山門には敵これまで寄すべしとは思ひも寄らざりけるにや道々をも警固せず關、逆木の構もせざりければ、さしも峻しき道なれども岩石に馴れたる馬共なれば上らぬ所も無かりけり。其時しも新田左兵衛督を始として千葉宇都宮・土居得能に至るまで東坂本に集まり居て、山上には行歩も叶はぬ宿老・稽古の窓を閉ぢたる修學者の外は兵一人も無かりけり。此時若し西坂より寄する大勢共暫しも滞りなく四明の嶺まで打撃りたらましかば山上も坂本も防ぐに便り無くして一時に落つべかりしを、猶も山王大師の御加護や有りけん俄に朝霧深く立隠して咫尺の内をも見ぬ程なりければ漫に時をぞ移しける。斯る處に大宮へ下りて三塔會合しける大衆上下歸山して装紋の童堂の邊に相支へてこゝを前途と防ぎける間、面に進みける寄手三百

即延暦寺全部  
 水飲 地名  
 装紋童堂 堂舎の名

穴生 坂本村大字穴生

かさより落す  
 嵩みかゝりて  
 駈落すなり

人討たれ、前陣敢へて懸らねば後陣は彌不得進只水飲の木蔭に陣をとり堀切を境ひて搔楯を搔き互に遠矢を射違へて其日は徒に暮れにけり。西阪に軍始まりぬと覺えて関の聲山に響きて聞えければ、志賀唐崎の寄手十萬餘騎東坂本の西の穴生の前へ押寄せて関の聲をぞ揚げたりける。爰にて敵の陣を見渡せば無動寺の麓より湖の波打際まで空堀を二丈餘に掘通して處々に橋をかけ岸の上に塀を塗り、關、逆木をこまかくして渡槽高槽三百餘ヶ所かき並べたり。塀の上より見越せば是こそ大將の陣と覺えて中黒の旗三十餘旒山嵐に吹かれて龍蛇の如くに翻りたる其下に陣屋を並べて油幕を引き、爽やかに粧ひたる兵二三萬騎馬を後に引立させて一勢く並居たり。無動寺の麓、白鳥の方を見上げたりければ千葉宇都宮土居得能四國中國の兵こゝを固めたりと覺えて左巴・右巴・月に星片引兩傍折敷に三文字書きたる旗ども六十餘旒木々の梢に翻りて翻々たる其蔭に甲の緒を締めたる兵三萬餘騎敵近付かば横合にかさより落さんと響を並べて控へたり。又湖上方を直下したれば西國北國東海道の船軍に馴れたる兵共と覺えて、龜甲下濃の瓜



延元元年六月六日

宗徒主たるもの即武士中の幹部ないふ

大嶽大比叡の峯にて四明の峯より東北に聳ゆ

の紋連錢三星四目結赤幡水色三糶すはま家々の紋描きたる旗三百餘旒鹽ならぬ海に影見えて漕並べたる舷に射手と覺えたる兵數萬人搔楯の陰に弓杖を突きて横矢を射んと構へたり。寄手誠に大勢なりといへども敵の勢に機を吞まれて矢懸りまで進み得ず、大津唐崎志賀の里三百餘ヶ所に陣を取りて遠攻にこそしたりけれ。六月六日追手の大將の中より西坂の寄手の中へ使者を立て、此方の敵陣を窺ひ見候へば新田・宇都宮・千葉・河野を始として宗徒の武士共大畧皆東坂本を固めたりと見えて候。西坂をば嶮しきを憑みて公家の人々さては山法師共を差向けて候なる。一軍手痛く攻めて御覽候へはかゝしき合戦はよも候はじ。思ふ圖に大嶽おほだけの敵を進落されて候はゞ大講堂文殊樓の邊に控へて火を被擧候へ、同時に攻合せて東坂本の敵を一人も餘さず湖水に追ひはめて滅し候べしとぞ牒せられける。西坂の大將高豊前守之を聞きて諸軍勢に向ひて法を出しけるは、山門を攻落すべき諸方の合圖明日に在り此合戦に一足も退きたらん者は縦ひ先々拔群の忠ありと云ふとも無に處して本領を沒收し其身を可追出、一太刀も敵に打違へて陣を破り分捕

凡下凡夫下賤の者即侍ならぬひくき者をいふ

三千の衆徒延曆寺全體の僧をさす

中書王 恒良親王

をもしたらんずる者をば凡下ほんげならば侍になし、御家人ならば直に恩賞を可申興さればとて獨高名せんとして拔懸すべからず。又傍輩の忠を猜みて危き處を見放すべからず。互に力を合せ共に志を一にして斬るとも射るとも不用乗越え進むべし。敵引退かば立返らざるさきに責立て山上に攻上り、堂舎佛閣に火を懸けて一字も残らず焼拂ひ、三千の衆徒の頸を一々に大講堂の庭に斬懸けて將軍の御威に預り給へかしと諸人を勵まして下知しけり。惡逆の程こそ淺ましけれ。諸國の軍勢等此命を聞きて勇み進まぬ者なし。夜已に明ければ三石松尾水飲より三手に分れて二十萬騎太刀長刀の鋒を並べ射向いむけの袖をさしかざしてえいや聲を出してぞ揚げたりける。先一番に中書王の副將軍に憑まれたりける千種宰相中將忠顯卿坊門少將正忠三百餘騎にて被防けるが松尾より攻上る敵に後を裏かゝれて一人も不殘討たれてけり。之を見て後陣に支へて防ぎける正護院禪智坊道場坊以下の衆徒七千餘人一太刀打つては引上り暫く支へては引退き次第に引ける間、寄手彌勝ちに乗りて追立、一息をも繼がせずさしも嶮しき雲母阪きらくら蛇池じゅういけを弓手に見な



して大嶽までぞ攻上りける。さる程に院々に早鐘撞きて西阪已に被<sub>レ</sub>攻破ぬと本院の谷々に騒ぎ喚ばりければ行歩も叶はぬ老僧は鳩の杖に携はりて中堂常行堂なんごへ参りて本尊と共に焼死なんと悲み、稽古鑽仰をのみ事とする修學者杯は經論聖教を服に當て、落行く悪僧の太刀長刀を奪取りて四郎谷の南箸塚の上に走り舉り命を棄て、戦ふ。

爰に數萬人の中より只一人備後國住人江田源八泰氏と名乗りて洗革の大鎧五枚甲の緒をしめ四尺餘の太刀所々さびたるに血をつけてましがらにぞ上りたりける。之を見て杉本の山神大夫定範といひける悪僧黒糸の鎧に龍頭の甲の緒をしめ大立おほたて舉の髓すねあて當に三尺八寸の長刀莖短に取りて亂れ足を踏み人交せもせず只二人火を散してぞ斬合ひける。源八遙の坂を上りて數ヶ度の戦に腕緩く機疲れけるにや動もすれば受太刀になりけるを定範得たり賢しと長刀の柄を取延べ源八が甲の鉢を破れよ碎けよと重打にぞ打ちたりける。源八甲の吹返を目の上へ切下げられて着直さんと推し仰ぎける處を定範長刀をからりと打棄て走懸りてむづと組む。二人が

踏みける力足に山の片岸崩れて足もたまらざりければ二人引組みながら數千丈高き小篠原を上になり上になり上になり上になり上になり中程より別々に成りて兩方の谷の底へぞ落ちたりける。此外十四の禪侶法華堂の衆に至るまで忍辱の衣の袖を結びて肩にかけ降魔の利劔を提げて向ふ敵に走りかけ、命を風塵よりも軽くして防ぎ戦ひける程に、寄手の大勢進みかねて四明の嶺西谷口今三町計に向上げて一氣休めてぞ支へける。爰に何者が爲たりけん大講堂の鐘を鳴らして事の急を告げたりける間、篠の峰を固めんとて昨日横川へ被<sub>レ</sub>向たりける宇都宮五百餘騎鞭に鎧を飛ばして西口に馳來る。皇居を守護して東坂本におはされける新田左中將義貞六千餘騎を率して四明の上に馳上りて紀清兩黨を虎韜に進ませ、江田大館を魚鱗に連ねて眞倒に懸立られけるに寄手二十萬騎の兵共水飲の南北の谷へ被<sub>レ</sub>置落て人馬上が上に落重りしかばさしも深き谷二つ死人に埋まりて平地になる。寄手日頃の合戦に討負けて合圖の支度相違しければ水飲より下に陣を取りて敵の隙を窺ふ。義貞は東坂本を攔きて大嶽に陣を取り晝夜旦暮に戦ひて互に陣を破られず西

虎韜 兵法六  
鱗の陣のつ  
魚鱗の陣の名



坂の合戦此儘にて休みぬ。其翌日高豊前守大津へ使を立て、宗徒の敵共は皆大嶽へ向ひたりと見えて候。急ぎ追手の合戦を始められて東坂本を攻破り神社佛閣僧坊民屋に至るまで一字も不殘焼拂ひて敵を山上に追上げ東西兩塔の間に打上りて煙を被擧候は、大嶽の敵ども前後に心を迷はして進退定めて度を失ひつと覺え候。其時此方より同じく攻上り戦の雌雄を一時に可決こそ牒せられける。吉良石堂仁木細川の人々之を聞きて昨日は已に追手の勦に依りて高家の一族共手定の合戦を致しつ。今日は又搦手より此陣の合戦を被勸事誠に理に當れり非可默止とて、十八萬騎を三手に分けて田中濱道山傍より態と夕日に敵に向ひて東坂本にぞ寄せたりける。城中の大將には義貞の舍弟脇屋右衛門佐義助を被置たりければ、東國西國の強弓手垂を揃へて土矢間櫓の上におき、土居得能仁科春日部伯耆守以下の四國北國の懸武者二萬餘騎白鳥が岳に控へさせ、船軍に馴れたる國々の兵に和邇堅田の地下人共を差添へて五千餘人兵船七百餘艘に搔楯をかきて湖水の沖へ被浮たり。敵陣の構くはしくして人の近付くべき様なしといへども軍をせて

手垂 射術の  
上手をいふ

地下人 こい  
は仕へざる土  
民をいふ

は敵の落つべき様やあるとて三方の寄手八十萬騎相近付きて関を作りければ、城中の勢六萬餘騎矢間の板を鳴らし舷を叩いて関をあはす。大地も爲之に裂け大山も此時に崩れやすらんと夥し。寄手已に堀の前までかづき寄せ埋草を以て堀をうめ焼草を積みて櫓を落さんとしける時、三百余ヶ所の櫓土矢間出扉の内より雨の降る如く射出しける矢更に浮矢一つも無かりければ楯のはづれ旗下に射伏せられて死生の境を不知者三千人に餘れり。寄手餘りに射殺されける間持楯の陰に隠れんと少し色めきける處を中より見澄して脇屋堀口江田大館の人々六千餘騎三の關を開かせて蕞地まつしいらに敵の中へ懸入る。土居得能仁科伯耆が勢二千餘騎白鳥より懸下りて横合にあふ。湖水に浮べる國々の兵共唐崎の一松の邊へ漕寄せてさし矢遠矢筋違矢すぢかひに矢種を不惜射たりける。寄手大勢なりといへども山と海と横矢に射しらまされ田中白鳥の官軍に被懸立叶はじとや想ひけん又本陣へ引返す。其後よりは日夜朝暮に兵を出し矢軍ばかりをばしけれども、寄手は遠攻にしたる計を態にし官軍は城を攻落されざるを勝にしてはかなくしき軍は無かりけり。同十六日熊



筑紫の八郎  
弓の名入鎮西  
八郎爲朝をい  
ふ  
偏執 或一邊  
の見るみを固  
守する本義よ  
りこはこの  
武勇の人を尊

野の八庄司共五百餘騎にて上洛したりけるが荒手なれば一軍せんとて懸て西阪へぞ向ひたりける。黒糸の鎧冑に指の先迄鏢りたる籠手・髭當・半頬・膝鎧すき處なく一様に包みつれたる事が誠尋常の兵共の出立ちたる躰には事替りて物の用に立ちぬと見えければ、高豊前守悦び思ふ事不斜、懸て對面して合戦の意見を問ひければ湯河庄司殊更進出で、申しけるは、紀伊國育ちの者共は少きより惡處岩石に馴れて鷹をつかひ獵を仕る者にて候間、馬の通ひ候はぬ程の峻岨をも平地の如くに存するにて候ましてや申さん此山なんごを見て難所なりと思ふ事は露計も候まじ。絨毛こそ好くも候はねども我等が手づから撓め拵へて候物具をばいかなる筑紫の八郎殿も左右なく裏かゝする程の事はよも候はじ。將軍の御大事此時にて候へば我等武士の矢面に立ちて、敵矢を射ば物具に請留め、斷らば其太刀長刀に飛つき敵の中へわり入る程ならばいかなる新田殿なりともやはか怵へ候やと傍若無人に申せば聞く人見る人何れも偏執の思を成しにけり。さらば懸て之をさき武者として攻めよとて六月十七日の辰の尅に二十萬騎の大勢熊野の八庄司が五百餘人

らたよりにす  
るをいふ

を先に立て松尾阪の尾崎よりかづきつれてぞ上りたりける。官軍の方に綿貫五郎左衛門・池田五郎・本間孫四郎・相馬四郎左衛門とて十萬騎が中よりすぐり出されたる強弓の手垂あり。池田と綿貫とは時節東坂本へ遣はされて不居合、本間と相馬と二人義貞の御前に候ひけるが熊野の人共の眞黒に裏みつれて攻上りけるを遙に見下してからくと打笑ひ、今日の軍に御方の兵に太刀をも抜かせ候まじ、矢一をも射させ候まじ、我等二人罷向ひて、一矢仕りて奴原に肝をつぶさせ候はんと申しいと靜に座席をぞ立ちたりける。猶も弓を強く引かん爲に着たる鎧を脱置いて脇立計に大童になり、白木の弓のほこ短には見えけれども尋常の弓に立並べたりければ今二尺餘ほこ長にて曲高なるを大木共に押撓めゆらくと押張り、白鳥の羽にてはぎたる矢の十五束三伏ありけるを百矢の中より只二筋抜きて弓に取副へそぞろ歌うたひて閑々と向の尾へ渡れば、後に立ちたる相馬銀の銃打ちたる弓の普通の弓四五人張併せたる程なるを左の肩に打かたげて金磁頭二つ籠撓に取副へて道々撓直し爪よりて一群茂る松陰に人交もなく只二人弓杖突きてぞ立ちた

ほこ短  
にては弓のた  
け短きをいふ  
百矢 矢櫃に  
百筋入れたる  
用意の矢をい  
ふ  
籠撓 籠の曲  
りを直す具



猪目透し  
の字形の透し  
あるないふ  
摩醜、修羅、夜  
又、羅刹、夜  
づれも強力の  
悪魔

りける。茲に是ぞ聞えたる八庄司が内の大力よと覺えて長八尺計なる男の一荒あ  
れたるが鏢の上に黒皮の鎧を着、五枚冑の緒をしめ半頬の面に朱をさして九尺許  
に見えたる櫂の木の棒を左の手に握り猪の目透したる鉄の齒のわたり一尺計ある  
を右の肩に振かたげて少しもためらふ氣色なく小跳して登る形勢は摩醜・修羅王・  
夜叉・羅刹の怒れる姿に不異、あはひ二町許近づきて本間小松の陰より立願はれ  
件の弓に十五束三伏忘る、計引しほりひやうと射放す。志す所の矢處を少しも不  
違鎧の弦走より總角付の板迄裏面五重を懸けず射通して矢先三寸許血汐に染み  
て出でたりければ鬼か神かと思えつる熊野人持ちたる鉞を打棄て、小篠の上にご  
うと臥す。其次に之も熊野人かと思えて先の男に一かさまして二王を作り損じた  
る如くなる武者の眼逆に裂け鬚左右へ分れたるが緋緘の鎧に龍頭の甲の緒をしめ  
六尺三寸の長刀に四尺餘の太刀佩きて射向の袖をさし翳し後を屹と見て遠矢な射  
そ矢だうなにと云ふ儘に、鎧づきして上りける處を相馬四郎左衛門五人張に十四  
束三伏の金磁頭くつ巻を残さず引つめて弦音高く切りて放つ。手答さすがひ拍木

聞えて甲の眞向より眉間の腦を碎きて鉢附の板の横縫きれて矢尻の見ゆる計に射  
籠みたりければあつと云ふ聲と共に倒れて矢庭に二人死にけり。跡に繼ぎける熊  
野勢五百餘人此矢二筋を見て前へも不進後へも不返皆背をくゞめてぞ立ちたり  
ける本間と相馬と二人乍ら是をば少しも見ぬ由にて御方の兵の二町計隔たりたる  
向の尾に陣を取りて居たりけるに向ひて例ならず敵兵の働き候は軍の候はんする  
やらんならしに一づ、射て見候はん何にても的に立てさせ給へといひければ是遊  
ばし候へとて皆紅の扇に月出したるを矢に挟みて遠的場だてにぞ立てたりける。  
本間は前に立ち相馬は後に立ちて、月を射ば天の恐も有りぬべし兩方のはづれを  
射んとするぞと約束して、本間はたと射れば相馬もはたと射る。矢所約束に不違  
中なる月をぞ残しける。其後百矢二腰取寄せて張かへの弓の寸引して相摸國住人  
本間孫四郎資氏下總國住人相馬四郎左衛門尉忠重二人此陣を固めて候ぞ、矢少々  
うけて物具の眞の程御覽候へと高らかに名乗りければ、後なる寄手三十萬騎誰追  
ふとしても無けれ共我先にとふためきて又本の陣へ引返す。如今矢軍計にて日を

寸引 素引に  
がへす 矢を引  
くなり 空に引



暮し夜を明かさば何年攻むとも山落つる事やはか可有と諸人攻めあぐんで思ひける處に、山徒金輪院の律師光澄が許より今木の少納言隆賢と申しける同宿をば使にて高豊前守に申しけるは、新田殿の被支候四明山の下は山上第一の難所にて候へば輒く攻破られん事難叶とこそ存じ候へ、能く物馴れて候はんずる西國方の兵を四五百人此隆賢に被相副無動寺の方より忍入り文殊樓の邊四王院の傍にて関を被揚候はゞ光澄與力の衆徒東西兩塔の間に旗をあげ関を合せて山門をば時の間に攻落し候べしとぞ申しける。あはれ山徒の中に御方する者一人なりとも出來あれかしと念願しける處に隆賢忍びやかに來、夜討すべき様を申しければ、高豊前守大に喜びて播磨美作備前備中四ヶ國の勢の中より夜討に馴れたる兵五百余人をすぐりて六月十八日の夕間に四明の嶺へぞ上せける。隆賢多年の案内者なる上敵の有所無所委しく見置きたる事なれば少しも道に迷ふべきにては無かりけるが天罰にてや有りけん、俄に目くれ心迷ひて終夜四明の麓を北南へ迷ひありきける程に夜已に明けたれば紀清兩黨に見付けられて中に取籠められける間後なる武者

山徒の號云々  
山徒即叡山  
の衆徒といふ  
名に對して之  
を宥恕するこ  
なり

共百餘人討たれて谷底へ皆ころび落ちぬ。隆賢一人は深手数ヶ所負ひて腹を切らんとしけるが上帶を解く隙に被組て生虜られにけり。大逆の張本なれば懸てこそ斬らるべかりしを大將、山徒の號に宥恕して御方にある一族の中に遣はされ、生けておかん共殺されんとも意に可任と被仰ければ今木中務丞範顯畏まりて承り候とて則使者の見ける前にて其首を刎ねてぞ捨てたりける。忝くも萬乘の聖主醫王山王の擁護を御憑み有りて臨幸なりたる故に三千の兵徒悉く佛法と王法と可相比理を存して二心なく忠戰を致す處に、金輪院一人山徒の身として我山を背き武士の家に非ずして將軍に屬し、剩へ弟子同宿を出し立て山門を亡さんと企てける心の裡こそ淺ましけれ。されば惡逆忽に顯はれて手引しつる同宿共或は討たれ或は生虜られぬ。光澄は無幾程して最愛の子に殺されぬ。其子は又一腹一生の弟に討たれて世に類なき不思議を顯しける神罰の程こそ怖しけれ。さる程に越前守護尾張守高經北陸道の勢を率して仰木より押寄せて横川を可攻と聞えければ楞嚴院九谷の衆徒處々のつまり〜に關を拵へ逆木を引きて要害を構へける。其

仰木 磁賀郡  
村即横川  
の麓



山王の神威

大八王子日吉神社の攝社に即八王子社にて牛尾神社

本地の内證妙天台の極證妙理なり

頃大師の御廟修造の爲とて材木を多く山上に引上せたりけるを櫓の柱矢間の板にせんとて坂中へぞ運びける。其日般若院の法印が許に召仕へける童俄に物に狂ひて様々の事を口走りけるが、我に大八王子の權現つかせ給ひたりと名乗りて、此御廟の材木急ぎ本の處へ返し運ぶべしとぞ申しける。大衆之を不審して誠に八王子權現のつかせ給ひたる物ならば本地の内證朗にして諸教の通儀明らかなるべしとて古來碩學の相承し來る一念三千の法門、唯受一人の口訣共を様々にぞ問ひたりける。此童からくくと打笑ひて、我和光の塵に交る事久しくして三世了達の智も淺く成りぬといへども如來出世の御時會座えざに列りて聞きし事なればあらく云ひて聞かせんとて大衆の立てつる處の不審一々に言に花をさかせ理に玉を聯ねて答へける。大衆皆之に信を取りて重ねて山門の安否、軍の勝負を問ふに、此物つき涙をばら／＼と流して申しけるは、我内には圓宗の教法を守り外には百王の鎮護を致さん爲に當山開基の初より跡を垂れし事なれば、何にも吾山の繁昌朝廷の靜謐をこそ心にかけて思ふ事なれども叡慮の向ふ所も富貴榮耀の爲にして理民治世

物つき物愚即この狂童をいふ圓宗天台宗の教は中道不偏の理といふより圓教ともいふ

諸天善神護法の善神等といふ四所三聖日吉社のいづける神々なますもとより垂迹説

早尾大行事山王二十一社といへるその内の神の名

の政に非ず衆徒の願ふ心も皆驕奢放逸の基にして佛法紹隆の爲に非ざる間諸天善神も擁護の手を休め四所三聖も加被の力を不被回悲哉今より後、朝儀久しく塗炭に落ちて公卿大臣蠻夷の奴となり國主遙に帝都を去りて臣は君を殺し子は父を殺す世にならんずる事の淺ましき大逆の積り却りて其身を謫むる事なれば逆臣猛威を振はん事も又久しからじ嗚呼恨めしや師重が吾山を攻落して堂舍佛閣を燒拂はんと議する事看よ／＼人々明日の午の尅に早尾大行事を差遣して逆徒を四方に退けんずる者を此上は我山に何の怖畏か可有、其材木皆元の如く運び返せと託宣して此童四五人して持つ程なる大木を一つ打被き御廟の前に打捨て、手足を縮めて振ひけるが明日の午尅に敵を追拂ふべしと云ふ神託餘に事遠からで誠とも覺えず一事も若し相違せば申す處皆虚説になるべし暫く明日の様を見て思合する事あらば後日にこそ奏聞を經めと申して其日の奏しごとを止めければ神託空しく衆徒の胸中に藏められて知る人更に無かりけり。山門には西坂に軍あらば本院の鐘をつき東坂本に合戦あらば生源寺の鐘を鳴らすべしと方々の約束を定めたりける。



猿は日吉社の神使

山門攻附日吉神託

二二四

爰に六月廿日の早旦に早尾社の猿共數多群來て生源寺の鐘を東西兩塔に響渡る程こそ撞きたりけれ。諸方の官軍九院の衆徒之を聞きてすはや合圖の鐘をならす、さらば攻口へ馳向ひて防がんとて我劣らじと渡合ふ。東西の寄手此形勢を見て山より逆寄によするぞと心得て水飲今路八瀬・藪里志賀・唐崎・大津松本の寄手共楯よ物具よと周章色めきける間官軍之に利を得て山上坂本の勢十萬餘騎木戸を開き逆木を引退けて打出でたりける。寄手の大將踏留まりて敵は小勢ぞ引きて討たるなきたなし返せと下知して暫く支へたりけれども引立ちたる大勢なれば一足も不<sub>レ</sub>留、脇屋右衛門佐義助の兵五千餘騎志賀の閻魔堂の邊に有りける敵の向ひ城に五百ヶ所の東西に火をかけてをめき叫びて揉みたりける。敵陣こゝより破れて寄手の百八十萬騎さしも險しき今路古道音無の瀧白鳥三石大嶽より人なだれをつかせてぞ逃げたりける。谷深くして行先つまりたる所なれば人馬上が上に落重りて死ける有様は傳へ聞く治承の古へ平家十萬餘騎の兵木曾が夜討に被懸立て栗殼が谷に埋れけるも之には過ぎじと覺えたり大將高豊前守は太腹を我太刀に突貫きて

栗から木曾義仲が平家の兵をかき落したる處

重衡の例治承四年重衡奈良東大寺を焼く後頼朝に捕へらるに及び東大寺之を請ひて斬る事をいふ猶子義子をいふ

引兼ねたりけるを舟田長門守が手の者之を生虜り白晝に東坂本を渡し大將新田左中將の前に面縛す。是は佛敵神敵の最たれば重衡卿の例に任すべしとて山門の大衆之を申請けて即唐崎の濱に首を刎ねてぞ被懸ける。此豊前守は將軍の執事高武藏守師直が猶子の弟にて一方の大將を承る程の者なれば身に代らんと思ふ者共幾千萬といふ數を知らず、然れども若黨の一人も無くして無<sub>二</sub>云甲斐敵に被生捕<sub>一</sub>けるは偏に醫王山王の御罰なりけりと今日は昨日の神託によりけるにやと被思合て身の毛も彌立つばかり也。

### 落花の雪

太平記

落花の雪に踏み迷ふ交野<sup>かたの</sup>の春の櫻狩、紅葉の錦きてかへる嵐の山の秋の暮、一夜をあかす程だにも旅寐となれば物憂きに、恩愛の契淺からぬ我故郷の妻子をば行くへも知らず思ひおき、年久しくも住み馴れし九重の帝都をば、今を限りとかへりみて思はぬ旅に出で給ふ心の中ぞ哀れなる。

落花の雪

二二五

此文は藤原俊基朝臣鎌倉へ檻送せられたる道行



近江路

憂きをばとめぬ逢阪の關の清水に袖ぬれて末は山路を打出の濱、沖を遙に見渡せばしほならぬ海にこがれ行く身を浮舟の浮沈み、駒もどろどろと踏鳴らす勢多の長橋打わたり、行きかふ人にあふみ路や、世をうねの野に鳴く鶴も子を思ふかと哀れなり。時雨もいたくもり山の木の下露に袖ぬれて、風に露散る篠原や、篠分くる道をすぎ行ければ鏡の山はありとても涙に曇りて見えわかず。物を思へば夜の間にもおいその森の下草に駒をどどめて顧る故郷を雲や隔つらむ。番場・醒井・柏原・不破の關屋は荒果て、猶もるものは秋の雨の、いつか我みのをはりなる熱田の八劔伏拜み、潮干に今やなるみ潟傾く月に路みえて、明けぬ暮れぬと行く道の末はいづくと遠江、濱名の橋の夕潮に引く人もなき捨小舟、沈みはてぬる身にすれば、誰か哀れとゆふ暮の入相なれば今はとて池田宿につき給ふ。

神輿振

平家物語

山門 延曆寺  
をいふ

さる程に山門には國司加賀守師高を流罪に處せられ、目代近藤判官師經を禁獄せら

日吉祭禮坂  
本の日吉神社  
の祭をいふ  
十禪師 客人  
八王子の三社  
も日吉神社  
の攝社  
山法師 敬願

らるべきよし奏聞度々に及ぶといへども、御裁許なかりければ、日吉の祭禮を打止めて、安元三年四月十三日の辰の一點に十禪師權現まらうと八王子三社の神輿を飾り奉りて陣頭へ振上げ奉る。下松・切堤・鴨の川原たゞす・梅忠・柳原東北院の邊に神人・宮仕・白大衆せんどう満ち／＼て幾らといふ數を知らず。神輿は一條を西へ入らせ給ふに、御神寶天に輝きて日月地に落ち給ふかと驚かる。是によつて源平兩家の大軍に仰せて四方の陣頭を固めて大衆防ぐべきよし仰せ下さる。平家には小松の内大臣の左大將重盛、その勢三千餘騎にて大宮表の陽明・待賢・郁芳三つの門を固め給ふ。弟宗盛・知盛・重衡・伯父頼盛・教盛・經盛などは西南の門を固め給ふ。源氏には大内守護の源三位頼政、郎黨には渡邊省授を先としてその勢僅に三百餘騎、北の門・縫殿の陣を固め給ふ。所は廣し勢は少し、疎にこそ見えたりけれ。大衆無勢たるによりて北の門・縫殿の陣より神輿を入れ奉らんとするに、頼政の卿さる人にて急ぎ馬より飛び下り、甲をぬぎ、手洗、うがひして神輿を拜し奉らる。兵ども、皆此の如し。頼政の卿より大衆の中へ使者を立て、言送らる、

神輿振



旨あり。その使は渡邊の長七さかや唱とぞ聞えし。唱その日の装束にはきちんの直垂に小櫻を黄にかへしたる鎧着て、赤銅作の太刀を佩き、二十四さいたる白羽の矢負ひ、重藤の弓脇に挟み、甲をばぬいで、高紐に掛け、神輿の御前に畏つて、「暫くしづませ候へ。源三位殿より衆徒の御中へ申せと候ふ。」とて、「今度山門の御訴訟、理運の條勿論に候ふ。御裁断遅々こそはよそにても遺恨に覺え候へ。神輿入れ奉らんこと仔細に及び候はず。但し頼政無勢に候ふ。明けて入れ奉る陣より入らせ給ひなば山門の大衆は目垂めたれがほ顔しけりなご京童の申さんこと後日の難にや候はんすらん。あけて入れ奉れば宣旨を背くに似たり。又拒ぎ奉らんとすれば、年比醫王山王に頭を傾けて候ふ身が今日より後永く弓矢の道に分れ候ひなんす。彼といひ是といひ旁々難地のやうに覺え候ふ。東の陣頭をば小松殿の大勢にて固められて候ふ。其の陣より入らせ給ふべうもや候ふらん。」と言送りたりければ、唱がかくいふに拒がれて神人宮仕暫くゆらへたり。若大衆わかたいしゆう惡僧ども、「何でうその義あるべき。只此の陣より神輿を入れ奉れや。」といふやから多かりけれども、爰

醫王  
山王  
藥師佛  
日吉の  
神

に老僧の中に三塔一の先座者と聞えし攝津の律者豪運進み出で、申しけるは、「此の義げに言はれたり。我等神輿を先立て參らせて訴訟をいたさば、大勢の中を打破りてこそ後代の聞えもあらんすれ。就中この頼政の卿は六孫王より以來源氏嫡々の正統、弓矢を取つても未だ其の不覺を聞かず。凡そは武藝にも限らず、歌道にも又勝れたる男なり。一年、近衛院御在位の御時、當座の御會のありしに「深山の花」といふ題を出されたりけるに、人々皆詠み煩はれたりしを頼政卿「深山木のその梢とも見えざりし櫻ははなにあらはれにけり」といふ名歌仕つて、御感に預る程のやさ男にかゞ時に臨みてなさけなう耻辱をば與ふべき。只神輿かき返し奉れや。」と詮議したりければ、數千の大衆先陣より後陣まで皆「尤も尤も」を同じける。さて神輿かき返し奉り東の陣頭、待賢門より入れ奉らんとしけるに、狼藉忽ちに出で來て武士どもさんくんに射奉る。十禪師の神輿にも矢ども數多射立てけり。神人宮仕射殺され、衆徒多く傷を被つてをめき叫ぶ聲は梵天までも聞え堅牢地神も驚き給ふらんとぞ覺えける。大衆神輿をば陣頭に振立て奉り、



泣く／＼本山へぞかへり上りける。

### 三井寺炎上

平家物語

源頼政以仁王を奉じて兵を擧げし時の事なり  
宮高倉宮以仁王をいふ

治承四年

日頃は山門の大衆こそ、發向のみだりがはしき訴仕るに、今度はいかゞ思ひけん穩便を存じて音もせず。然るを南都三井寺同心して、或は宮受取り參らせ或は御迎に參る條是以て朝敵なり。然らば奈良をも寺をも責めらるべしと聞えしが、先づ三井寺を責めらるべしとて、同じて五月二十七日、大將軍には左兵衛督知盛、副將軍には薩摩守忠度、都合其勢一萬餘騎、園城寺へ發向す。寺にも大衆一千人、甲の緒をしめ、垣楯かき、逆木引きて待ちかけたり。卯の刻より矢合せして一日戦ひ暮し、夜に入りければ大衆以下法師原に至るまで、三百餘人討たれぬ。夜軍になりて闇さはくらし、官軍寺中に責め入りて火を放つ。焼くる所は本覺院・成喜院・真如院・花園院・大寶院・清瀧院・普賢堂敬待和尚けうだいくわしやうの本坊、並に本尊等、八間四面の大講堂・鐘樓・經藏・灌頂堂・護法善神の社壇、新熊野の御寶殿すべて堂舎

三井寺焼亡

三井寺縁起  
大領 滋賀郡 司

顯密 顯教密  
教 三密 身口意  
の三行

塔廟  
たうめう六百三十七宇、大津の在家一千八百五十三宇、並に智證の渡し給へる一切經七千餘卷佛像二千餘體忽ち烟となるこそ悲しけれ。諸天五妙の樂もこの時永くつき、龍神三熱の苦も愈盛なるらんとぞ見えし。それ三井寺は近江の擬大領が私の寺たりしを、天武天皇に寄せ奉りて御願となす。本佛もかの御門の御本尊、然るを生身の彌勒しやうじんと聞え給ひし、教待和尚百六十年行ひて大師に附屬し給へり。都史多天摩尼寶殿上摩尼寶殿としたり、遂に龍華下生の曉を待たせ給ふとこそ聞えつるにこそ如何にしつる事どもぞや。大師この所を傳法灌頂の靈跡として、井花水の三つをむすび給ひし故にこそ三井寺とは名づけたれ。かゝるめでたき聖跡なれども今は何ならず。顯密須臾に亡びて、伽藍更に跡もなし。三密道場もなければ鈴の聲も聞えず。一夏の花もなければあかの音もせざりけり。宿老碩徳の名師は行學に怠り、受法相承の弟子はまた經教に別れたり。寺の長吏圓慶法親王は天王寺の別當をも止められさせ給ふ。其外僧綱十三人闕官せられて皆檢非違使に預けらる。堂衆は筒井の淨妙明秀に至るまで、三十餘人流されけり。かゝる

三井寺炎上



天下のみだれ國土のさわざ徒事ともおぼえず、平家の世の末になりぬる、先表やらんとぞ人申しける。

竹生島詣

平家物語

この出征は木曾義仲を討つため北國に向へるをいふ貝津今の高島郡海津村

竹生島

大將軍維盛通盛は進み給へども、副將軍忠度、經正、清房、知度などは未近江の國鹽津貝津に控へ給へり。中にも皇后宮亮經正は幼少の時より詩歌管絃の道に長じ給へる人にておはしければ、かゝる亂の中にも心をすまし、或朝湖のはたに打ち出で遙の沖なる島を見渡して、供に候兵衛承有範を召してあれはいかなる島ぞと問ひ給へば、あれこそ聞えし竹生島にて候へと申しければ、經正さることありいざや參らんとて、藤兵衛允有範、安藤衛門允盛範以下侍六人召し具して、小舟に乗り竹生島へぞ參られける。比は卯月中の八日なれば、縁に見ゆる梢には春の情を残すかと疑はれ、澗谷の鶯舌の聲老いて初音ゆかしき子規、折しり顔に告げわたり、松に藤なみ咲きかゝりて誠に面白かりければ、經正急ぎ船より下り岸に

上りて此島の景色を見給ふに、心も詞も及ばれず。かの秦皇漢武或は童男卯女を遣し、或は方士を不死の薬を求めに遣して蓬萊を見ざればいなや歸らじといひて徒に船の中にて老い、天水茫茫として求むる事を得ざりけん蓬萊洞の有様も是には過ぎしとぞ見えし。或經の文にいはいく、閻浮提の中に湖あり、其中に金輪際こんりんさいより生ひ出でたる水精輪の山あり、天女住む所といへり。則ち此島の御事なりとて、經正明神の御前につい居給へり。それ大辨功德天は往古の如來法身の大士なり。妙音辨財二天の名は各別なりとは申せども、本地一體にして衆生を濟度し給へり。一度參詣のともがらは所願成就圓滿すと承れば頼もしうこそ候へとて、靜に法施參らせて居給へば、やう／＼日暮れ居待の月さし出で、海上も照りわたり、社壇も彌輝きて誠に面白かりければ、常住の僧是は聞ゆる御事なりとて御琵琶を奉る。經正これを取りて彈き給ふに、上玄石上の祕曲には宮の中も澄みわたり、實に面白かりければ、明神も感應に堪へずや思しけん、經正の袖の上に白龍現じて見え給へり。經正あまりのかたじけなさに暫く御琵琶をさしおかせ給ひて、か

居待月十八夜の月なり



うぞ思ひつゞけらる「千はやふる神にいのりのかなへばやしらくも色のあらはれにけり」目の前にて朝の怨敵を平げ、凶徒を退けんことは疑ひなしとよろこびて又船に乗り、竹生島をぞ出でられける。ありがたかりし事ごもなり。

### 粟津の合戦

源平盛衰記

木曾義仲を討伐する源範頼義経の上れる條なり

國分寺の毘沙門堂今無し

範頼は勢多の手に向ひ給ひたりけれ共、橋は引かれぬ底は深し渡るべき様なれば、稻毛三郎重成、榛谷四郎重朝を先として田上の貢御瀬を渡しつゝ、石山通に攻上る。今井四郎兼平、五百餘騎にて國分寺の毘沙門堂に陣を取りたりけるが、出合ひ防ぎ戦ひけり。方等三郎先生義弘此處にして討たれぬ。三萬餘騎の兵、雲霞の如くに重なりければ、如何にも防ぎ難かりける上に、宇治の手已に敗れて軍兵都へ亂入ると聞えければ、兼平心弱く覺えて、木曾殿は北國へぞ赴き給ふらんと思ひければ、湖の西の渚を三百餘騎にて北へ向けて歩み行く。義仲は關山關寺打過ぎて南を指して行く程に、粟津濱にて行合ひぬ。木曾云ひけるは「都にて何に

粟津合戦

も成るべかりつるに今一度互に相見んとて多くの敵に後を見せ是まで來れり」と語りて涙ぐみけり。今井も「勢多にて如何にも成るべう候ひつれども御同後のたしなみなく侍りて是まで遁れ参りたり」と申しけり。義仲兼平馬を打並べて宣ひける「川原の合戦に高梨、仁科、根井も討たれぬ。身も己に疵をを蒙りて、心疲れ力盡きて、進退歩を失ふ。敵の爲に得らるゝ事名將の恥也、軍破れ自害するは猛將の法也」と申しければ、兼平申しけるは「勇士は食せざるも飢ゑず、疵を被りて屈せず、將軍は難を遁れて勝を求め、死を去りて恥を決す、就中平氏西海に在す、將軍北州に入り給はば、天下三に分れ海内亂發せんか、先急いで越前の國府まで遁れ給へ、兼平此にて敵を相禦ぐべし」と云ひて旗を擧ぐ。義仲が隨兵共多くは北國の輩なれば、北を指して落ちけるが、旗の脚を見て五十騎三十騎此彼より馳集まる。勢多より落來る者、二十騎三十騎集まり加はりければ四五百騎に及べり。兼平力を得、左右を顧みていはく「各恩を報じて命を棄てん事此時にあり、禦矢射て延し奉らん」と申しければ、五百餘騎の輩、心を一にして西の山を

粟津の合戦



後に當て、東の濱を前に得て、馬の足を輕うして、矢筈を取りける程に、武石三郎胤盛、猪俣金平六範綱等を始として七百餘騎、攻來つて関の聲を發す。兼平已下の軍士、又聲を合す。木曾宣ひけるは、「此等源氏の郎等共我と思はん若者共、蒐出で、追ひ散せ」と下知し給ひければ、二河次郎頼重と云ふ者三十餘騎にて鞭を打つて敵の中へわたり入つて、兩方互に亂れ合うて相戦ふ。範綱已下の輩、小勢を押裏み中に取籠めてければ、頼重を始として漏れず皆討捕られにけり。其後甲斐の源氏に一條次郎忠頼、板垣三郎兼信、七千餘騎にて先陣に進み粟津濱に打出でたり。木曾は赤地の錦の鎧直垂うすがねに薄金といふ鎧著て射殘したる護田鳥尾たごりの矢負ひて歩ばせ出して名乗りけるは、「清和帝に十代の後胤、六條判官爲義には孫、帶刀先生義賢が次男木曾左馬頭兼伊豫守、今は朝日將軍源義仲、生年三十七。甲斐の一條と見るは僻事か、雜人の手にかけんより組めや組め」とて轡を並べて踰しやうたり。一條次郎忠頼も「同じ流の源に伊豫守頼義の三男新羅三郎義光が孫、武田太郎信義が嫡子一條次郎忠頼、同じく三郎兼信、兄弟二人」と名乗つて進出で

跟跡  
ふたいふ  
たいた

つゝ木曾と一條と魚鱗鶴翼の戦をぞ並べたる。一條忠頼は鶴翼の戦とて、鶴の翼をひろげたるが如くに勢をあはらに立てなして、小勢の中に取籠めんとぞ構へたる。木曾義仲は魚鱗の戦とて魚の鱗をならべたるが如くに、さきは細く中ふくらにこそ立てたりけれ。一條、板垣は甲斐の源氏、木曾義仲は信濃の源氏也、共に清和の苗裔、同じく多田の後胤也。一門弓箭を合せ、同姓勝負を決せんとす。義仲魚鱗の構にて五百餘騎轡を並べてさと蒐入りたれば、忠頼鶴翼の支度にて大勢の中に小勢をくるりと巻き、馳合せ馳却き戦ひたり。義仲は「今を限の軍也、いつまで命を惜しむべき、一條次郎よき敵ぞ、あますな者共とて蒐破りては出で喚いては入り、五六度まで戦ひてつと抜けて出でたれば、二百餘騎は討たれにけり。

次に同じき甲斐の源氏に武田太郎信義、加々見次郎遠光、兄弟二人大將軍にて二千餘騎、木曾を中に取籠めて散々に戦ふ。かけ入りかけ出でて四廻五廻戦ひて先へ抜けて見れば、八十餘騎は討たれにけり。



次に同じき國の源氏に逸見四郎有義、伊澤五郎信光、兄弟二人從弟に小笠原小次郎長清、三人大將軍にて三十餘騎木曾を中に取籠めて戦ふ。追入り追出し、一時戦ひて駈抜けて見れば五千餘騎は討たれにけり。

次に武藏國の住人稻毛三郎重成、榛谷三郎重朝、兄弟二人大將として三千餘騎、木曾を中に取籠めてあますなどて散々に戦ふ。蛛手十文字にかけ破りて、つと抜けて見たれば、五十餘騎は討たれにけり。

次に下總國の住人千葉常胤大將軍にて三千餘騎、木曾を中に取籠めて遁すな者共とて透間なくこそ戦ひたれ、思切りたる木曾なれば、命も惜まず振舞ひけり。散々にかけて破つて後へ通つて見たれば、七十餘騎は討たれて僅に二十騎にぞ成りける。

次に大將軍蒲冠者範頼七千餘騎にて木曾を中に取籠めて、ましぐらにこそ戦ひたれ。木曾は此の大勢を追返しつゝ、粟津原より打出濱まで引退き引退きこそ堪へたれ。二十餘騎とは見えしかど、落ちぬ討たれぬする程に、主從五騎に成りた

りけるが、信濃國の住人手塚太郎討たれければ、手塚別當も落ちにけり。上野國の住人多胡次郎家包と名乗つて討出でければ、大勢の中を打廻り「我と思はん人々は家包討捕りて勳功の賞に預れや」と云ひて散々に切廻りけり。鎌倉殿兵共に相觸れて多胡次郎家包木曾に付いて在る也。相構へて虜つて進らせよと仰含められたりければ、家包は大に狂廻り切廻りけれ共、軍兵は疵を付けじと射もせず切りもせず、手をひろげて取らんくとしけるこそ由々しき大事なれ。兵の中に「家包冑を脱ぎ太刀を納めて降人に參れ。助けん、木曾殿も今は主從三騎也、和君一人命を棄てたりとて木曾殿軍に勝ち給ふべしや、唯降人に參れ由なしく」と云ひければ、家包申しけるは「弓矢取る身は主は二人持たず、軍の習、討死は期する處也命を惜み降人に成つてかく云ふ人々に面を合すべしや、正なしく、教訓も事によるべし、其よりも只寄せ組んで討取り給へや殿原」とて斬廻りけれども、大勢鞍を傾けて押寄せ終に生捕にけり。

去年六月に木曾北陸道を上りしには、五萬餘騎と聞えしに、今四宮河原を落ちけり



るには只七騎には過ぎざりけり。粟津の軍の終には心は猛く思へ共、運の極めの悲しさは主従二騎に成りにけり。まして中有の旅の空、獨行くなる道なれば想像こそ哀なれ。木曾殿鎧踏張り弓杖衝きて今井に宣ひけるは「日来は何と思はぬ薄金がなごやらん重く覺ゆる也」と宣へば、兼平「何條さる事侍るべき、日頃に金もまさらず、別に重き物をも付けず御年三十七、御身盛也、御方に勢のなければ臆し給ふにや。兼平一人をば餘の者千騎萬騎とも思召し候ふべし終に死すべき物故にわるびれ見え給ふな。あの向ふの岡に見ゆる一村の松の下に立ち寄り給ひて心靜に念佛申して御自害候へ。其程は防矢仕りて懸て御伴申すべし。あの松の下へは廻らば三町、直には一町はよもあらし急ぎ給へ」と泣々涙を押へくごきければ、木曾は別を惜しみつ、「都にて如何にも成るべかりつれ共、此まで落ちきつるは汝と一所に死なんと也。何處迄も同じ枕に討死せんと思ふ也」と宣へば、今井「いかにかくは宣ふぞ。君自害し給はゞ、兼平即ち討死也。さすが大將軍の宣旨を蒙る程の人、雜人の中に打伏せられて首を取られん事心憂かるべし、疾々落

## 義仲の最後

ち給ひて御自害あるべし」と勧めければ、木曾誠にと思ひ向の岡の松を指して駆行きけり。今井は木曾を先に立て、引返し、命も惜まず戦ひけり。木曾は今井を振捨て、暇に任せて歩せ行く。比は元暦元年正月廿日の事なれば、峯の白雪深くして谷の氷も解けざりけり。向の岡へ筋違すぢがひにと志す。つら、むすべる田を横に打つ程に。深田に馬を馳せ入れて打てごも、行かざりけり。馬も弱り主も疲れたりければ兎角すれ共甲斐ぞなき木曾は今井やつとくと思ひつ、後へ見返りたりけるを、相模國の住人石田小太郎爲久がよつ引いて放つ矢に、内冑を射させて眞額を馬の頭に當て、俛うつむしに伏しにけり。爲久が郎等二人馬より飛んで下り深田に入りて木曾を引落し、やがて首をぞ取りてける。今井是を見て今ぞ最後の命なる、急ぎ御供に參らんとて、進出でて申しけるは「日比は音にも聞きけん今は目にも見よ。信濃國の住人仲三權頭兼遠が四男、朝日將軍の御乳母子今井四郎兼平也。鎌倉殿までも知召したる兼平ぞ、首取つて見參に入れよや」とて數百騎の中に蒐入つて散々に戦ひけれ共、大方の剛の者なりければ寄つて組む者はなし、唯開い

## 兼平の最後



て遠矢にのみぞ射ける。されども甲よければ裏かゝず、あきまを射ねば手も負はず。兼平は箆にのこる八筋の矢にて八騎射落しける。太刀を抜いて申しけるは「日本一の剛の者、主の御供に自害する、見習へや東八箇國の殿原」とて太刀の切鋒きつさき口にくはへ、馬より逆に落ち貫きてぞ死ににける。兼平自害して後は粟津の軍も無かりけり。



義仲寺

□□ □□ □□



矢橋歸帆

### 小説

#### 中江藤樹の母の手紙

村井 弦 齋

近江聖人として藤樹先生の少年時代を想像して描けるものも亦然り  
藤太郎 藤樹先生の幼名とす  
藤樹の母

鴉の海荒れて追々寒さに向ひ候へども、四國は暖き土地とこそ承り及び候へば、皆々様には益御機嫌好く在らせられめでたき御事に存じ参らせ候。豫て御願ひ申上げ参らし、藤太郎事は其の後如何暮し居り候か。祖父上様の御仕立にて武藝學問日に増し上達の事と蔭ながら楽しみ居り候へども、若し御教訓に従ひ参らせずば御容赦なく厳しき折檻御加へ下され度、又此の後何年相立ち候とも人がましき者にならぬ内は決して故郷に立歸り申すまじくくれくも御傳へ下され度候。中途にて立戻り候はゞ此の母は決して逢ひ申すまじ。孟母の賢には及ばずとも斷機の教は守る覺悟にて候へば、何卒藤太郎が一心に出精致す様、朝夕其の事をのみ祈り参らせ候。私事も今は頼り無き身の佗住び、夫に別れ子に離れて俄に心淋し



くは覺え侍れども馴れぬ水仕業の忙はしきに少しは心を紛らし居り候。唯差當り誠にく、難儀致し候は今迄習はぬ下世話の仕事にていとゞ身體も弱り行き、其の上先頃よりあかすれ戰ごか申すものゝ手にも足にも幾つと無く出來侍りて、皮は破れ肉は裂け雪の朝霜の夕なんごには殊更痛みを覺え申候。色々藥なんごも用ひ侍りしが更に何の効驗なく寒さの加はるに連れて痛みも益烈しく相成り、馴れぬ身の苦しさに始めて水仕事の辛さを悟り候。是も今迄容赦なく人を使ひて榮華の夢に誇りし天罰にや候はん。さりながら是程の事は固より憂しとも思ひ候はず。唯何事を忍びても頼むは我が子の行末のみ。あはれ藤太郎が人がましき者に相成らばわらはの身に取りて此上の樂みの候べき。祖父上様を師とも父とも頼み參らせて偏に御教訓に従ひ申すべき様くれぐれも御傳へ下され度願ひ上げ參らせ候。

(近江聖人)

中江藤樹

村井弦齋

比良山

雪ならば幾度袖を拂はまし花のふどきの滋賀の山越それは彌生の春の頃櫻狩して行く道の眺めも飽かぬ旅なれども、是は習はぬ冬の旅花のふどきのそれならで霏々たる雪は道を没し凜冽たる風膚を裂く辛苦の中に滋賀の山を打越ゆれば满目蕭條たる湖上の風景。辛崎の松は暮靄々々の間に隠れて堅田に落つる雁の聲のみ寒く鳴渡る。見渡せば白雪皚々たる比良の雪今より此の山路に懸らば山中にて日は暮れん。足の進み難きに坂本の邊にて宿りを求めんかと獨旅の少年は前路を睨んで暫く湖畔に立ちたりしが、稍ありて思ひ返し彼の山を越ゆれば我が故郷今一息にて母君の許に着くなるに何とて空しく此處に留らん。夜にてもあれ朝にてもあれ家に歸らんに疲れは厭はじ、いでく心を取直して今宵の中に此の山を越えんものをと再び足を踏みしめて薄暗き山路へこそはかゝりけれ。

痛はしや藤太郎、母に逢ひたき一心より踏みも習はぬ山路を杖に縋りて唯一人辿りく行く道の岩に躓き木の根に倒れ、血さへ足より流れ出で道の邊の雪を紅



に染めながら猶も心を勵まして風雪の中を登り行く。懸て日は暮れたり。闇の夜ながら雪明りに道は見ゆれど彌増す寒さは骨に徹りて手も足も凍るばかり、寂寥たる満山耳に應ふる物とては閉ぢし氷の下潜る細谷川の水の音杉の枯葉を鳴す風。或は積雪梢を壓して枝折れ、雪の落つる響なんど幽かに物凄く聞えて怖しとも悲しとも譬へん様無し。斯る難所と知りもせば麓にて一夜を明かせしものを旅馴れぬ身の悲しさに足に任せて此の深山路へかゝりしが、今は足疲れ身體凍りて先へも出られず後へも戻られず。少年は進退谷りて半ば死せるものゝ如く松の根方に打倒れたり。其の儘息を休らひて起きも上らず降る雪を恨めし氣に眺めてありけるが、腹は次第に餓を感じて寒さは一入身に浸渡る。あはれ斯る時に熱羹一碗を恵まれなば千金の賜にも増して嬉しからんと、よし無き事を思ひ續けて其の儘眠るとも無く死ぬるとも無く前後も知らずなりにけり。やゝありて耳許に人の呼ぶ聲す。少年は幽かに眼を開けば身は辻堂の縁に在り。我を呼びしは年老いたる一人の老僧なりけり。僧の側に小牛の如き黒犬一頭さも

小川 藤樹先  
生の生まれし  
今の高島郡青  
柳村大字上小  
川ないふ

れどなしさうに控へ居り縁の前に焚火の灰僅に残れり。老僧は少年の心付きしを悦びて「和子は何れの里の子ぞ。なごて吹雪烈しき此の山中に夜を冒して唯一人覺束なくも來り給ふ。我が身が御身を助けずば御身は雪に凍れて死なれんものを」と問ふに、少年は幾度も恩を謝し「我が身は此山の彼方なる小川の里まで行くものなるが、母に逢ひたき心より夜を冒して此の山路に分入り雪に凍れて前後も知らず倒れしをさては貴僧に助けられしか」老僧は頷きて「吾は此の辻堂の堂守なるが毎年冬の半ばには此の山中にて旅人の雪に凍えて倒るゝものある故に常に一頭の犬を蓄ひて山中の道を尋ねさせ、倒れたる人あれば歸りて我が身に知らせしむ。今宵は雪も烈しく深ければ今頃旅人のあらん様無しと臥處を設けて寝る程無く、此犬急に駈來り頻りに吠わて我が身を起すより何事ならんと此の先の道に降りしに御身の凍えて倒れたるあり。見れば年もまだ幼きに長途の旅に惱みしと見え足さへ破れて痛しき有様、早速こゝまで擔ぎ來て藁火にあてゝ暖めし故氣が付きて仕合せなり。小川の里は此の山の麓より程近けれども今宵は此處に休ら



ひて夜明けなば山を下られよ」と懇に説き諭し粥など暖めて少年に薦めたり。少年は老僧の恵にて漸く我に復りぬ。此處にて足を休むること暫しにて老僧の尙頻りに止むるも聞かず、はや曉に間も無しとて此の辻堂を立出でたり。老僧は行先を懸念して「然らば麓まで犬に送らせん」と彼黒犬に其の意を傳ふれば、犬はよく／＼人の心を悟り尾を振りながら少年の後に附いて行く。漸くにして東方は少し白みたり。雪は猶歇まざれども里に近ければ道も險しからず。少年はその犬を呼び「これ犬や是まで来ればもうよいよ。早く歸つて休むがよい。やれ／＼御苦勞であつた」と犬の頭を撫で言葉優しく言聞かすれば、犬は其心を悟りけん少年の顔をちつと見て忽ち足を後に返し、此の度は一目散に山上に駆登りぬ。少年は其の姿を見送り罪の無いものよと獨り打笑み、其の身も急ぎ麓に降りて懸て志す小川の里に着きにけり。

## 高島郡小川

懐かしの故郷や。藤太郎は昔覚えし山川草木を眼の前に見て忽ち足の疲れも打忘れ、路を急ぎて我が家の方に向ひけり。夜は漸く明けたれども雪空の寒さに閉ぢられて道々の家はまだ多く起出です。彼家は我が友の家なりけり、此家には我に優しき老人ありきなどと昔の事を憶ひ出で坐ろに哀れを催しつゝ、須臾にして我が家の前に来れり。見れば衡門舊に依りて立ちたれども半ば雨に朽ちてまた昔日の觀に非ず。柱も傾ける所あり、築地も崩れたる所あり。前庭の古松刈る人無ければ枝繁れり。修竹一叢思ふまゝに根芽を延ばせしと見え、彼方にも此方にも亂生して若き竹は雪に堪へざる風情あり。玄關の戸は未だ開かず。母人は未だ起出で給はぬにやあらんと築地の蔭より内に入りて勝手の方を見れば、車井の軋る音さも寒げに聞えて何人か水を汲めり。姿は確に母なる人。少年は忽ち胸塞がりぬ。昔は許多の男女を使ひ給ひて勝手などに出られし事なき母様が、此の雪の朝の寒天に自ら車井の水を汲み給ふか、情け無しと沸出る涙禁め敢へず急ぎ車井の側に駆行きて後より其の袂を引き「母様私が水を汲みませう。母様はお内へた入りあつて早く火にでもおあたり遊ばせ」と涙ながら取継る。事の不意なるより母なる人は驚きて振返り「誰だ。おや藤太郎か、どうして此處



へ」藤太郎は細き聲「はい母様の御手助を致しに参りました。お話は後で申し上げますから先づ内へお入り遊ばせ。あれお頭髮へ雪が掛ります。」と孝子の眞情、片時も此の雪中に立たしめたく無し。母は車井の繩を確と握りしまゝ石の如く立ち居りて「祖父様とでも御一緒か」藤太郎「いゝえ、獨りで御座います」母は聲を勵まし「祖父様が和郎をお出しなされたか」藤太郎「いゝえ、祖父様には知らせずに参りました」母は眉を揚げ「怪しかりません。何故そんな事を」颯と吹き來る朝嵐に地上の雪はくるくると捲揚げられて横に二人の顔を撲つ。母は屹然として動かす。藤太郎は何事か言はんとして顔を上げしが、ふと母の足を眺めて「おや御足が切れて血が、おゝ是こそ鞍で御座いますか」と俄に斷腸。母の疵を見るは我が身の背に白刃を加へらるゝよりも痛はしき心地して、忽ち懷中より彼の靈薬を取出し「母様是を貼けて御覽遊ばせ」と足許に進み寄る。

母は急に足を引きて怒の聲「足などはどうでもよい。何故和郎が歸つたか。其譯をお話しなさい」藤太郎は取付く使も無し「然らば家へ入りまして申し上げま

す」母は頭を振り「いゝえ、此處で聞きませう聞かないうちは滅多に家へ入れません」藤太郎は母の氣色の好からぬを見ていとし悲しく「母様何卒御堪忍遊ばしませ。私は祖父様から母様の馴れぬ水仕業をなされて御難儀遊ばす事を聞き、又鞆とか云ふものゝお出來なされて大層御惱み遊ばすと伺ひまして、せめて私が御側に居りましたら及ばずながら御手助けを致して母様にそれ程の御難儀をおさせ申すまいにと、急に此方へ歸りたくなりましたところ丁度人から鞍の妙薬のある所を教へられ、六里程ある新谷しんやと申す所まで参つて危急の場合に漸く其薬を貰ひ、それから其の足ですぐ此方へと志して始めて獨旅を致しましたが、途中の辛苦も人の情で漸く百里の道中を濟ませ、昨晚は比良の峰で雪に凍れて死ぬ所を情ある人に助けられて漸くこゝまで参りました」と語る。話半ばに母は思はず一聲歎すゝめ歎しが顔見らじと横を向く。藤太郎はなほ言葉を繼ぎ「是から私がお側に居りまして水も汲みまますし何事も致しますから、何卒母様には決して荒い事をなされまますな。豫てより御病身な御身體、若し御病氣でも起りましたは」と後言兼ねて







手に取らんとて下を向く。藤太郎は渡さんとして上を向く。見合はす顔、互の眼には涙一杯。母は恥かしてじつと耐ふる心の苦しさ。子は堪へざりけん薬を手より取落して下を向く。雪の上にはろく／＼と降りたる一雫。母は何思ひけん身を轉じて家に入り、何物をか取り來りて我が子に渡し「是は藥の代りに母が和郎に遺すのぢや。それを持つて祖父様の許へお歸りなさい」藤太郎は母の恵みの品を手に取り「是は金子」「途中の路用に」藤太郎は押戻し「私は路用がなくとも行かれます。それより母様が是で水仕の女でも」母は堰き來る涙を吞んで「要りません」と言放つ。雪は尙霏々として寒風に飛べり。母が汲置きし水を見ればいつの間に張りけん上は一面の氷となれり。斯る寒さに母様がと思へば藤太郎は立ちもやられざりしが、遂に心を勵まして泣く／＼我が家を立出でたり。見送る母、見返る子。満天の風雪路悠々。

(近江聖人)

## 安土の暗雲

萩野由之

織田信長

信長の部將明智光秀と云ふは美濃の土岐氏の支族である。弘治二年齋藤龍興が父の道三を弑した時、光秀の叔父光安は明智城で戦死したから光秀は光安の子の光春等一族等を連れて諸國を廻り歩き、永祿九年岐阜に赴いてはじめて織田信長に仕へた。光秀は根が才氣ある男だけに大いに信長の信用を得て、元龜二年には近江の坂本城に居て十萬石の領地を所有した。天正二年柴田勝家と力を協せて石山・堅田を攻め、功を以て従五位下に叙し日向守に任せられた。

明智光秀

かくて後信長の命に依つて惟任氏と改め領地を丹波の龜山に移された。折から波多野秀治を八上城に攻撃したが容易に降することが出来ない。光秀は種々策畧をめぐらした末、遂に自分の母を人質として強ひて和睦をなし、まんまと秀治を擒にして信長に送つた。光秀の考では餘程の恩賞があるだらうと喜んで居たに相違ない。すると信長は秀治を磔にして殺して了つたので、秀治の遺臣等は恨み骨髓に



徹しとう／＼光秀の母を殺したから、光秀はまた八上城を屠つて其の意趣返しをなし、且信長が前後の考へもなく秀治を慘殺した事を口惜しく思ひ、之より君臣の間が兎角圓滿を缺くことゝなつた。

さる程に天目山の一戦で武田勝頼を滅した信長は、安土城に於て徳川家康と穴山梅雪を上客として手厚い饗應をした。其時惟任光秀は其の接待掛になつたから特に高價の什器を購ひ求めて力の限り準備をしたのである。之より先、羽柴秀吉は信長の命を奉じて西國の毛利氏を攻め高松城を包圍したが容易に陥落の見込みが立たないので、信長の許へ急使を走らせて援兵を求めて來た。曰く「今や臣は高松城を包圍攻撃して居ります。然るに敵將吉川元春小早川隆景は毛利輝元を主將となし數萬騎を率ゐて來り救ひ、私は前後に敵を受けて苦戦を繼續して居ります。此際至急に援軍をお遣し下されよ」と信長は之を讀むや案を打つて喜んだ、「よし敵は既に全力を擧げて高松に來た。これ自ら覆滅を招くものである。乃公が自ら陣頭に立つて元春隆景の首を斬り一氣に九州を定める事は掌を返すよりも容易

である」愉快々々と即時堀秀政を先登させ、光秀及池田信輝・細川忠興・高山友禰・中川清秀等にもすぐと歸國し兵を率ゐて先登せよと命じた。そして饗應掛をば別人に命じた。

光秀は日頃から信長の氣の移り易いのを不快に思つて居たが、今度も未だ大切の饗應の終らないのに西征の先鋒を命せられたので心中甚だ不平であつた。「實に怪しからん事だ。折角心を盡した饗應の準備を冗くだにして西征の先鋒をせよとは何事だらう。我が君の言行の恃むに足らぬは言語同斷である、最早常識では判断が出來ぬ」と數多の器具や御馳走の品を湖水に投捨てさせて居城の龜山へと歸つてしまつた。

また或時のこと信長は重なる將士を招いて盛んに酒を飲ませた。光秀は平生酒を好まないので一杯も口にしない。信長は酔に任せて光秀を捉へ刀を抜放ち、「さあ酒が飲めなければ之を飲むがよい」と言つた。光秀は仕方がないので「刀を飲むことは出來ません。それでは御意に任せて一杯頂戴いたします。どうぞ此の場



はお赦しを」と辛うじて一杯を飲んだが光秀に取つては此の一杯もなか／＼大役であつた。所が信長は猶承知をしない。自分は酔が廻つて如何にも心地がよいので光秀を腋ばさみ手を以て其の頭を打ちながら「光秀の禿頭はよい音がする。鼓の代用には持つて来いだ」と言ひながら、頻りにぼん／＼はり飛ばした。眞面目で打たれる光秀は非常に憤慨して思つた。「これは只事ではない。信長は己を殺す氣に相違ない。言葉や行にもあり／＼と現はれて居る。こりやかうしては居られない」と。こゝに心中漸く禍の種を植ゑたのであるともいふが、酒を強ひたり頭を打つた事は果して事實か知らん。信長は又小姓の森蘭丸を寵愛した。蘭丸は萬事に抜目なく、まめ／＼しく忠勤を盡す所が深く信長の氣に入つたので、或時信長は祕藏の珍器を多く陳列して蘭丸を呼んで之を見せ「其の方はどの品を欲しいと思ふか遠慮なく申し出る。其の方の望に任せて取らせるから」と言ふと蘭丸は暫く考へた末「はい私が欲しく思ひますのはこんな品物では御座りません。近江の國の滋賀郡は私の父可成の舊領地で御座りまするから之を再び還して賜はつたら何

よりの幸ひと思ひます。しかし強ひて戴きたいと思ふ譯でもないのですから」と申し出た。すると信長は例の調子で深く考へもせず「うんさうか併し暫く待て。三年の後には其の方の望通りにしてやるから」と答へた。

丁度此時光秀は屏風の外で此の物語を聞き、自ら問ひ自ら答へて思ふやう「いや大變な事になつたぞ、蘭丸の望む滋賀郡は今己の領地になつて居る。して見ると己は三年の後に殺されるのか、馬鹿々々しい。犬死して堪るものか」と、是も深く信長を怨む種となつた。

程經て後、信長は蘭丸を光秀の婿として之に滋賀郡を與へる様にしたが、光秀は顔として従はず内心にはいよいよ謀叛の刃を磨いだのである。(安土城)

## 巴 御 前

熊田 葦城

粟津  
木曾義仲

義仲行く／＼敵を破りて大津に向ふ。附隨ふもの僅に六騎、巴先頭に在り。甲を脱ぎて髪を後に垂る、眼涼しく色白し。



巴御前  
範頼既に勢多を破りて来る。内田家吉三十五騎を率ゐて眞先に在り。遙かに巴を望み見て訝る。

「女にや童にや。さても凜々しき武者振りかな」  
從者眸を凝らして見れば、これぞ比類稀なる美人。

「正しく女にこそ候ふなれ」  
家吉はたと鞍を拍つ。

さては巴にこそあるべけれ。所詮手に合ふべき敵にあらず如何にやなさん。  
流石の勇士も心に驚く。

「いや／＼猶豫すれば後陣に笑はれなん。いで打向ひて雌雄を決すべし」  
家吉屹と心を決し唯一騎馬を驅つて進み近づく。

巴見て呼ばはる。

「さても天晴れなる武者よな。東國には小山あり、宇都宮あり、千葉三浦あり、それらの人にや候はん。斯く申すは中三權頭兼遠の女巴に侍るぞかし」

鈴の如きの音聲凜々と響き渡る。

家吉聲に應じて呼ばはる。

「我こそは遠江國の住人、内田三郎家吉、勢多路の先陣に候ふなれ。いざや勝負を決し候はん」

益馬を驅つて馳近づく。

巴聞いて頷づく。

「さては大將分にはあらざりけり。但し先陣に進むは剛の者ぞ。いで首捻つて軍神を祭らばや」

また馬を驅つて進む。

兩人見る／＼相近づく。忽ちむづと引つ組んで、馬上に捻り合ふ。家吉左手に巴の髪をからみ、右手に腰刀を抜きて首を斬らんとす。

巴はたと其の臂を打つ。

家吉腕奏えて思はず刀を地に落す。



巴すかさず家吉の首を引つ抱へ、腰刀を抜くより早く搔切り其の儘提げて義仲の前に至る。

義仲見て悵然たること暫し。

「家吉は東八ヶ國に聞えし美男の勇士なるに、運盡きぬれば女にも討たれぬ。我とても運盡きたらば、如何なるものゝ手に懸らんも知るべからず。如何に巴、今より暇を取らさんするぞ」木曾は幾程の命を生きんとして最後に女に先陣駆けさせたるぞ」など言はれんは恥の中なる恥ぞかし」感慨胸に迫れば聲も自ら沈みぬ。

巴ちつと義仲の顔を見詰めて、はらくと涙を垂る。

「一命は豫てより君に捧げまつり候ふものを、何とて獨り助かり候ふべき。君の如何にもなり給はんとき一つ所に首並べんこそ妾が望みに候ふなれ」義仲も亦顔を背く。

實にやさこそ思ふらめ。されども我が亡き後を弔はんこそ最後の供よりも嬉

しけれ。如何にもして信濃へ忍び下り我が今日の始末をも語り候へ。敵や迫らんと急立つれば巴是非もなく山中へ分入り鎧を釋き姿を變へて悄悄と木曾へ立歸る。

來る時は俱に來り歸る時は獨り歸る。勇婦の心や如何ならん。(日本史蹟)

### 大湖の波

笹川 臨風

比叡の夕映に影うつる乘輿を遙に見送つて、左中將義貞以下は暫くは其處に佇んだ。吉田内大臣定房の影も小さうなつた。坊門宰相清忠の影も薄れ行く。萬里小路大納言宣房は木蔭に隠れて見えなくなつた。乘輿も次第に遠ざかり行く。人も馬も次第に小さうなる。初めは長蛇の如く綱の如く遂には一筋の絲となつて細る。其の行先は闇である。黒い影である。乘輿は其暗い中に消える。

「あゝ」

延元元年十月十日  
天皇足利尊氏  
の請を容れて  
觀山より還幸  
さ共に新田義  
貞をして皇太  
子を奉じ北陸  
に向はしめ給  
ふことはその  
かけるもの  
乘輿還幸



と義貞は嘆息する。

「もう見えぬわ」

と洞院左衛門督實世は落膽したやうに云ふ。

「都とし聞けば懐しいが、それも暗の世でおぼる」

低い聲で失望の聲を放つは頭大夫行房である。

「さらば我等も旅立にて候」

我に返つたやうに義貞が言ふ。

「皇子達の御準備は如何に」

脇屋右衛門佐義助は三條侍従泰季を顧みて言ふ。

「はや／＼調ひて候わ」

と泰季は答へた。

假りの住居なりし東坂本も今は中々に離れ難い心地がする。流石に見返り見送られて出で立つ。

坂本

新田義貞

七千餘騎の兵は北國の雪、北國の血を踏まんすと肅然として東坂本を後にして北に向ふ。延元元年十月十日の夕風は湖水の上に寒い波を立てて吹く征衣は冷かであつた。比良山嵐は雪の上を渡つて轟然に西近江に落ちる。一行は堅田の浦に躡したる船に分れ／＼て乗る。葦間の水の音騒がしく、堅田の漁火影消えて湖水の夜は凍る如くに寒い。浮御堂の常夜燈を心細くも見送つて船は湖心に出る。冬の太湖の波は穩かでなかつた。比良嵐は波を驚かして送り、伊吹嵐は水を揺して迎へる。月は冷かに湖上を照す。其月も暗うなつては、満天に星寒光を帯びて冴え其光は水底に珠かと沈む。船は一上一下唯波に揺られ乍らに漕行くのであつた。

夜もすがら舷を叩く水の音、波の音は凄じうあつたが、明くる曉の光は湖上に金色の華やかさを放つ。竹生島の影も其の華やかなる光の裡に浮ぶ。一行は日の光を拜して、行末に幸あれと祈る。

(新田左中將)



## 比叡山頂の雷雨

徳 富 蘆 花

〔比叡山〕

〔避暑の天幕村〕

西洋人は夏になると一家挈へて海山に自然的生活を楽しむが、中にも京阪神の異人連が好んで寄る處は比叡山だ。山の八合目あたり、杉や樅の大木の間の勾配や、緩かな處に、杭をうち板を渡して、ざつとした床を拵へ、如何なる強雨長雨にも堪へる厚いゴムびきの天幕を張つて、此處に盛夏二ヶ月ばかりが間、起臥眠食するのである。夏季の盛には三百人からの人数が部落をなして、やはり天幕張の禮拜堂が出来、眞青な樹の間に白い天幕がちら／＼覗いて、オルガンや讚美歌の聲が清涼な山氣にのつて來るなどは頗る面白い。信心もベンキ臭い講堂よりは却つて舊約の昔しのばる、此の様な天幕の殿に起るものだ。避暑の天幕村はブラオン師の家族は、夫妻に其れから、西洋の護謨人形に魂を入れた様な四歳ばかりの女兒と、クツク夫婦と其だけである。僕の部屋はもとブラオン師が書齋にする筈の小さな天幕だ。其は勾配は大分急な處に、一方は崖、一方は高い柱にもたして

しつらつた三疊位の小屋で、母屋との間には板橋がかゝつて居る。一寸番兵小屋の様に一方向開けて居るが夜は此處も塞いで眠る。道具と云つては、白木の机が一つに、ランプに毛布と煎餅蒲團が一枚、其丈だ。西南の方に明どりの小窓があつて、夜は此の窓から月が覗き、晝は眼をさへあげると、青黒い樅の梢を見越して遙かに京都の町の煙が颯々を見る。雨が降る日などは晝でもぐるりと戸をたたく、天幕も青く染まる程ぼ／＼帆布を敲く木の間の雨の音を聞きながら、本を讀んで居ると、何だかロビンソンクルーソーにでもなつた様な氣持であつた。ブラオン師は少し飄輕な、併し實意のある人で、僕を可愛がつてくれる上に他の洋人が多く陥り易い弊——人の感情を重んずるを知らずむやみに我を通す癖——も餘程少かつたので、僕は非常に愉快を覺えた。天氣の好い日には或は柄長網を肩にして蝶捕りに行つたり、また例の採集胸亂をさげて叡山から果ては鞍馬あたりまで珍しい羊齒や種々の植物を涉獵り、喉が渴けば杉山の濕つばい氣を嗅いで古株の下に見出した苔清水に命を濕し、腹が空けば杉ごけの上に足投げ出して古



新聞に包んだサンドキツチに舌鼓をうち、あまり遠歩きして鳥の聲にふと頭を上げれば、杉木立を漏るゝ入日の光晃々と谷を隔つる山又山は紫に打煙つて居るに驚き、いざと立歸る一足々に谷は暮れ黄昏の藹蒼く「あゝ困つた」とふりあふぐ顔にうつすり照初めた新月のおぼつかない光をたよりに幾山越えて眞黒い木の間に燈火を認めた時の嬉しさ。それから飯が済むと早速採集したものを乾燥紙に挿んで眠くない時は鉛筆で羊齒などの寫生をする。面白い職務だ。プラオン師は何時も「菊地さんあなたあるく達者あります」と僕の健脚を譽めてくれた。プラオン師も此の頃は僕の英語ほどに日本語が使へる様になつたのである。

實に愉快な生活「あゝ此の様な生活はさぞ兼頭君が喜ぶだらう」と思ふと、矢も楯も堪らず僕は東京なる兼頭君に手紙を出して「歸省のついでに是非來て見給へ」と書いた。一年位は實に夢の間に立つてしまふ。僕が始めて道太郎君を識つたのは去年の夏、君が歸省の時であつたが、最早一年立つた。また夏休みになつた。君と僕との間には交通は絶えなかつたが、今此の手紙を書くにつけていよゝゝ光陰

の早くなつたを感ずるのであつた。

日ならず兼頭君の返書が來て、且驚き且喜んだ様子が歴々楮表に躍つて居た「如何しても兄と小生との間には宿世の縁ありと申すべきか。面晤の日を待兼候」と書いてあつた。此方は猶更待兼ねて、月がやつと八月に入ると、今日か明日かと待ちくたびれて少し腹が立つて居ると、或日麻の夏服を着た眉の濃い青年が片手に夏帽をとつて、満面に汗を拭き／＼、息をつき／＼莞爾やつて來た。前以てプラオン師の許可を得て置いたので、僕は兼頭君を早速僕の小天幕に誘うて顔を洗はず、著物を更へさす、砂糖水を飲ます、むやみに笑ふ。同じ事を何度も繰返す。嬉しさがさす様々の狂態をし盡してそれから夜は僕の小天幕に一枚の毛布を二人して引張りながら別來無限の情を叙べた。

明くる日も興は盡きず、話も盡きぬので、兼頭君は僕の強請にまかせ一日出發を延ばして、午餐過ぎから比叡の最高峰なる四明が嶽の絶巔に登つた。僕は帽をかぶり兼頭君は傘をさして、延暦寺の裏を通り杉を穿ち小笹を分けて次第に上つた。



兼頭君が息切れするので休み休み上つて、彼の將門が純友と遙に皇城を俯視したといひ傳ふる邊へ來ると、洛陽の平原は一目の中に落ちて、京都の町や、村や、寺を擁する森や、青田や、加茂・桂の諸川や、其れから遙かに淀・山崎から、彼が大阪の方角だらうと思ふあたりまで、僕の指す指頭に俯瞰圖を擴げた様に見える。僕等は尙少し上つて、唯有る樅林を彼方へ出ぬけると忽ち脚下に晃々と琵琶湖の半面が現はれた。

## 琵琶湖の眺望

「絶景」と兼頭君は喘ぎ／＼見とれる。僕も滿面の汗を拭つて大息をつき／＼高山の嶺を繞るオゾーンの氣を水の如くに吸うた。

岩を拂つて、曲りくねつた松の蔭に足投げ出し、猶も滲み出る汗を拭つて僕等は暫し言もなく絶景に見とれた。脚下に積る山又山は笋の皮の如く重なり重なつて、其の下には半面の琵琶、今まさに午後の日を滿面に受けて鏡の如くに光つてをる。湖を縁ぐるリボンよりも狭い平地の青いのが田で、出崎に一寸ばかり秀でたのが松で、煙が颯つてゐるのが大津・矢橋・坂本・堅田。北の大きな半面は出張つた山に

遮られて見えぬが、左手の比良と湖の向ふの三上山は手招きでも出來さうな。恰も今長濱通ひの小蒸汽が大津を出て行く。玩具程の船が絲程の煙を吐いて鏡の上を滑つて行く。耳を澄ますと蚊の様な聲がする。汽笛の音であらう。やゝ久しく黙つて居たが何處やらに幽かな物音がし出して、其が次第に近く、近く般々圓々いひ出すと思ふと、四邊がすうと薄暗くなった。ふつと氣づいてふり仰いで見れば、比良の方角が眞暗になつて、何時湧いたのかインキ色の夕立雲がむら／＼／＼／＼天穹を捲上げて居る。其が天心に達したかと思つて、西の半穹を目がけて逆落しに崩れ落つると同時に眞黒い蔭が白い光を追うて横一文字に湖水の面を奔つた。

「夕立」

「早く」

聲を合して二人が立上る途端に、黒雲の天を劈いて桃紅色の電が五條六條つゞけざまに湖水にたばしる。



「早く、早く」  
聲かけて一步踏出す端を颯と吹く疾風一陣。風にまじつて葡萄大の雨粒ぼつり眞額を撲つかと思へば、雲踏破る雷の一聲頭上に轟いて雨が瀧流しに落ちて來た。

「菊池君、傘、傘」

兼頭君が呼ぶので、一本の傘に二人が頭をつき入れて又五六歩。

「駄目です、駄目です。僕に跟いて御出でなさい」

言ひ棄て、僕は両手に帽をおさへ、頻りに募る雷の、爆々碎けて火花を散す稻妻の光を便りに、最寄の寺を指して駈下りながら、ぴかりとする拍子にふりかへると兼頭君は洋傘をつぼめて手に持ちながら、すぶ濡れになつて二三歩あとから喘ぎ／＼跟いて來る。

「走れますか、息切れはしませんか」

「なあに」

と言ふ聲は闇に聞えて、稻妻の君が笑顔を見するも一瞬。また一しきり眞暗の闇

に漲る暴雨を衝いて、やう／＼杉の森の邊まで來たと思ふと、忽ち夥しい電光に眞白の雨を透して森の隅々残りなく見ゆる彼の時遅く地軸もゆるぐ物音の頭上に破裂して、僕は俯伏にござと倒れた。  
(思出の記)

### 叡山登り

夏目漱石

比叡山  
西口  
高野川は加茂  
川の上流

春はものゝ旬になり易き京の町を、七條から一條迄横に貫いて煙る柳の間から温き水打つ白き布を高野川の磧に敷へ盡して、長々と北にうねる路を大方は二里餘も來たら、山は自ら左右に通つて脚下に奔る潺湲の響も折れる程に、曲る程に、あるはこなたあるはかなたと鳴る。山に入りて春は更けたるを山を極めたらば春はまだ残んの雪に寒からうと見上げる峰の裾を縫うて暗き陰に走る一條の路に爪上りなる向ふから大原女が來る牛が來る。京の町は牛の尿の盡きざる程に長く且靜である。溪川に危く渡せる一本橋を前後して横切つた二人の影は、草山の草繁き中を辛うじて一縷の細き力に頂へ抜ける小徑の中に隠れた。草は固より去年の



霜を持越した儘立枯の姿であるが、薄く溶けた雲を透して眞上から射し込む日影に蒸返されて兩頬のはてるばかりに暖い「おい君、甲野さん」と振返る。甲野さんは細い山道に適當した細い體軀を眞直に立てた儘下を向いて、

「うん」と答へた。

「そろ／＼降参しかけたな。弱い男だ。あの下を見給へ」と櫻の杖を左から右へかけて一振に振廻す。振廻した杖の先の盡くる遙か向ふには白銀の一筋に眼を射る高野川を煌めかして、左右は燃崩るゝ迄に濃く咲いた菜の花をべつとりとなすりつけた背景には薄紫の遠山を縹渺のあなたに描き出してある。

「なる程好い景色だ」と甲野さんは長身を振向けて、際どく六十度の勾配にすり落ちもせず立留つてゐる。

「いつの間にかこんなに高く登つたんだらう。早いものだな」と宗近君が云ふ。宗近君は四角な男の名である。

百折れ千折れ、五間とは直に續かぬ坂道を香氣な顔の女が「御免やす」と下りて

来る。身の丈に餘る粗朶の大束を緑滴る濃き髪の上に壓へ付けて、手も掛けずに戴きながら宗近君の横を擦抜ける。生茂る立枯の萱のごそつかせた後姿の眼につくは目暗縞めくらじまの黒さが中を斜に抜けた赤禱である。一里を隔てゝもそこ指す指の先に引つ着いて見える程の蕘茸はこの女の家でもあらう。天の落給へる昔の儘にたなびく霞は長へに入瀬の山里を封じて長閑である。草山を登り詰めて雑木の間を四五段上ると急に肩から暗くなつて、踏む靴の底が濕つぽく思はれる。路は山の背を西から東へ渡して、忽ちのうちに草を失するとすぐ森に移つたのである。近江の空を深く色どる此の森の動かねば、その上の幹とそその上の枝が幾重幾里に連りて、昔ながらの翠を年毎に黒く疊むと見える。二百の谷々を埋め、二百の神輿を埋め、三千の悪僧を埋めて猶餘ある葉裏に三藐三菩提の佛達を埋め盡して森々と半空に聳ゆるは傳教大師以來の杉である。友に後れた甲野さんは唯一人此の杉の下を通る。

右より左よりして行く人を兩手に遮る杉の根は土を穿ち石を裂いて深く地盤に食



入るのみか餘る力に跳返して暗き道を二寸の高さに段々と横ぎつて居る。登らんとする岩の梯子に自然の枕木を敷いて踏心地よき幾級の階を山靈の賜と甲野さんは息を切らして上つて行く。行く路の杉に逼つて暗きより洩るゝが如く這出づる日蔭葛ひかげかつらの足に纏はる程に繁きを越せば、引かれたる蔓の長きを傳はつて手も届かぬに朽ちかゝる齒朶の風なき晝をふらくと搖ぐ。

「此處だ。此處だ」と宗近君が急に頭の上で天狗の様な聲を出す。朽草の土となる迄積古したる上を踏めば深靴を隠す程に踏答へもなきに、甲野さんは漸くの思ひで蝙蝠傘を力に天狗の座迄登つて行く。

「善哉々々、我汝を待つことごとくに久しだ。全体何を愚圖々々として居たのだ」甲野さんは唯あゝと言つた許りでいきなり蝙蝠傘を放り出すと其の上へごさりと尻餅を搗いた。

天を封する老幹の亭々と行儀よく並ぶ隙間にてふれき的皦と近江の湖が光つた。鏡を延べたと許りでは飽足らぬ。琵琶の銘ある鏡の明かなるを忍んで、叡山の天

的皦 白く明らかなるをいふ  
叡山よりの湖水

狗共が宵に偷んだ神酒の酔ひに乗じて曇れる氣息を一面に吹掛けた様に――光るものの底に沈んだ上には野と山にはびこる陽炎かげろうを巨人の繪具皿にあつめて只一刷まきりに抹付けた激澁たる春色が十里の外に模糊とたなびいてゐる。  
(虞美人草)

怪我の冬雷鳴かみ あり

井原西鶴

さゞ波や近江の湖に沈めても一升入る壺は其通りなり

大津の町に醬油屋の喜平次といふ者あるける。此處は北國の船着殊更東海道の繁昌、馬つぎかへ駕籠車かこを轟かし人足の働、蛇せやの鮮すし、鬼の角細工、何をしたればとて賣れざる事あらず。近來問屋町長者の如く屋造り昔にかはり、二階に撥音やさしく遊興晝夜の限もなく、天秤の響きわたり、金銀も有る所には瓦石の如し。身代程高下の有る物はなしと、喜平次荷桶おろして無常觀じける。我商ひに廻れる先々にも世は愁喜貧福のわかち有りてさりとは思ふまゝならず。賢うき人は素紙すがらこ子着て愚なる人はよき絹を身に重ねし、兎角一仕合は分別の外ぞかし。然れども其

大津の昔  
蛇の鮮鬼の角  
細工の極端に  
あるを極端に  
いへん為蛇の  
すし鬼の角を  
細工したるも  
のまであるこ  
なり  
天秤の響云々  
波に金銀の受  
秤を以てはか  
りたるなれば  
それなれば



山風ほすの事  
にも曾て薬ま  
はらす風邪  
ほごの輕症に  
も其投薬功な  
きないへるな  
り  
物申 案内を  
乞ふ事 即來客  
ないふ  
神農 醫の祖  
なれば 肖像を  
祀る  
四宮 天孫神  
社をいふ

身働かずして錢が一文天から降らず地から涌かず、正直に構へた分にも埒は明かず、身に應じたる商賣を疎かにせじこ一日暮しを樂みける。關寺のほとりに森山玄好といへる人、かたの如く醫師は上手殊に老功なれども、比叡の山風程の事にも曾て薬まはらす。門に物申の聲たえて、内に神農の掛繪も身振して萬の紙袋の書付埃に埋もれ、冬は羽二重の單へ羽織せんじやう常にかはらぬ衣裳付、醫師も大工の身に同じ、呼ばぬ處へはゆかれず。宿に居れば外聞あしく、毎日朝脉の時分より立出で、四宮の繪馬を眺め又は高觀音の舞臺に行きて近江八景も朝夕見ては面白からず、身すぎはかけて隙のある程氣の毒なる物はなし。人には繪馬醫者といはれて口惜しかりし。或人取立て碁會の宿して一番に三錢づゝ茶の代とりて漸う死なぬを徳として世を送る人も有り。又馬屋町といふ所に阪本屋仁兵衛殿とて以前は大商人なりしが、大分の銀をなくなし残る物とて家藏賣りて二十八貫目ありしを取つてのき、其後三十四五度も商賣かへられし中に今は残らず喰込みて何をすべきたよりもなく、昔の厚髪も薄く人跡をかしげなれば一つも埒のあかぬ

男、貧乏神の社人になれとて一門中之を見限る。されども母親の隠居銀十貫あるを一人の子なれば不便に思はれ、せめては之をこらせ世に住む種ともなれかし。されども仁兵衛に渡しては一年もあるまじ姉聳に預けて月に八十目づゝ利銀渡し、此有切に五人口をすぎよといはれし。先夫婦、子が一人、弟に仁三郎とて背僕病、ひこりは乳吞ませし姥が足立たずして外に頼む鳥もなくこゝに掛り舟、日和を見てもどれを一人出て行けといふ者もなし。さりどては十貫目の利銀にて八十目取り五人口は過ぎ難し。此銀朔日に請取り五匁の家賃をのけておき、白米のよきに味噌・塩・薪をとゝのへ常住香の物業此外にはいかなく三月の鯛を一枚松茸一斤二分する時も目に見る計り、咽が乾けば白湯に焦穀、油火も真中に一つともして之を寐さまに消して鼠のあるゝをかまはず。盆正月の着物もせず年中始末に身を固め、慰みには觀世紙捻をして明暮不自由なる世や、商ひの道知るこて百目に足らぬ銀にて七八人樂々と年越すもあり。又松本の町に後家あり。獨りの娘に黃唐茶の振袖に菅笠をきせて言葉少しなまり習ひ「拔參の者に御合力」とお伊



池の川針や  
追分針屋を  
いふ今は殆た  
えたり

年とり物新  
年用の物品を  
いふ  
節季に帳云々  
掛取をいふ

勢様を賣りて此十二三年も同じ偽にて世を過ぐる女もあり。又池の川の針屋ほそ  
き事なれども娘を京への縁組を聞立て銀二千枚つけること仲人嬬が飛びまはり、  
強ひたら百貫目はつけてやらるべしと私語し。人の内證は知れぬもの。此大津の内  
にも様々ありと、醬油賣廻る先にて見聞き、喜平次が宿にかへりて語りける。此  
女房随分賢く子供も綺麗にそだて人の物をもおはず、年とり物をも師走の初頃よ  
り調へ、節季に帳かたげた男の顔を見ぬを嬉しやとて萬事を仕舞けるに此幾年か  
錢とり集めて七匁五分が八匁、七匁六分八匁九分の残り、つひに十匁ともちて年  
越したる事なく、板木でおしたやうな此家の若蛭子と祝ひけるに、瓦落々々と空  
さだめなや冬雷鳴十二月廿九日の夜の明方に落ちかゝりて一跡に一つの鍋釜微塵  
粉灰に碎かれ之を歎かひなく、片時もなければならず買求めしに其年の暮に其  
程足らずして九匁、廿四五所を買ひがゝり、やかましき事を聞きぬ。之を思ふに  
當處の必違ふものは世の中、我も雷鳴の落ちぬまでは世にこはき物はなかりしに  
と悔みぬ。

(日本永代藏)

謡曲

蟬丸

シテ 逆髪の宮  
ツレ 官人  
蟬丸の宮

世阿彌

蟬丸の宮に申  
すは皇子にお  
はし乍ら盲目  
なるため逢坂  
山に捨てられ  
給ひ狂女とな  
り給ひし姉宮  
琵琶の音をし  
るべに尋ねよ  
りて對面し給  
ふのしぐみな  
延喜 醍醐天  
皇を申す

蟬丸

次第「定めなき世の中々に、憂きこと頼みなるらん。ワキ」是は延喜第四の御  
子、蟬丸の宮にておはします。實にや何事も報い有りける浮世かな。前世の飛行い  
みじくて、今皇子とは爲り給へども、襤褸の中よりなごやらん、兩眼盲目まし、  
て、蒼天に月日の光なく、暗夜に燈暗うして、五更の雨も止む事なし。明し暮らさ  
せ給ふ所に、帝如何なる叡慮やらむ。密に具足し奉り、逢坂山に捨て置き申し、御  
髪をおろし奉れとの、綸言出で、返らねば、御痛はしさは限りなれども、勅誼な  
れば力なく、下歌「足弱車忍路を、雲井のよそに廻らして、上歌」東雲の、空も名残の  
都路を、今日出で初めて又いつか、歸らん事も片糸の、よるべなき身の行方、  
さなきだに世の中は、浮木の龜の年を経て、盲龜の闇路たごりゆく、迷ひの雲も



雨による古  
今集雨による  
田みの島を  
けふゆげは名

立ちのぼる、逢坂山に着きにけり。蟬丸詞、如何に清貫。ツキ詞、御前に候。蟬丸、さて我をば此山に捨て置くべきか。ツキ、さん候宣旨にて候ふ程に、是までは御供申して候へども、何處に捨て置き申すべきやらん。さるにても我君は堯舜より此方國を治め民を憐れむ御事なるに、かやうの叡慮は何と申したる御事やらん。かゝる思ひもよらぬ事は候はじ。蟬丸詞、あら愚の清貫が言ひ事やな。本より盲目の身と生るゝ事、前世の戒行拙き故なり。されば父帝も、山野に捨てさせ給ふ事、御情なきには似たれども、此世にて過去の業障を果し、後の世を助けんこの御謀、是こそ誠の親の慈悲よ。あら歎くまじの勅諭やな。ツキ詞、宣旨にて候ふ程に御髪をおろし奉り候。蟬丸詞、是は何といひたる事ぞ。ツキ、是は御出家とめでたき御事にて渡らせ給ひ候。蟬丸、實にやかうくわん髻を切り、半だんに枕すと、唐の西施が申しけるも、かやうの姿にて有りけるぞや。ツキ詞、此の御有様にては、中々盗人の恐れも有るべければ、御衣を賜はつて簀といふ物を參らせ上げ候。蟬丸、是は雨による田簀の鳥とよみ置きつる、簀と云ふ物か。ツキ詞、又雨露の御爲なれば、同じく笠を參らする。

にはかくれの  
ものにぞあり  
ける  
御侍 古今集  
みさむらひ御  
笠さ申せ宮城  
野の木の下露  
は雨にまされ  
り

蟬丸、是は御侍御笠と申せとよみおきつる、笠と云ふ物よなふ。ツキ詞、又此杖は御道しるべ、御手に持たせ給ふべし。蟬丸、實に、是も突くからに、千年の坂をも越えなんと、彼遍昭がよみし杖か。ツキ、それは千年の坂行く杖。蟬丸、こゝは所も逢坂山の、ツキ、關の戸ざしの藁屋の竹の、蟬丸、杖柱とも頼みつる、ツキ、父帝には、蟬丸、捨てられて。地「かゝる憂き世に逢坂の、知るも知らぬも是見よや。延喜の皇子の、成り行く果てぞ悲しき。行人征馬の數々、上り下りの旅衣、袖をしをりて村雨の、振り捨て難き名残がなく。さりては、いつを限り有明の、盡きぬ涙を押へつゝ、早や歸るさになりぬれば、皇子はあとに唯獨り、御身に添ふものにては、琵琶を抱きて杖を持ち、臥し轉びてぞ泣き給ふ。ツキ、是は延喜第三の御子、逆髪とは我事なり。我皇子とは生るれども、いつの因果の故やらん。心より狂亂して、邊土遠郷の狂人と爲つて、翠の髪は空さまに生ひ上つて、撫づれども下らず。詞、如何にあれなる童部ごもは何を笑ふぞ。何我髪の逆さまなるがをかしいとや。實に實に逆さまなる事はをかしいよな。さては我髪よりも、汝等が身にて我を笑ふこそ



拔頭舞 樂名  
此舞に用ふる  
面は亂髮の垂  
れかゝりたる  
もの  
松坂 栗田口  
より日の岡に  
登る坂  
音羽 清水寺  
の山をいふ  
逢坂の關の清  
水に影見えて  
今やひくらん  
望月の駒拾  
遺集にいづ  
之の歌信濃望  
月の御牧より  
年々仲秋に駒  
詠み献するを  
詠みたるなり  
第一第二云々

逆なれ。面白しく。是等は皆人間目前の境界なり。夫れ花の種は地に埋つて千  
林の梢に上り、月のかげは天にかゝつて萬水の底に沈む。是等をばみな何れか順と  
見、逆なりと謂はん。我は皇子なれども庶人に下り髪は身上より生ひ上つて星霜を  
戴く。是皆順逆の二つなり。面白や。柳の髪をも風は梳るに 地「風にもどかれず、  
シテ」手にも分けられず。地「かなぐり捨つるみての袂。シテ」拔頭の舞かやあさまし  
や。地「花の都を立ち出で、く、憂き音に鳴くか鴨河や、末白河を打渡り、栗田口  
にも着きしかば、今は誰をか松坂や、關の此方を思ひしに、跡になるや音羽山の、  
名殘惜しの都や。松蟲鈴蟲きりくすの、鳴くや夕陰の山科の、里人も咎むなよ。狂  
女なれど心は、清瀧川と知るべし。シテ」逢坂の、關の清水に影見えて、地「今や引く  
らん望月の、駒の歩も近つくか、水も走井の影見れば、我ながらあさましや。髪は  
おごろを戴き、黛も亂れ黒みて、實に逆髮の影うつる。水を鏡と夕波の、現なの我  
姿や。蟬丸」第一第二の絃は索々として秋の風、松を拂つて疎韻落つ。第三第四の宮  
は、我蟬丸が調べも四つの、折りからなりける村雨かな。あら心凄の夜すがらやな。

白樂天の絃  
の詩「第一第  
二絃索々秋風  
拂松疎韻落第  
三第四絃冷々  
夜鶴憶子籠中  
鳴た巧みに用  
ひたるなり

淨藏淨眼 法  
華經に出でた  
る兄弟の名  
早離速離 淨  
土木縁離 淨  
名でたる兄弟  
の出

世の中はごにもかくにもありぬべし、宮も藁屋も果てしなれば。シテ「不思議やな  
是なる藁屋の内よりも撥音けたかき琵琶の音聞ゆ。そも是程の賤が屋にも、かゝる  
調のありけるよと、思ふにつけてなごやらむ、世になつかしき心地して、藁屋の雨  
の足音もせで、ひそかに立より聞き居たり。蟬丸「誰そや此の藁屋の外面に音するは、  
此程をりくごぶらはれつる。博雅の三位にてましますか。シテ詞「近づき聲をよく  
よく聞けは、弟の宮の聲なりけり。なふ逆髪こそ参りたれ、蟬丸は内にましますか。  
蟬丸「何逆髪とは姉宮かと、驚き藁屋の戸を明くれば、シテ「さも淺ましき御有様。  
蟬丸「互に手を取りかはし、シテ「弟の宮か。蟬丸「姉宮かと、地「共に御名を木綿  
附の、鳥も音を鳴く逢坂の、せきあへの御涙、互に袖やしぼらん。地「夫れ梅  
檀は二葉より香ばしと云へり。ましてや一樹の宿りとして、風橘の香を留めて、花  
もつれなる枝とかや。シテ「遠くは淨藏淨眼早離速離、近くは又應仁天皇の御子、  
地「難波の皇子菟道の皇子と、互に即位讓讓の御志、皆是れ運理の情とかや。シテ「さ  
りながらこゝは兄人の宿りとも、いかで調べの四つの緒に、シテ「引かれてこゝによ



連枝に  
連理の  
兄弟の  
こと

るべの水の、地「淺からざりし契りかな。〇」世は末世に及ぶとても、日月は地に落ちぬ習ひとこそ思ひしに、我等如何なれば、皇子を出で、かくばかり、人臣にだに交はらで、雲井の空をも迷ひ來て、都鄙遠境の狂人、路頭山林の賤となつて、邊土旅人の、憐れみを頼むばかりなり。さるにても昨日までは、玉樓金殿の、床を磨きて玉衣の、袖引きかへて今日は又、かゝる所の臥所とて、竹の柱に竹の垣、軒も扇もまばらなる、藁屋の床に藁の窓、敷く物とても藁藁、是ぞ古の、錦の蓐となるべし。蟬丸「たま〜こと訪ふ物とては、地「峰を木傳ふ猿の聲、袖をうるほす村雨の、音にたぐへて琵琶の音を、引きならし引きならし、我音をも泣く涙の、雨だにも音せぬ、藁屋の軒のひま〜に、時々月は漏りながら、目に見ることの叶はねば、月にも疎く雨をだに、聞かぬ藁屋の起臥を、思ひやられて痛はしや。〇」是までなりやいつまでも、名残は更に盡きすまじ、暇申して蟬丸。蟬丸「一樹の蔭の宿りとて、それだに有るにまして實に、せうこの宮の御別れ、とまるを思ひやり給へ。〇」實に、痛はしや我ながら、行くは慰む方もあり、留るをさこそと夕雲の、立

ちやすらひて泣き居たり。蟬丸「鳴くや關路の夕鳥、浮かれ心は鳥羽玉の、〇」我黒髪の飽かでのゆく。蟬丸「別路とめよ逢坂の、〇」關の杉村過ぎ行けば、蟬丸「人聲遠くなるま〜に、〇」藁屋の軒に、蟬丸「たゝすみて、地「互にさらばよ、常には訪はせ給へと、幽に聲のする程、聞き送りかへり見おきて、泣く〜別れおはします〜。

關寺小町

シテ 小野小町  
ワキキ 關寺の住僧  
ワキキ 寺の稚兒  
千方

世 阿 彌

次第「待ち得て今ぞ秋に逢ふ星の祭を急がん。〇」詞「是は江州關寺の住僧にて候ふ。今日は七月七日にて候ふ程に、七夕の祭を取り行ひ候ふ。又此山陰に老女の菴を結びて候ふが、歌道を極めたる由申し候ふ程に、幼き人を伴ひ申し、彼老女の物語をも承らばやと存じ候ふ。〇」詞「颯々たる涼風と衰鬢と、一時に來る初秋の、七日の夕に早なりぬ。〇」キ「今日七夕の手向とて、糸竹呂律の色々にッレ」ことを盡して。

小野小町老衰  
して關寺のほ  
が歌道の響に  
よりて七夕祭  
に寺に招かれ  
昔に返りて舞  
なまふこの構  
想なり

關寺



難波津 難波  
津に咲くや  
今を春へこ  
今を春へこ  
今を春へこ  
今を春へこ

ワキ「敷島の歌」道を願ひの糸はへて、織るや錦のはた薄、花をも添へて秋草の、露の玉琴かき鳴らす、松風までも折からの、手向に叶ふ夕かな。朝に一鉢を得ざれども求むるに能はず。草衣夕の肌を隠さざれどもおぎなふに便あり。花は雨の過ぐるによつて紅正に老いたり。柳は風にあざむかれて緑漸く垂れたり。人更に若き事なし。終には老いの鶯の、百轉の春は來れども、昔に歸る秋はなし。あら來し方戀しや。ワキ詞「如何に老女に申すべき事の候ふ。是は關寺に住む者にて候ふ。此寺の兒達歌を御稽古にて候ふが、老女の御事を聞き給ひ、歌をよむべき様をも問ひ申し、又御物語をも承らん爲めに。兒達も是まで御出でにて候ふ。シテ詞「是は思ひもよらぬ事を承り候ふ物かな。埋木の人知れぬ事となり、花薄穂に出だすべきにしもあらず。心を種として言葉の花色香に染まば、なごか其風を得ざらん。優しくも幼き人の御心に好き給ふ物かな。ワキ「先々あまねく人の翫び候ふは、難波津の歌を以て、手習ふ人の始めにもすべき由聞こえ候ふよなう。シテ「夫れ歌は神代より生まれども、文字の數定まらずして、事の心分き難かりけ

くや此花。王  
仁の詠。王  
世繼をよみ治  
む皇の御即位  
天皇の御即位  
を勸め奉りし  
歌なればなり  
浅香山 浅香  
山かげさへ見  
ゆる山の井の  
思はなくわが  
城の御心を葛  
和げしをいふ  
二歌を云々  
古今集序に  
「此の歌は歌  
の父母のやう  
にそ手習ふ人  
のはじめに  
しける」あり  
るを以てなり

らし。今人の代となりて、めでたかりし世繼を詠み治めし詠歌なればとて、難波津の歌を翫び候ふ。ワキ「又浅香山の歌は、王の御心を和らげし故に、是れ又めでたき詠歌よなう。シテ「實によく心得給ひたり。此二歌を父母として、ワキ「手習ふ人の始となりて、シテ「高き賤しき人をも分かす。ワキ「都鄙遠國の鄙人や、シテ「我等如きの庶人までも、ワキ「好ける心に、シテ「近江の海の、地「さ、波や濱の眞砂は盡くるとも、詠む言の葉はよも盡きじ。青柳の糸絶えず、松の葉の散り失せぬ、種は心と思し召せ。たとひ時移り事去るとも、此歌の文字あらば、鳥の跡も盡きせじや。ワキ詞「有り難う候ふ。古き歌人の言葉多しと云へども女の歌は稀なるに老女の御事ためし少なうこそ候へ。我せこが來べき宵なりさ、がにの蜘蛛の振舞かねてしるしも。是も女の歌候ふか。シテ「是は古へ衣通姫の御歌なり。衣通姫とは允恭天皇の后にてまします。形の如く我等も其流をこそ學び候へ。ワキ「扱ては衣通姫の流を學び給ふかや、近年聞こえたる小野の小町こそ、衣通姫の流とは承れ。わびぬれば身を浮草の根を絶えて、誘ふ水あらばいなんとぞ思ふ。是は小町



の歌候ふな。シテ「是は大江の惟章が心がはりせし程に、世の中物うかりしに、文屋の康秀が參河の守になりて下りし時、田舎にて心をも慰めよかしと、我を誘ひし程に詠みし歌なり。忘れて年を経し物を、聞けば涙の古事の、又思はるゝ悲しさよ。ワキ「不思議やなわびぬればの歌は、我詠みたりしと承る。又衣通姫の流し聞こえつるも小町なり。實に年月を考ふるに、老女は百に及ぶといへば、たとひ小町のながらふるも、いまだ此世に在るべきなれば、今は疑ふ所もなく、御身は小町の果てぞとよ。さのみ包みな給ひそとよ。シテ「いや小町とは恥づかしや。色見えでどこそ詠みし物を。地「うつらふ物は世の中の、人の心の花や見ゆる。恥づかしや、わびぬれば身を浮草の根を絶えて、誘ふ水あらば今も、いなんとぞ思ふ恥づかしや。地「實にや包めども袖に溜らぬ白玉は、人を見ぬ目の涙の雨古事のみを思ひ草の、花しをれたる身の果まで、何白露の名残ならん。シテ「思ひつゝ寐ればや人の見えつらんと。地「讀みしも今は身の上にながらへ來ぬる年月を送り迎へて春秋の、露行き霜來つて草葉變じ、蟲の音も枯れたり。シテ「生命既に限

りと爲つて、地「唯槿花一日の榮に同じ。カキ「あるは無く無きは數添ふ世の中に、あはれいづれの日まで歎かんと、詠せし事も我ながら、いつまで草の花散らじ。葉落ちても残りけるは、露の命なりけるぞ。戀しの昔や。忍ばしの古への身やと、思ひし時だにも、また古事になり行く身の、せめて今は又、はじめの老ぞ戀しき、あはれ實に古へは、一夜泊りし宿までも、玳瑁を飾り垣に金花を懸け、戸には水精を連ねつゝ、鸞輿屬車の玉衣の、色を飾りて敷妙の、枕つく、つまやの内にしては、花の錦の茵の、起き臥しなりし身なれども、今は埴生の、こや玉を敷きし床ならん。シテ「關寺の鐘の聲地「諸行無常と聞くなれども老耳には益もなし。逢坂の山風の、是生滅法の理をも得ばこそ、飛花落葉のをりくは、好ける道とて草の戸に硯をならしつゝ、筆を染めて藻鹽草、書くや言の葉の枯々に、あはれなるやうにて強からず。強からぬは女の歌なれば、いとゞしく老の身の、弱り行く果ぞ悲しき。子詞「如何にして候ふ。七夕の祭おそなはり候ふ。老女をも伴ひ御申し候へ。ワキ「如何に老女、七夕の祭を御出で有つて御覽候へ。シテ「いやゝゝ老女が



事は憚りにて候ふ程に、思ひもよらす候ふ。ワキ「何の苦しう候ふべき。唯々御出で候へとよ。地「七夕の、織る絲竹の手向草、幾年経てかかげろふの、小野の小町の百年に及ぶや天つ星合の、雲の上人に馴れくし、袖も今は麻衣の、あさましや。痛はしや。目もあてられぬ有様、とても今宵は七夕の、手向の數も色々の、或は絲竹に、懸けて廻らす盃の雪を受けたる童舞の袖ぞおもしろき。星祭るなり吳竹の、シテ「世々を経て住む行く末の、地「いく久しさぞ萬歳樂。シテ詞「あら面白の唯今の舞の袖やな。むかし豊の明の五節の舞姫の、袖をかう五度返ししが、是は又七夕の、手向の袖ならば、七返しにてや有るべき、狂人走れば不狂人も走るとかや、今の童舞の袖に引かれて、狂人かう走り候へ。百年は、花に宿りし胡蝶の舞。地「あはれなりく。老木の花の枝。シテ「さす袖も手忘れ、地「もすそも足弱く。シテ「たゞよふ波の、地「立舞ふ袂はひるがへせども、昔に返す袖はあらはこそ、シテ「あら戀しの古へやな。地「さる程に初秋の短夜、はや明方の關寺の鐘。シテ「鳥もしきりに、地「告げ渡る東雲の、あさまにもならば、シテ「羽束師の

萬歳樂 樂の名

森の。地「はづかしの森の木隠れもよもあらし。暇申して歸るとて杖にすがりてよろくくと、本の藁屋に歸りけり。百年の姥と聞こえしは、小町が果の名なりけり。

志 賀

シテ 樵の翁  
ワキ 官人  
ツレ 樵夫  
後シテ 大友黒主

世 阿 彌

此話は大伴黒主  
あらはれて  
歌がたりする  
事を作れるな  
花見月 三月  
ないふ

次第「道ある御代の花見月く、都の山ぞ長閑けき。ワキ詞「そもく是は當今に仕へ奉る臣下なり。さても江州志賀の山櫻、今を盛なる由承り及び候ふ程に、唯今志賀の山路へと急ぎ候。道行「春の色、棚引く雲の朝ばらけく、長閑けき風の音羽山、今朝越え来れば是ぞ此、名におふ志賀の山越や。湖遠き詠めかなく。詞「急ぎ候ふ程に、江州志賀の山に着きて候。暫く此所に候ひて花を詠めうするにて候。シテ「さ、波や、志賀の都の名を留めて、昔ながらの山櫻。ツレ「春に馴れてや心なき、二人「身にも情の残らん。シテ「山路に日暮れぬ樵歌牧笛の聲。二人「人間萬事様々の、世を渡り行く身の有様、物毎に遮る眼の前、光の陰をや送らん。下歌「餘に山を遠く来て、雲又跡を立ち隔て、上歌「入りつる方も白波のく、谷の

志 賀



川音雨とのみ、聞えて松の風もなし。實にや誤つて、半日の客たりしも、今身の上  
上に知られたり〜。

ワキ「不思議やな是なる山賤を見れば、重かるべき薪に猶花の枝を折り添へ。休  
む所も花の陰なり。是は心有りて休むか、唯薪の重さに休み候ふか。シテ「仰せ  
畏つて承り候ひぬ。先薪に花を折る事は、道のべの便の櫻折り添へて、薪や重き  
春の山人と、歌人も御不審有りし上、今更何とか答へ申さん。ツレ「又奥深き山路  
なれば、松も檜原も多けれども、取り分き花の陰に休むを、シテ「唯薪の重さに休む  
かとの、仰せは面目なきよなふ。二人「さりながら彼黒主が歌の如く、其様賤しき  
由賤の、薪を負ひて花の陰に、休む姿は實にも又、其身に應せぬ振舞なり。許し  
給へや上臈達。ワキ「こは如何に優るをも羨まされ、劣るをも賤しむなどの、古人  
の掟は誠なりけり優しくも、古歌の喩への心を以て、今の返答申したり。シテ「いや  
いや古歌の喩へどやらんも、更々知らぬ身なれども、賤しき身にも思ひよりて、  
ワキ「彼大友の黒主が、心を寄する老の波。シテ「和歌の浦わの藻鹽草。ワキ「かく喩

彼黒主が歌の如く云々古今集序に「大伴黒主は其さま（歌のさま）いやしは、薪を負へる山人の花のかげに休めるが如し〜とあり

へ置く世語の、シテ「それは黒主、ワキ「是は誠に、シテ「さまも賤しき。ワキ「山賤の、

地「身には應せぬ事なれど、許させ給へ都人、とても思出に、花の陰に休まん。實  
にや今までも、筆を残して貫之が、言葉の玉のおのづから、古へ今の道とかや〜。  
地「夫れ賢かりし時代を尋ぬるに、延喜の聖代の古へ、國を恵み民を撫で、萬  
機の政を治め給ふ。シテ「然れば其御時に至つて、和歌の道盛んにして、古へ今の  
詠歌を選び、地「二聖六歌仙を始めとして、其外の人々は、野邊の葛のはひゝろご  
り、林に茂る木の葉の露の、色に染み行く歌人の、心は花になるとかや。シテ「實  
に埋木の人知れぬ、地「こころわざまでの情とかや。ワキ「そもそも難波津淺香山の、  
影見えし山の井の、淺くは誰か思草の、露行き霜來る色なれや。濱の眞砂より、  
數多き言の葉の心の花の色香までも、妙なるや敷島の、道有る御代の翫び、然れ  
ば三十一文字の、神も守護し給ひて、無見頂相の如來も、感應垂れ給へば、君も  
安全に、萬民時を楽しみて、都鄙圓滿の雲の下、四海八洲の外までも、波の聲萬  
歳の、響きは長閑けかりけり。シテ「今天皇の御代久に、地「萬の政の、道直ぐに渡

二聖 柿本人麿、山邊赤人、六歌仙 僧正遍昭、在原業平、文屋康秀、喜撰法師、小野小町、大伴黒主



大友黒主

薪の斧の永き日 晋の王質

る日の、東南に雲をさまり、西北に風静かにて、言葉の林榮ゆくや、花も常磐の山松の、巷にうたふ聲までも、是れ和歌の詠に漏るべしや、天地を動かし、鬼神も感  
をなすとかや、ロンギ「實にや異なる山賤のく、家路いづこの末ならん。ゆかし  
き心なるべし。シテ「今は何をか包むべき。其いにしへは大友の、黒主といはれし  
が、時代とて此山の、神ども人や見るらん。地「そも此山の神ぞとは、不思議やさて  
は大友の、シテ「それは黒主が家の名の、地「大友か。シテ「我はたゞ、地「薪負ふ友  
もなく、獨り山路の花の陰に、長休みしつる恥かしやと、夕べの雲に立ち隠れ  
て、志賀の宮路に歸りけりく。ワキ詞「いざ今日は、春の山邊にまじりなんく。  
暮れなばなげの花の陰、月に詠じて天の原、時の調子に移り來る、舞歌の聲こそ  
新なれく。後ツテ「雪ならば幾度袖を拂はまし。花の雪吹の志賀の山、越えても  
同じ花園の、里も春めく近江の海の、志賀辛崎の松風までも、千聲の春の長閑け  
さよ。海越に、見えてぞ向ふ鏡山。地「年經ぬる身は老が身の、シテ「それは老が身  
これは志賀の、地「神の白木綿かけまくも、忝けなしや神樂の舞ロンギ「不思議なりつ

が山に入りて 仙人の圍碁に  
みこれて持ち たる斧の柄の  
朽つるを知ら ざりしさいふ  
をいふ 小忌衣 舞人  
のきる衣即祭 服の名

る山人の、薪の斧の永き日も、残る和光のあらたさよ。シテ「實に惜しむべし君が代  
の、長閑けき色や春の花の、塵に交はる雪ならば踏む跡までも心せよ。地「實に心  
して春の風、聲も添ふなり御神樂の、シテ「小忌の衣の色はそで。地「花は梢の白  
和幣。シテ「松は立枝の、地「青和幣、かゝるやかへるや梓弓。春の山邊を越え來れ  
ば、道も去りあへず散る花の、雲の羽袖を返しつゝ、紅の御袴のそばを取り。拍子  
を揃へて神かぐら、實に面白き奏かな。

竹生島

シテ 漁翁 後 龍神  
ワキ 官 人  
ツレ 隨行者 後 辨財天

禪

竹

ワキ次第「竹に生るゝ鶯の、竹生島詣いそがん。詞「そもくこれは延喜の聖代に仕へ

奉る臣下なり。さても江州竹生島の明神は、靈神にて御座候ふ間、此たび君に御暇  
を申し、唯今竹生島に參詣仕り候ふ。道行「四の宮や、河原の宮居末はやき、名も走  
井の水の月、くもらぬ御代に逢坂の、關の宮居を伏し拜み、山越ちかき志賀の里  
鳩の浦にも着きにけり。詞「急ぎ候ふほどに、鳩の浦に着きて候ふ。あれを見れば

竹生島

この語は竹  
生島明神の  
徳を述ぶる  
趣旨なり



釣舟の來り候ふ。しばらく相待ち便船を乞はゞやと存じ候ふ。シテ「おもしろや頃は彌生のなかばなれば、波もうらゝに海のおも。ツレ「霞みわたれる朝ぼらけ。シテ「聲」のごかに通ふ船の道、シテツレ「うきわざとなき心かな。シテサシ「これは此浦里に住みなれて、明暮はこぶうろくづの、二人」數を盡して身ひとつを、助けやせんとわび人の、ひまも波間に明けくれて、世をわたるこそ物うけれ。歌」よしよし同じわざながら、世にこえたりな此海の名所おほき數々に、浦山かけてながむれば、志賀の都花園、むかしながらの山櫻、眞野の入江のふなよばひ、いざさしよせて事問はん。ツキ詞「いかに是れなる船に便船申さうなう。シテ詞「これは渡し船にてもなし。御覽候へ釣船にて候ふよ。ツキ「こなたも釣船と見て候へばこそ便船とは申せ、これは竹生島にはじめて參詣の者なり。誓の船に乗るべきなり。シテ「げに此所は靈地にて、歩みを運び給ふ人を、とかく申さば御心にも違ひ、又は神慮もはかりがたし。ツレ「さらばお船を參らせん。シテ「うれしやさてはむかひの船、法の力とおぼえたり。シテ詞「けふは殊更のごかにて、心にかゝる風もなし。

誓の船 佛の衆生を救はんとて彼岸に渡すにたごへていふ

都富士 比叡山をいふ

竹生島

綠樹影沈魚上木清波月落免奔浪僧自休の竹生島に詣でたる詩なり

地「名こそさゝ波や、志賀の浦にお立ちあるは、都人かいたはしや、お船にめされて浦々をながめ給へや。地「處は海の上、國は近江の江にちかき山々の春なれや花はさながら白雪のふるか残るか時しらぬ、山は都の富士なれや、なほさえかへる春の日に、比良の嶺おろし吹くとても、沖こぐ船はよも盡きじ。旅のならひの思はずも、雲井のよそに見し人も、同じ船に馴れ衣、浦をへだて、行くほごに竹生島も見えたりや。シテ「綠樹かげ沈んで。地「魚樹にのぼるけしきあり。月海上に浮んで免も波を走るか、おもしろの島のけしきや。シテ詞「舟が着いて候ふ御上り候へ。ツキ詞「あらうれしややがて神前へ參り候ふべし。シテ「この尉が御道しるべ申さうするにて候ふ。これこそ辨財天にて候へよく、御祈念候へ。ツキ「承り及びたるよりもいやまさりて有りがたう候ふ。不思議やな此の島は、女人禁制どこそ承りて候ふに、あれなる女人は何とて參られて候ふぞ、それは知らぬ人の申しごとにて候ふかたじけなくも此島は、九生如來の御再誕なれば、殊に女人こそまゐるべけれ。ツレ「なうそれまでも、なきものを。地「辨財天は女体にて、その神徳もあ

九生如來 大日如來

竹生島



正覺 悟を得るをいふ  
獅子通王 佛の名この佛出世前より辨天は此誓を立てたまへりとな  
利生 利益

らたなる、天女と現じおはしませば、女人とてへだてなし、たゞ知らぬ人の言葉なり。クセ「かゝる悲願をおこして、正覺年ひさし。獅子通王のいにしへより、利生さらにおこたらず。シテ」げに／＼かほご疑ひも、地「荒磯じまの松陰を、たよりによする海人小舟。われは人間にあらずとて、社壇の扉おしひらき、御殿に入らせ給ひければ、翁も水中に入るかと思ひしが白波の、立ち返りわれは此海の、あるじぞと云ひすて、また海に入らせ給ひけり。地「御殿しきりに鳴動して、日月ひかりかゝやきて、山の端いづる如くにて、あらはれ給ふぞかたじけなき。天女」そも／＼これは、此島に住んで臣をうやまひ國をまもる、辨財天とはわが事なり。地「その時虚空に音楽聞え、花ふりくだる春の夜の、月にかゝやく少女の袂、かへす／＼もおもしろや。地「夜遊の舞樂も時すぎて、月すみわたる海づらに、波風しきりに鳴動して、下界の龍神あらはれたり。龍神湖上に出現して、ひかりもかゝやく金銀珠玉を、かのまれびとにさゝぐるけしき、ありがたかりける奇特かな。シテ」もとより衆生濟度の誓ひ。地「もとより衆生濟度の誓ひ様々なれば。或は天女

の形を現じ、有縁うゑんの衆生の諸願を叶へ、又は下界の龍神となつて、國土を静め誓ひを現はし、天女は宮中に入らせ給へば、龍神はすなはち湖水に飛行して、波を蹴立て水を返して、天地に群る大蛇の形、天地に群る大蛇の形は、龍宮に飛んでぞ入りにける。

兼 平

シテ 船頭の翁 後 今井兼平  
ワキ 木曾の僧

世 阿 彌

此謡曲は木曾義仲の臣今井兼平が粟津の御合戦にて討死せるを討るなり

ワキ次第「始めて旅を信濃路や／＼、木曾の行方を尋ねん。詞「是は木曾の山家より出でたる僧にて候。さても木曾殿は、江州粟津が原にて果て給ひたる由承り及び候ふ程に、彼御跡を弔ひ申さばとや思ひ、唯今粟津が原へと急ぎ候。道行「信濃路や、木曾の棧名かけはしにしおふ／＼、其跡とふや道のへの、草の蔭野の假枕、夜を重ねつゝ日を添へて、行けば程なく近江路や、矢橋の浦に着きにけり／＼。

シテ「聲」世の業の、憂きを身に積む柴舟や、焚かぬ先より漕がるらん。ワキ詞「なうなう其船に便船申さうなう。シテ詞「是は山田矢橋の渡舟にてもなし。御覽候へ柴

兼 平



積みたる舟にて候ふ程に、便船は叶ひ候ふまじ。ワキ「此方も柴舟と見申して候へども、折節渡りに舟もなし。出家の事にて候へば別の御利益に、舟を渡してたび給へ。シテ「實にもく、出家の御身なれば、余の人にはかはり給ふべし。實に御經にも如渡得船。ワキ「待ち得たる旅行の暮。シテ「かゝるをりにも近江の海の、二人「矢橋を渡る船ならば、それは旅人の渡舟なり。地「是は又、浮世を渡る柴舟のく、ほされぬ袖も水馴棹の、見馴れぬ人なれど、法の人にてましませば、船をばいかで惜しむべき。とくく、召され候へく。ワキ詞「如何に船頭殿に申すべき事の候。見え渡りたる浦山は皆名所にてぞ候ふらん御教へ候へ。シテ詞「さん候皆名所にて候。御尋ね候へ教へ申し候ふべし。ワキ「まづ向ひに當つて大山の見えて候ふは比叡山候ふか。シテ「さん候あれこそ比叡山にて候へ。麓に山王二十一社、茂りたる峯は八王子、戸津坂本の人家まで残りなく見えて候。ワキ「さてあの比叡山は王城より良に當つて候ふよなう。シテ「中々の事それ我山は。王城の鬼門を守り悪魔を拂ふのみならず、一佛乗の嶺と申すは、傳へ聞く鷲の御山を象れり。又天

琵琶湖の眺望

一佛乗の峯  
比叡山といふ

佛法には大乘の別あり、小乗の別あり、此山は大乗の成佛得脱を專にすればなり、凡佛法極度に達して無二なるを一佛乗といふ、遮那大日如来の三密の觀法を傳ふる所、禪定智慧、戒律、一念三千種の世間を具すの意、圓融圓滿、通佛法の不足なきをいふ

台山と號するは、震旦の四明の洞をうつせり。傳教大師桓武天皇と御心を一つにして、延暦年中の御草創、我立つ柚と詠じ給ひし、根本中堂の山上まで、残りなく見えて候。ワキ「さてく、大宮の御在所波止土濃とやらんも、あの坂本の内にて候ふか。シテ「さん候麓に當つて、少し木深き陰の見えて候ふこそ、大宮の御在所波止土濃にて御入り候へ。ワキ「有難や一切衆生悉有佛性如來と聞く時は、我等が身までも頼もしうこそ候へ。シテ「仰せの如く佛衆生通する身なれば、御僧も我も隔てはあらず、一佛乗の。ワキ「峯には遮那の梢をならべ。シテ「麓に止觀の海をたへ。ワキ「又戒定惠の三學を見せ。シテ「三塔と名づけ。ワキ「人は又。地「一念三千の機を顯はして、三千人の衆徒を置き、圓融の法も曇りなき、月の横川も見えたりや。さて又麓はさ、波や、志賀、辛崎の一つ松、七社の神輿の、御幸の梢なるべし。さ、波の水馴棹、漕がれ行く程に、遠かりし向ひの浦波の、粟津の森は近くなりて、跡は遠きさ、波の、昔ながらの山櫻は青葉にて、面影も夏山の。うつり行くや青海の、柴舟のしばしも、暇ぞ惜しきさ、波の、寄せよく、磯ぎはの



紅波 血流れ  
て波さなる意

粟津に早く着きにけり／＼。ワキ歌「露を片敷く草薙／＼、日も暮れ夜にもなりしかば、粟津の原のあはれ世の、なきかげいざや弔はん／＼。後シテ「白刃骨を碎く苦しみ眼睛を破り、紅波楯を流す粧ひ、胡籙に殘花を亂す、一聲「雲水の、粟津の原の朝風に、地「関つくり添ふ聲々に、シテ「修羅の巷は騒がしや。ワキ「不思議やな粟津の原の草枕に、甲冑を帯して見え給ふは、如何なる人にてましますぞ。シテ「愚と尋ね給ふものかな。御身是まで來り給ふも、我なき跡をとはん爲めの、御志にてましますや。兼平是まで參りたり。ワキ「今井の四郎兼平は、今は此世に亡き人なり、さては夢にも有るやらん。シテ詞「いや今見る夢のみか、現にも早水馴棹の、舟にて見々えし物語り、早くも忘れ給へりや。ワキ「そもや舟にて見々えしとは、矢橋の浦の渡守の、シテ「其船人こそ兼平が、現に見々えし姿なれ、ワキ「さればこそ始めより、やうある人ぞ見えつるが、さては昨日の舟人は、シテ「舟人もあらず。ワキ「漁夫にも、シテ「あらぬ、地「武士の、矢橋の浦の渡し守、矢橋の浦の渡守と、見えしは我ぞかし。同しくは此舟を、御法の舟に引きかへて、我を又彼

義仲の最期

岸に、渡してたばせ給へや。地「クリ「實にや有爲生死の巷、來つて去る事早し。老少以て前後不同、夢幻泡影いづれならん。シテサシ「唯是槿花一日の榮。地「弓馬の家澄む月の、僅に残る兵の、七騎となりて木曾殿は、此近江路に下り給ふ。シテ「兼平瀬田より參りあひて、地「又三百余騎になりぬ。シテ「其後合戦度々にて、又主従二騎に討ちなさる。地「今は力なし。あの松原に落ち行きて、御腹召され候へど、兼平すゝめ申せば、心細くも主従二騎、粟津の松原さして落ち給ふ。ワキ「兼平申すやう、後より御敵、大勢にて追つかけたり。防矢仕らんとて、駒の手綱を返せば、木曾殿御誑ありけるは、多くの敵を遁れしも、汝一所にならばやの、所存ありつる故ぞとて、同じくかへし給へば、兼平又申すやう、こは口惜しき御誑かな。さすがに木曾殿の、人手にかゝり給はん事、末代の御恥辱、唯御自害有るべし。今井もやがて參らんと、兼平に諫められ、又引つ返し落ち給ふ。さて其後に木曾殿は、心細くも唯一騎、粟津の原のあなたなる、松原さして落ち給ふ。シテ「頃は正月の末つ方、地「春めきながらさえかへり、比叡の山風の、雲行く空も



吳織。あやしや通路の、する白雪の薄氷、深田に馬をかけ落し、引けども上らず、打てども行かぬ望月の、駒の頭も見えはこそ。こは何とならん身の果、せん方もなくあきれはて、此ま、自害せばやとて、刀に手を掛け給ひしが、さるにても兼平が、行方如何にと遠方の、あとを見返り給へば、シテ「何處より來りけん。地」今ぞ命は槻弓の、矢一つ來つて、内兜にからりと入る。痛手にてましませば、たまりもあへず馬上より、遠近の土となる、處はこゝぞ我よりも、主君の御跡を、まづ弔ひてたび給へ。

ロンギ地「實に痛はしき物語り、兼平の御最期は、何とかならせ給ひける。シテ」兼平はかくぞとも、知らで戦ふ其隙にも、御最期の御供を、心にかくるばかりなり。地「さて其後に思はずも、敵の方に聲立て、シテ」木曾殿討たれ給ひぬと、地「呼ばるゝ聲を聞きしより、シテ」今は何をか期すべきと、地「思ひ定めて兼平は、シテ」是ぞ最期の高言と、地「鎧ふんばり、シテ」大音上げ、木曾殿の御内に今井の四郎、地「兼平と名乗りかけて、大勢に割つて入れば、本より一騎當千の、秘術を顯はし大

兼平の最期

つなぬく貫  
くなり双に首  
を貫き通すな  
り

巴御前の歴史  
を述べて義仲  
討死のさまを  
語らせたる作  
なり  
あさもよい  
木の枕詞  
美濃尾張の身  
の終をしいひ  
かけたるなり

粟津ヶ原

神を祝ふをま  
つりごころ  
神の本なるが政  
事の本なるが政  
所謂祭政一致  
の聖代なれば  
神威も尊しこ  
なり

勢を、粟津の汀に追つゝめて、磯打つ波のまくり切り、蜘蛛手十文字に、打ち破りかけ通つて、其後自害の手本よとて。太刀をくはへつゝ、逆さまに落ちて、つなぬかれ失せにけり。兼平が最期の仕儀。目を驚かす有様なり。

巴

ワキ 旅僧  
シテ 里  
後シテ 巴

觀世小次郎

次第「行けば深山もあさもよい、木曾路の旅に出でうよ。ワキ詞、是は木曾の山家より出でたる僧にて候。道行「旅衣、木曾の御坂を遙々と、思ひ立つ日も美濃尾張、定めぬ宿の暮ごとに、夜を重ねつゝ、日を添へて、行けば程なく近江路や、鳩の海とは是かどよ。詞「急ぎ候ふ程に江州粟津の原とやらんに着きて候。此所に暫く休らはゞやと思ひ候。

シテ「おもしろや鳩の浦波しづかなる、粟津の原の松陰に、神を祝ふや政事、實に神威も頼もしや。ワキ詞「不思議やな是なる女性の神に参り、涙を流し給ふ事、返すくも不審にこそ候へ。シテ「御僧は自らが事を仰せ候ふか。ワキ「さん候神に参

巴



行教 京都大  
安寺の僧清  
和天皇御代の  
人にて字佐八  
幡を男山に勤  
請せり  
何事のおはし  
ますの歌はし  
西行の詠にて  
行教にあらず

巴

三〇八

五衰 天人に  
も命終る時に  
は五つの衰態に

り涙を流し給ふ事を不審申して候。シテ「おろかど不審し給ふや。傳へ聞く行教和尙は、宇佐八幡に詣で給ひ一首の歌に曰く、何事のおはしますとは知らねども、詞「忝なさに涙こぼるゝと、かやうに詠じ給ひしかば、神もあはれどや思しめされけん。御衣の袂に御影をうつし、それより都男山に誓ひを示し給ひ、國土安全を守り給ふ。おろかど不審し給ふぞや。ソキ「やさしやな女性なれども此里の、都に近き住居とて、名にし負ひたるやさしさよ。シテ詞「さてく御僧の住み給ふ、在所は何處の國やらん。ソキ「是は信濃の國木曾の山家の者にて候。シテ「木曾の山家の人ならば、粟津が原の神の御名を、問はずは如何で知り給ふべき。これこそ御身の住み給ふ、木曾義仲の御座所。同じく神と祝はれ給ふ。拜み給へや旅人よ。ソキ「不思議やさては義仲の、神とあらはれ此の所に、いまし給ふは有難さよと、神前に向ひ手を合はせ。地「古への、是こそ君よ名は今もく、有明月の義仲の、佛と現じ神となり、世を守り給へる、誓ひぞ有難かりける。旅人も一樹の蔭、他生の縁とおぼしめし、此松が根に旅居し、夜もすがら經を讀誦して、五衰をなぐさ

をあらはすこ  
いふ佛語なれ  
ど、こゝは唯  
意へたる身の  
意

落花空しきを  
知る  
落花を見て世  
のはかなさを  
観ずとなり  
流水心無うし  
て云々  
水は無情のも  
のなれど自然  
に心を清うし  
て浮世をはな  
れしむとなり  
直道 人は非  
情の草木さち  
かひて直接に  
經文を聴聞せ  
らるゝ者なる  
をいふ

巴

め給ふべし。有難き値遇かな。實に有難き値遇かな。さる程に、暮れ行く日も山の端に、入相の鐘の音の、浦わの波に響きつゝ、いづれも物すごきをりふしに、我も亡者の來りたり。其の名をいづれども、知らずは此里人に、問はせ給へと夕暮の、草のはつかに入りけりく。ソキ歌「露をかたしく草枕く。日も暮れ夜にもなりしかば、粟津が原のあはれ世の、亡き影いざや弔はん、く。後シテ「落花空しきを知る。流水心なうしておのづから、澄める心はたらちねの地「罪も報も因果の苦しみ、今は浮まん御法の功力に、草木國土も成佛なれば、況んや生ある直道の弔ひ、彼はいづれも頼もしや、頼もしや、あら有難や。ソキ「不思議やな粟津が原の草枕を、見れば有りつる女性なるが、甲冑を帶する不思議さよ。シテ詞「なかくくに巴といひし女武者。女とて御最期に、召し具せざりし其恨み。ソキ「執心のこつて今までも、シテ「君邊に仕へ申せども、ソキ「恨みはなほも、シテ「荒磯海の、地「粟津の汀にて、波の討死するまでも、御供申すべかりしを、女とて御最期に、捨てられ參らせし恨めしや。身は恩のため、命は義による理、

巴

三〇九



誰か白真弓云々  
 誰か知らざる  
 皆よく知る弓  
 取即武士と云  
 義仲の信濃を  
 治承四年始め  
 て兵をあげた  
 馬の響な  
 時刻の到来  
 時刻の来りし  
 をいふ  
 順縁 偶然な  
 らぬ縁即正當  
 に用ふべきも  
 のをいふその  
 反對即逆縁な  
 り

義仲の最期

誰か白真弓取の身の、最期に臨んで、功名を惜しまぬ者やある。クセ「さても義仲の信濃を出でさせ給ひしは、五萬餘騎の御勢、鏝くつぱみをならべ攻め上る。礪波山や俱利伽羅、志保の合戦に於ても、分捕高名の其數、誰に面を越され。誰におどる振舞の、なき世がたりに、名ををし思ふ心かな。シテ「されども時刻の到来、地運槻弓の引き方も、渚に寄する粟津野の、草の露霜と消え給ふ。所はこゝぞ御僧達、同所の人なれば、順縁に弔はせ給へや。ロンギ地「さて此原の合戦にて、討たれ給ひし義仲の、最期を語りおはしませ。シテ「頃は正月の空なれば、地「雪はむら消えに残るを、たゞ通路と汀をさして、駒をしるべに落ち給ふが、薄氷の深田に駈け込み、弓手も馬手も笠は沈んで、下り立たん便りもなくて、手綱にすがつて鞭を打てども、引く方も渚の濱なり。前後を忘れて扣へ給へり。こは如何にあさましや。かゝりし處に、自ら駈けよせて見奉れば、重手は負ひ給ひぬ。乗替に召させ參らせ、此松原に御供し、はや御自害候へ。巴も供と申せば、其時義仲の仰せには汝は女なり、忍ぶ便りも有るべし。是なる守小袖を、木曾に届けよ此旨を

三世の契 過  
 去現在未來の  
 縁をいふ

木葉返 長刀  
 のつかひかた  
 の名  
 嵐もおつるや  
 云々 其わざ  
 の早きを形容  
 せるなり

上帯 笠の上  
 信樂笠を木曾  
 の云々 世な

背かば主従、三世の契り絶えはて、永く不興このたまへば、巴はごもかくも、涙にむせぶばかりなり。地「かくて御前を立ち上り、見れば敵の大勢、あれは巴か女武者、餘すな漏らすなど、敵手繁くかゝれば、今は引くとも遁るまじ。いで一軍いくさうれしやと、巴少しも騒がず。わざと敵を近くなさんと、長刀引きそばめ、少し恐るゝけしきなれば、敵は得たりと切つて懸れば、長刀柄ながくおつ取りのべて、四方を拂ふ八方拂ひ、一所に當るを木の葉返し、嵐も落つるや花の瀧波、枕をたゝんで戦ひければ、皆一方に切り立てられて、跡も遙に見えざりけり。シテ「今は是までなりと、地「立ち歸り我君を、見奉れば痛はしや、はや御自害候ひて、此松が根に伏し給ひ、御枕のほごに御小袖、肌はだかの守を置き給ふを、巴なくなぐ賜はりて、死骸に御暇申しつゝ、行けども悲しや行きやらぬ、君の名残を如何にせん。とは思へごもくれぐれの、御遺言の悲しさに、粟津の汀に立ち寄り、上帯切り、物の具心靜かに脱ぎ置き、梨打烏帽子同じく、かしこに脱ぎ捨て、御小袖を引きかづき、其際までの佩添はきぞへの、小太刀を衣に引きかくし、處はこゝぞ近江



忍ぶために笠  
をきて木曾に  
向ふさなり木  
曾のきに着る  
信樂笠今名産  
にあられごふ  
るくはありし  
こそ思はる

後めたさ義  
仲の死の氣に  
かゝりて不安  
なるないふ

愛兒を失ひて  
狂女さなり三  
井寺にきて途  
想なり  
一念一稱一  
たび観音の御  
名を稱へ念す  
るだに利益を  
得るこの意

靈夢 夢に観  
音の御告を蒙  
るこそ

なる、信樂笠を木曾の里に、涙と巴はたゞひとり、落ち行きしうしろめたさの  
執心しゅうしんを弔ひて給ひ給へく。

三井寺

シテ  
ラキツレ  
子方  
女  
三井寺住僧  
同  
伴僧  
千満

世阿彌

「南無や大慈大悲の觀世音さしも草さしもかしこき誓の末、一稱一念なほ頼み  
あり。ましてや此程日を送り、夜を重ねたる頼みの末、なごか其かひなからんご、  
思ふ心ぞあはれなる。下歌「憐み給へ思ひ子の、行末何ごなりぬらんく。上歌」  
「枯れたる木にだにもく、花咲くべくはおのづから、いまだ若木の緑子に、  
再びなごか逢はざらんく。あら有難や候。少し睡眠の内に、新なる靈夢を蒙  
りて候ふは如何に。妾を何時も訪ひ慰むる人の候。あはれ來り候へかし、語らば  
やと思ひ候。狂言「シカく。シテ詞「唯今少し睡眠の内に、新なる御靈夢を蒙りて  
候。我子に逢はんと思はゞ、三井寺へ參れと新に御靈夢を蒙りて候。狂言「シカく」

三井寺

秋半の暮  
八月十五日の  
暮る、を待ち  
てなり

雪ならば古  
歌「雪ならば  
幾度袖を拂は  
まじ花の吹雪  
の志賀の山越

シテ詞「あら嬉しと御合はせ候ふものかな。告に任せて三井寺とやらんへ參り候ふ  
べし。ラキツレ「秋も半の暮待ちてく、月に心や急ぐらん。詞「是は江州園城寺の住  
僧にて候。又是に渡り候ふ幼き人は、愚僧を頼む由仰せ候ふ間力なく師弟の契約  
をなし申して候。又今夜は八月十五夜明月にて候ふ程に、幼き人を伴ひ申し、皆  
々講堂の夜に出で、月を詠めばやと存し候。歌「類なき名を望月の今宵とて、夕  
べを急ぐ人心、知るも知らぬも諸共に、雲を厭ふやかねてより月の名頼む日影か  
なく。後シテ「雪ならば幾度袖を拂はまし。花の吹雪と詠じけん、志賀の山越うち  
過ぎて、詠めの湖の鶏照る比叡の山高み、上見ぬ鷺の御山とやらんを、今日の前  
に拜む事よ。あら有難の御事や。かやうに心あり顔なれども、我は物に狂ふよな  
ふ。いや我ながら理なり。あの鳥類や畜類だにも、親子のあはれは知るぞかし。  
ましてや人の親として、いとほし悲しと育てつる、子の行方をも白糸の、地「亂  
心や狂ふらん。シテ「都の秋を捨て、行かば、地「月見ぬ里に住みや習へると、さこ  
そ人の笑はめ。よし花も紅葉も、月も雪も故郷に歸らんく。歸ればさ、波や、



桂はみのる三  
五の暮李嶠  
の詩に桂生三  
五夕さあるを  
さる月中に桂  
ありて仲秋熟  
すさいひ傳ふ  
なりは十五夜  
三夜中新月  
色二千里外  
故人心は白樂  
天の詩

清見寺 駿河  
國庵原郡 清見  
瀉にあり

三井寺の鐘

夜庚公 晋の  
度亮をいふ朗

志賀辛崎の一つ松、緑子の類ならば、松風に言問はん。松風も、今は脈はじ櫻咲く、春ならば花園の、里をも早く杉間吹く、風冷まじき秋の水の、三井寺に着きにけり。三井寺に早く着きにけり。ワキ「桂は實る三五の暮、名高き月にあこがれて庭の木陰に休らへば、シテ」實に／＼今宵は三五夜中の新月の色、二千里の外の故人の心。水の面に照る月並を數ふれば、秋も最中夜も半、所からさへ面白や。地「月は山。風は時雨に鴉の海、／＼。波も粟津の森見えて、海こしの幽に向ふ影なれど月は眞澄の鏡山、山田矢走の渡船の、夜は通ふ人なくとも、月の誘はゞおのづから、舟もこがれて出づらん。舟人もこがれ出づらん。シテ詞「面白の鐘の音やな。我故郷にては清見寺の鐘をこそ常は聞き馴れしに、是は又さ、波や、三井の古寺鐘はあれど、昔にかへる聲は聞えず。誠や此鐘は、秀郷とやらんの龍宮より、取り歸りし鐘なれば、龍女が成佛の縁に任せて、妾も、鐘を撞くべきなり。地次第「影はさながら霜夜にて／＼、月にや鐘はさえぬらん。ワキ「やあ／＼暫く。狂人の身にて何とて鐘をば撞くぞ急いで退き候へ。シテ詞「夜庚公が樓に登りし

詠集に  
曉入三梁王  
之苑一雪滿  
群山之樓登  
度公之夜樓  
月明二千里  
さありこれな  
引く  
團々 離三海  
嶠一舟々 出二  
雲衛一 賈島  
の詩

かほどの聖人  
ていへるなり

五障の雲 女  
は罪深くして  
五つの障害あ  
りさ佛書にい  
づ雲さは障害  
物をたこへて  
いへるなり

も、月に詠せし鐘の音なり許さしめ。ワキ「それは心有る古人の言葉、狂人の身として鐘撞くべき事、思ひも寄らぬ事にて有るぞとよ。シテ「今宵の月に鐘撞く事、狂人としてな厭ひ給ひそ。或る詩に曰く、團々として海嶠を離れ、舟々として雲衢を出づ。此後句なかりしかば、明月に向つて心を澄いて、今宵一輪満てり、清光何れの所にか無からんと、此句を設けて餘りの嬉しさに心亂れ、高樓に登つて鐘を撞く。人々如何にと咎めしに是は詩狂と答ふ。かほどの聖人なりしに、月には亂るゝ心有り。ましてや拙なき狂人なれば、地「ゆるし給へや人々よ。煩惱の夢を覺ますや、法の聲も靜かに、先初夜の鐘を撞く時はシテ「諸行無常と響くなり。地「後夜の鐘をつく時は、シテ「是生滅法と響くなり。地「晨朝の響きは、シテ「生滅々已。地「入相は、シテ「寂滅、地「爲樂と響きて、菩提の道の鐘の聲、月も數添ひて、百八煩惱の眠りの、驚く夢の世の迷ひも、はや盡きたりや後夜の鐘に、我も五障の雲晴れて、眞如の月の影を詠め居りて明かさん。地「夫れ長樂の鐘の聲は、花の外に盡きぬ。シテ「又龍池の柳の色は、地「雨のうちに深し。シテ「其外／＼にも世々



眞如の月 悟  
 りて眞の佛  
 を得るを月  
 すむに譬へ  
 かくいふ  
 長樂鐘聲花  
 外  
 盡高祖の宮  
 名  
 漢高祖の宮  
 名  
 この宮中なる  
 時の鐘は花の  
 もさまで響き  
 て消ゆその意  
 龍池柳色雨  
 中  
 深柳の名所  
 柳  
 は柳の名所  
 柳  
 の春雨にそめ  
 られて緑のま  
 さるをいふ  
 難波寺 大阪  
 天王寺 大阪

三井寺

の人、言葉の林の兼ねて聞く。地「名も高砂の尾上の鐘、曉かけて秋の霜。曇るか  
 月もこもりくの、初瀬も遠し難波寺。シテ「名所多き鐘の音。地「盡きぬ法の聲な  
 らん。ツキ「山寺の、春の夕暮来て見れば、入相の鐘に花ぞ散りける。實に惜しめ  
 どもなど、夢の春と暮れぬらん。其外曉の妹脊を惜しむきぬくの、恨みを添ふ  
 る行方にも、枕の鐘や響くらん。又待つ宵に更け行く鐘の聲きけばあかぬ別れの  
 鳥は物かはと詠せしも、懸路の便の音信の聲と聞く物を、又は老いらくの、寢覺  
 程ふる古へを、今思ひ寐の夢だにも、涙心のさびしさに、此鐘のつくくと思ひ  
 を盡す曉を、いつの時にかくらべまし。ツキ「月落ち鳥鳴いて、地「霜天に満ちて  
 冷まじく、江村の漁火もほのかに、半夜の鐘の響きは、客の船にや通ふらん。蓬  
 窓雨したどりて、馴れし汐路の楫枕、浮寐ぞかはる此海は、波風も静かにて、秋  
 の夜すがら月すむ。三井寺の鐘ぞさやけき。ツキ「如何に申すべき事の候。ツキ「何  
 事にて候ふぞ。ツキ「是なる物狂の國里を問うて賜はり候へ。是は思ひもよらぬ事  
 を承り候ふ物かな。さりながら易き間の事尋ねて參らせうするにて候。如何に是

なる狂女、おここの國里は何處の者にて有るぞ。シテ「是は駿河の國清見が關の者  
 にて候。ツキ「何なふ清見が關の者と申し候ふか。シテ「詞あら不思議や。今の物仰  
 せられつるは、正しく我子の千滿殿ござめれあら珍しや候。ツキ「暫く。是なる狂  
 女は兪忽なる事を申す者かな。さればこそ物狂にて候。シテ「なふ是は物には狂は  
 ぬ者を、ものに狂ふも別れ故、逢ふ時は何しに狂ひ候ふべき。是は正しく我子に  
 て候。ツキ「さればこそ我子と申すか筋なき事と申し候。急いで退き候へ。ツキ「あ  
 ら悲しや左のみな御打ち候ひそ。ツキ「言語道斷はや色に出で給ひて候。此上はま  
 つすぐに御名乗り候へ。ツキ「今は何をか包むべき。我は駿河の國清見が關の者な  
 りしが、人商人の手に渡り、今此寺に在りながら母上我を尋ね給ひて、かやうに  
 狂ひ出で給ふとは、夢にも我は知らぬなり。シテ「又妾も物に狂ふ事あの兒に別れ  
 し故なれば、たま／＼逢ひ見る嬉しさのまゝ、やがて母よと名のる事我子の面伏  
 なれど、子故に迷ふ親の身は、耻も人目も思はれず。ロンギ地「あ痛はしの御事  
 や。よそ目も時による物を、逢ふを喜び給ふべし。シテ「嬉しながらも衰ふる、姿

三井寺



はさすが羽束師の、漏りて餘れる涙かな。地「實に逢ひ難き親と子の、縁は盡させぬ契りどて、シテ」日こそ多きに今宵しも。地「此三井寺に廻り來て、シテ」親子に逢ふは何故ぞ、此鐘の聲立て、物狂の有るぞとて、御咎め有りし故なれば、常の契りには別れの鐘と厭ひしに、親子の爲めの契りには、鐘故に逢ふ夜なり。嬉しき鐘の聲かな。地「かくて伴ひ立ち歸りく、親子の契り盡させずも富貴の家となりにけり。實に有難き孝行の、威徳ぞめでたかりけるく。」



鹿飛橋

雜

近江國

近江史蹟

近江の地理

青山四周綠樹境を繞りて一寰宇をなし、中琵琶の大湖を湛ふ。土地湖面に沿うて肥え、風光山水によりて麗かに、眞に湖國の美を表はすもの之を近江國となす。東美濃伊勢に隣り、南伊賀山城に接し西山城丹波に連り、北若狹越前に界す。面積二百六十九方里、東西十五里、南北二十五里、戸數十三萬二千、人口六十九萬二千。今行政上の便宜により一市十二郡十五町百八十七箇村に區劃す。之を史に按ずるに上古の淡海國或は佐々浪の國、又遠淡海國に對して近淡海國と呼びしもの皆湖水あるに因りて名づくるなり。景行成務の朝茲處に都し給ひしことありといへども志賀の名ありて近江の名あらず。天智帝の遷都に及びて近淡海の名を付し、元明帝の朝近江の名始めて起ると傳ふ。中世以降江州と呼び又江南江北に分

近江の歴史



記紀 古事記  
日本書紀

ち江東江西の別をなすことあり。滋賀高島の地を西近江といひ坂田東淺井伊香の地を北近江といふも皆地理上の稱呼に過ぎず。而して西南畿内を控へ東北三道の要衝を扼す、名畿外に屬すといへども實は京師の藩屏たり。其天下の治亂興廢の渦中に投せられしも亦自然の數ならずや。記紀既に皇親の此地に封せられし事を載す、殊に高穴穗宮大津宮の遷都は、此地の文明を進めしこと幾何なるを知るべからず。加ふるに三韓歸化の民屢此地に配置せられたる事あり。文物工藝の進運を助けしこと亦少なしとせず、以て文化の恵に浴せしことの早きを知るべし。武家政柄を執りて以來、此地佐々木氏の管國となり子孫六角京極の二家に分れて之を領し、戰國の代群雄四方に起り、覇を京畿に建てんとする者先茲土に根據を得ざるべからず。此地戰亂の多かりし事亦止むを得ざるなり。徳川氏に及び元勳井伊氏を彦根に封じて京畿控制の大任を負はしめ、ことさらに大小諸侯の領を犬牙錯綜せしめて以て維新に至る。首を回らせば叡山塔上三千の僧兵を蓄へし根據も此に在り。七層臺上、天下を吞吐せんと欲せし信長の城趾も此に在り。八景の勝

佐々木氏 世  
に近江源氏と  
いふ

天下に鳴り、竹生の景江湖に響く。全國到る處悉く史蹟たり勝地たり。英雄此に戦ひ俊髦此に起つ。嗚呼天下の盛衰英雄の興亡常に湖國に繋る、亦何ぞ興趣の多きや。

### 琵琶湖

岡部 精一

東坡 蘇東坡  
宋代大詩人、  
赤壁に遊びて  
なれる其賦有  
名なり

東坡の赤壁賦は由來漢文を學ぶ青年に絶大の印象を與へたものである。予も亦子供心に此文を學んで其の感に撃たれた一人である。文中に含まれてゐる哲學的内容は暫らく措き、其文學の齎らす赤壁の光景は歴々眼前に髣髴として身は理想の境に在るの思がする。殊に東坡の脱俗的清遊を心中に描けば、魂は飛び神は馳せて人をして水郷の船遊に憧憬せしむるものがある。

琵琶湖遊覽

往年盛夏の一夕、舟を近江の琵琶湖に泛べ會心の友と此一大淡海の人となつた時、始めて年來の思を果し赤壁賦の眞味を解する事が出来たと同時に大湖の風光が流石に理想的水國の特性を具備して居る事を悟つた。



藤竹外、花朝藤井、  
澗江、桃花水、  
暖送輕舟、背指、  
孤鴻欲沒、頭雪、  
白比良山一角、  
春風猶未到、江  
州の詩を引け  
る也

延暦寺

唯見る造化此一大寂靜の天地を我國の中央に展き、蕩々三萬六千頃に亘るの淡水を湛へ七十二峰四周を繞り、所謂八景を其間に點綴して雲煙長汀を籠め、白帆二三つ水天の間に懸つて居る。藤竹外の雪は比良山の一角に白く、大比叡小比叡山は行儀よく竝んで多年王法のからだ歴史の聯想を其翠黛の間から漏して居る。

「さん候あれこそ比叡山にて候へ麓に山王廿一社、茂りたる峯は八王子、戸津坂本の人家まで残りなく見えて候。「扱あの比叡山は王城より長に當つて候よなう。「中々の事それ我山は王城の鬼門を守り惡魔を拂ふのみならず一佛乘の嶺と申すは傳へ聞く驚の御山を象れり。又天台山と號するは震旦の四明の洞をうつせり。傳教大師 桓武天皇と御心を一つにして延暦年中の御草創我立つ袖と詠じ給ひし根本中堂の山上まで残りなく見えて候。(謡曲兼平)

三井寺

三井寺は伽藍の軒端を翠微にみせて、晚鐘の餘韻はゆるやかに湖面に亘る。

「煩惱の夢を覺すや法の聲も靜に先初夜の鐘を撞く時は、「諸行無常と響くなり。「後夜の鐘を撞く時は。是生滅法と響くなり。「晨朝の響は、「生滅々已。「入相は、「寂滅爲樂と響きて菩提の道の鐘の聲月も數添ひて百八煩惱の眠の驚く夢の迷もはや盡きたりや後夜の鐘に我も五障の雲暗れて真如の月の影を詠めたりて明かさん。(謡曲三井寺)

木曾義仲墓

旭將軍の短き榮華の夢は粟津ヶ原の晴嵐に名残を留め一代の俳宗松尾芭蕉も木曾

松尾芭蕉墓

殿と春中合せの寒さを忍んで此風光の裡に千年の眠を託した。箴に八矢を餘した

今井兼平墓

れば射て八騎仆し君の先途を見届けた今井兼平の墓も離々たる秋草の間に壽永の昔を語つて居る。

この一大寂靜の天地を繞る湖畔の風色は常に天然の美を以て飾られて居るばかりではなく、時代の鏘と歴史の燼とがついて居る。此鏘と燼が琵琶湖の天然に絶大の價値を與ふるもので、これが無かつたならば落寞の風光に過ぎないのであらう。東坡が赤壁を叙するにも唯江上の清風と山間の明月のみを説かないで、曹孟德を借り來つて其天然の風景に固着した時代の鏘と歴史の燼を發揚させて居るではないか。  
(歴史地理近江號)

近江八景

友田宜剛

八三 八景  
三景

八と云ひ三といふ。自然の景に數の限りはあるべからねど、年久しく傳へきし其名のやがて人の心に興をも添へて他の景よりもましてをかしく感ずるぞかし。



田子 駿河國  
興津 附近の海  
岸  
洞庭 湖の名  
なり 岳州 巴陵  
の西南 一里に  
在り

矢橋歸帆

宮島の繪の様なる、松島の仙境じみたる、橋立の天にも及ぶべきまはなる、固より絶勝にはあれど、富士の高嶺や田子の浦曲や、なごその選には漏れぬべき。漢土洞庭に瀟湘の八景を稱へてより、我國亦これに倣ふもの少なからず。その最も古く名高く大なるものを近江の八景となす。鴉の海、形に名を得て琵琶湖といふ。琵琶の鹿首なすところに謂はゆる八景あり。試みに東南の方より順次に數へんか。草津の西に矢橋あり。歸帆風を孕んで鳥の飛ぶが如くなるは、雅客を待たずして快を叫ばしむ。舟行一里にして大津に達すべきは、陸路の三里に比して何ぞ近き。古歌に、

ものふの矢走のわたり近くとも急がばまはれ勢多のながはし。

瀬田夕照

と言へるはもとより急遽の際には殊に正路を取るべき誠の心なるべけれど、またこの間の地勢を髣髴たらしむ。これより西にめぐれば湖水漸く迫りて瀬田川となる。長橋波に虹をゑがき、夕照斜に欄干の擬寶珠を射るは何等の佳境ぞや。橋を渡り川に沿ひて數十町を行けば、石山寺あり。境内處々に黒き巖の時てるを見る。

石山秋月

粟津晴嵐

夢を渡る夢  
の如くひびき  
巨る

近くは瀬田川遠くは湖上、遙けき縹渺の眺め皆この山上に弄ぶべし。況んや秋、明月の皎々たるをや。粟津に行けば街道の松今も残り、田間今井兼平の墓あり。千里雲霽れて、晴嵐涼しく渡る時、歴史の人は史感に耽り、詞藻の人は吟詠に我を忘るべし。大津の町を西に至れば三井寺あり。山高くして湖上望悠々。境内には多くの堂宇あり。晚鐘暮靄を漏りて湖畔に夢と渡る時、遊子の感想果して如何。

三井晚鐘

志賀の部址  
唐崎の南方  
賀里は天智天  
皇の都のあり  
じところなり

さゞ波や志賀の都の荒れにし跡を慕ひつゝ、一里ばかりも北に行けば比叡の山頭上を壓して、右に唐崎の湖上に斗出せるあり。老松蟠屈、蓋し千年の古木。夜雨蕭々として、人籟すべて絶ゆる時、こゝに湖神に接するの想あり。この松、常

唐崎夜雨

人籟 人籟な  
ごないふ籟は  
びいきなり

は大津の方より湖上遙かに見ゆべきも、春霞の頃は滋賀の花よりもおぼろなる由芭蕉の句にて知らる。更に北すれば比良嶽雪に玉を磨きて、紫に暮れゆく夕の姿、その氣高さは何にか喩へん。堅田の御堂の湖上に浮けるはさながらの蜃氣樓

堅田落雁

蜃氣樓 光線  
の反射により  
て遠方の建物  
などの空中に  
見ゆるをいふ

にして、觀世音菩薩の慈悲の相もこゝには一際尊く拜まるべし。落ちぬる雁の驚くともなく立たんとするなごげに無心なりや。八景はこゝに盡くれども景勝の



海上にあらはるる沙漠にもこの現象あり藤樹書院大瀧の東北一里なる青柳村大字上小川にあ

### 湖畔の詩人

横山健堂

岡本黄石

矩之丞 號靜  
區又靜齋長崎  
義死は實に天  
保八年二月十  
九日

小野湖山

湖山 東淺井  
郡田根村大字  
高畑の人星殿  
門下明治四十  
三年四月十日  
歿年九十七

黄石 宇津木  
兵庫久純三男

古來湖畔には詩人多し。吾輩嘗て其一人を識る、岡本黄石なり。彼は宇津木矩之丞の弟、宇津木は大鹽平八郎の高足子、天保の暴舉に其師を諫めて義死す。小野湖山と黄石とは近代湖畔の二詩宗なり。湖山は維新前豊橋に聘せられ多く郷國の事に與らず。黄石は則彦根の藩事に盡して力あり。

湖山の詩雄勁自ら大家の風格を具す。鎌倉懷古は既に江湖に傳唱す。格調の堂々たる、近古諸家鎌倉に關して此傑作なし。老來稍平實に流るゝといへども詩と書と猶双絶たるを失はず。彼は巢鴨に隱栖し百歳に近くして時に箒を執りて門前の落葉を掃ひし事もありしと聞く。吾輩終に彼を見るを得ざりしを遺憾とす。

黄石は夫妻四歳の差あり。共に白髪となりて九十に近かりし。黄石は童顔にして

出で、岡本織  
部祐に養はれ  
彦根藩老たり  
廢藩後文人を  
以て自任す明  
治三十一年四  
月十二日歿年  
八十八

藤谷一六

一六 水口藩  
士明治元年徵  
士を以て仕へ  
從三位勳二等  
に至る明治三  
十八年七月十  
五日歿す年七  
十二

鳴鶴 現存

立太郎 一六  
の長子明治廿  
四年一月歿す  
享年三十五  
辨二郎季雄  
現存

大溝 高島郡  
大溝町

青柳村  
上小川

壽老人の如く、夫人は新婚の時實家より伴ひ來りし老婢を尙左右に侍せしめ、態度儼として昔の家老格を崩さず。翁嫗詩を賦し畫を描き、嫗松を畫けば翁之に題す。此老詩人夫妻は實に聖代の人瑞たらすんばあらざりき。

一六と鳴鶴とは一代の書家。一六は水口に鳴鶴は彦根に出身して姻戚たり。一六は子福者なり、博士巖谷立太郎は鑛山學の先輩、博士目下部辨二郎は土木の大家其弟季雄は即小波山人、三人兄弟皆世に知らる。

一六も鳴鶴も詩人なれども書名に蔽はる。黒樂天の名を以て狂詩を遣る者は小波なり。小波は漣なりさどなみは志賀の都の歌に採るか。(歴史地理近江號)

### 藤樹書院

角田浩々歌客

大溝より一里許の村道を過ぎ、鳴川の堤に竹林繁き路をたざれば一橋あり。橋を渡り了りて一望萬頃の平田、水縦横に流れて西の方當面に喬木の叢林あり、之

藤樹書院



藤樹書院  
近藤正齋墓

を青柳村上小川となす。人家數十の村、村の北側に一郭の邸宅あり。扉に下り藤の紋彫りたる門あり、門側に藤樹書院と刻せる碑石を建つ。扉のみは新らしければ門は延享四年の百年祭に造れるものなりとぞ。

正齋名は守重  
幕府の旗下文政  
書物奉行文政  
十二年大溝に  
歿す墓は同町  
瑞雪院に在り

近藤正齋の墓は藤樹書院を隔つる一里、正齋は初めに經世の志を北門鎖鑰に致し、後に考古、載籍の文獻に述作に従ふ。正齋の學は考究にあり。藤樹は足其の郷を出でずして名は天下に馳す。學は思想は躬行にあり。奇傑近藤守重の墓に對して近江聖人の書院相距ること唯一里許なれども、其の學の思想は全く範疇を異にす。正齋はその探檢の蹟と述作とに残り、藤樹はその德行に存す。彼は草萊中の孤壁に立ち、此は學蹟として公有の書院あり、遺愛樹あり。

書院は昔のものは明治十三年に焼失し、今のは十五年に建築せるもの。玄關より左に六疊二室、中に七疊半の次の室と十疊の奥室とあり。一段下りて八疊の室あり。十疊の正面に光格天皇下賜一條忠良筆の徳本堂の扁額あり。その下に藤樹先生神位を安置し香爐を具へ、左方にその嗣子常省(季重)先生の靈位を置く。

扁額中目を惹くは大鹽中齋の跋藤樹先生致良知三大字眞蹟の細字大額となす。

一行三十字許全紙五十三行「天保五甲午秋八月二十有五日先生忌日也、浪華大鹽後素」と署して印あり。大鹽騷動四年前の筆なり。筆勢雄健墨痕滄潤、その文の仔細に讀むの暇無かりしを憾む。中齋が致良知に研思せる幾許ぞ、彼が陽明學を祖とし藤樹を拜せる志之より厚きを疑はず。彼藤樹書院の詩「院畔古藤花盡時、泛湖來拜昔賢碑、餘風有似比良雪、流滅無人致此知」とあり。致良知跋文と之を草せると同時か。惜むべし、中齋子良知を致すもの比良山の雪の如く滅し去るを嘆じながら竟に藤樹先生の如く良能を世に致す能はざりしを。

院畔の古藤は大椗二樹にからみて枝ををひろげ五坪許の棚に綠蔭日を遮りて藤豆多く垂れたり。一片の豆の細胞の中にも近江聖人の靈は宿る。予は豆を通じて昔賢を尙友せんとし一箇を撮りて衣帶に收む。

藤樹遺墨

藤樹書院の藏書藤樹の遺品少からざる中に、自筆の孝經啓蒙の一冊は半紙本に罫線を劃し、細字一行十九字一枚十一行にして筆意端正細心の蹟を見るべし。其の



他書幅の「うゑて見よ花のそだぬ里も無し心からこそ身はいやしけれ」「ごみ塵  
といとへばむさくいとねば濁りたる世もみな角田川」などの短冊あり。蕃山の  
墨蹟「夏雲多奇峯」の大字はその蕃山なるが故に味あるを覺ゆ。

書院には別に土藏造の書庫あり。往訪者の需に應じて藏品を展觀せしむ。一行は  
種々得る所ありて去る。藤樹書院は今高島郡の保管にかゝる。院は新しくとも蹟  
は古し。此書院の蹟あるが爲に村風民俗冥々の間に亦教化せらるゝものあらん。  
予の知る處にては伊勢松阪の本居宣長の鈴屋書屋と好對とすべく、鈴屋の家は當  
時のまゝながら其の位置既に公園に移され、文豪宣長が親しく踏みたる舊蹟にあ  
らず。藤樹書院の家は舊居ならざるも榎の二大樹と古藤と依然として賢蹟を標し  
苔痕樹影なほ藤樹その人が履齒に觸れたる所なり。彼此長短あるも先哲の蹟を保  
管することに於ては共に喜ぶべし。

書院の門前に兒童の遊び居たると院後の茅屋に機織る聲の聞えたることは無限の  
詩味を供しくれたり。來訪者名簿を繕くに知友國分犀東子の名あり、その詩中にも

宣長 亨和元  
年歿

機杼の聲秧青の村等の文字見え、近江聖人の藤樹書院は實に平田萬頃の地、機杼  
聲裡禾稻の村に在り。  
(漫遊人國記)

### 藤樹先生

橘 南 谿

中江藤樹 慶  
安元年八月廿  
五日(三三〇)歿  
す年四十一近  
江聖人と稱せ  
らる  
分部侯 大溝  
藩主二萬石を  
領す

藤樹の遺徳

先生は俗稱中江與右衛門といひて江州大溝の在、小川村の産にて分部侯の領地の  
百姓なり。王陽明流の學者なりしが其の徳行近時の學者の及ぶ所にあらずとぞ思  
はるゝ。

先年余聞きし事あり。尾州の一士人用事ありて此の邊を過ぎ、先生の墓所小川村  
に在りと聞きて畑うつ農夫に尋ねしに「畑道なれば知れ申すまじ。案内して奉ら  
ん」とて先に立ちて行く。程なく小き藁屋に至り「しばし待たせ給へ」とて内に入  
る。やがて出づるを見るに、木綿の新しきひとへ物に布の小紋の羽織を着たり。彼  
の士人驚きて、さてく丁寧なる男かな。墓だに教へ得さすれば満足なるにと思ひ  
もてひ行くうち墓所にいたりぬ。彼の農夫竹垣の戸を開き「いざ入りて拜し給へ」

竹垣 今は石  
の玉垣となる

藤樹先生



といひて、其身は戸外に拜伏せり。士人大いに驚き、さては衣服を改め着せしは我が爲にはあらで、先生を敬するにてありけりと心づき「さては汝は藤樹の家來筋の者にてやある」と問へば「さには候はず。されど此の村の者は一人として先生の御恩を蒙らざるはなし『親をうやまひ子をしたしむ事をわきまへしりたるは先生の御蔭なれば必ずおろそかに思べからず』と、我が父母も常々をしへ候ひぬ」と語る。士人も始は只なほざりに一見の心にて來りしが、此の農夫の様子を見聞するに今更に心もあらたまり、ねんごろに拜して歸りぬとなり。

其の後余肥後にて村井某に親しく交りしに、この人或日外より歸り語りしは「さても今日珍らしき墨跡を見たり。此の國の家老何某の方へ近き頃江州より來りし聳養子有り。其の方へ用事あり行きて物語の序に、ふと思ひ出で、『その御里方の御領分に中江藤樹といひし人ありし由御存知にもや、其の手跡などは所持したまはずや』と語り出でしに、彼の人座を改め『藤樹先生の御事は我が父祖以來尊敬いたし候ひて老父我を愛するのあまり、遠方へ斯く參るについでかねて秘藏

の一軸を出して得させぬ。御所望ならば見せ申すべし』とて奥に入り禮服に改め、一軸を携へ出で、床にかけ遙かに引きさがりて拜せられぬ。其の尊敬かくばかりなれば我も手あらひ口すゝぎなどして拜してやみぬ。分部侯にありては畢竟領地の一農夫なるをかくまで敬せらるゝ事代々賢を愛し徳を敬ひ給ふとも有り難く、又藤樹先生の眞の大儒なることもはじめて知りぬ」と申されき。

此の二事、耳に残りあれば今度よき序なれば墓にも謁し講堂をも一見せばやと思ひて、大溝の北なる鴨といふ所より南へ入ること八町にして小川村に至る。農夫老婆までもくはしく道を教へ迷ふこともなくて講堂の前に出でたり。

兩戸とざしあれば其のとなり志村某といふ醫者の許をたづねて講堂を拜したき由いひ入るゝに「まづ玄關へ上り給へ」といふ。「草鞋がけなれば只かりそめに講堂の案内をといへど強ひて足そゝぎの水など持ち來るまゝ、やむことを得ず、草鞋脚絆など解きて玄關へ上るに某出で迎ふ。余講堂を拜見し神主をも拜したき由乞へば、某奥に入り禮服を着して講堂の鍵を手に持ち「いざ來り給へ」と引き連れて

鴨 高島郡水  
尾村大字鴨



〔藤樹書院〕  
藤樹書院の記  
参照すべし

相違 陽明學  
と朱子學との  
相違をさす  
釋菜 釋奠に  
て孔子を祀る  
儀式をいふ

行く。

さて講堂を開きたるに、堂はかやぶきにて間數四間あり。書院は南面にて十五疊講場なり。其の次は對客の間、八疊に床あり。其の次は十疊、其の次は臺所なり。正面縁側の上に藤樹書院といふ四字の額あり「分部昌命拜書」とあり。十疊敷の間に朱子の白鹿洞の規則を板に書きてかけたり。さばかり相違の學風なるに此の文をかけられたるも殊勝に覺ゆ。押入の内に深衣を着せる繪像あり、釋菜の時の圖なりと云ふ。其の前に厨子あり、其の内に神主あり。上箱に「先生姓中江諱原、字惟命、號願軒、稱藤樹先生。慶安元年戊子八月二十五日卒。葬邑東北玉林寺」の三十八字あり。箱の内の神主、常法の如し。

さて悉く見終りて某の宅へ戻り「いかなればかく此の堂を司りたまふ」と問ふに父祖代々門人にして殊に昔よりかく隣家に住み、今は先生の子孫も無ければかくは預り來れるなり。殊更今にてはよき門人もなくなりぬれば、毎月六度づゝ村民を集め論語を講ずるも、某を無理に其の人に當てられて勤め申すなり。又春秋の釋

菜を村中集りて勤むるにも、某を頭取とせるゆゑかく鍵をも預り居る事なり。講堂の修覆は領主より力を添へられて、領主も折々參詣あるに禮服を着せずしては堂中へ入り給はず」となり。

〔藤樹の經歷〕

大洲侯 伊豫  
加藤氏 五萬石  
を領す

夫より先生の出處を尋ぬるに「先生三十餘にて伊豫の大洲侯の招きに應せらる。

先生の老母船をきらひ、四國に渡り得ず江州に残り居て先生を愛し慕はるゝ故、やむことを得ず強ひて官祿を辭しいとまを願はれしに、侯惜しみて許されざれば願既に三度に及びて後、願書を出しすてにして大洲を忍び出で、歸り去れり。元來孝心より出でたる事故、侯もいとまを賜はりぬ。それより江州に歸り老母を養はれしなり。其の後諸侯より招きありしかご再び仕へられず。備前の招きにも門人の熊澤を出され幾程も無くて死去あり。わづかに四十一歳なり。此講堂の建ちしも死去二三年前の事なり。先生の嫡子徳右衛門常省先生と稱す。多病なりしかご壽は七十二歳まで保てり。其の人子無くして藤樹先生の子孫絶えたりき。對馬の家中に兄弟の家ありて今に中江を名乗るとの噂なり」と某語れり。されども其

〔熊澤蕃山〕



の餘教近郷に深く染み入りて殊更此の小川村の百姓は年若き者といへども毎夜集會して手習し、かりそめにも酒など打飲み亂舞音曲などをすることなく、まして博奕などはいふまでもなし。誠に此の邊の風儀溫和淳朴にして見る所聞く所、感に堪へず、有り難き事共なり。前の尾張肥後の物語相違なき事を知る。

熊澤善山 岡  
山藩主池田光  
政に仕へて政  
に任ず  
藤樹の感化  
河原市 今の  
高島郡新儀村  
大字安井川

熊澤先生は其の門人なり。此の人藤樹先生に従はれし始を尋ぬるに、其の頃加賀の飛脚金子貳百兩を預り持ちて京へ登るに、江州河原市より輕尻からしの馬をやとひ板木の宿に泊る。馬方は河原市へ歸り馬を洗はんと鞍を解きしに、鞍の下より財布一つ出でたり。とりあげて見れば金貳百兩あり。馬方大いに驚き今の飛脚の取忘れたるにこそと思へば、其の儘板木に走り行き飛脚の泊れる宿に至り、對面して委しく尋ね問ふに相違無ければ其金を取り出して返しけるに、飛脚は死にたる者のよみがへりたる心地して、悦びのあまり行李より別の金子拾五兩を取り出して馬方に與へ「もし此貳百兩なくば我が一命を失ふのみならず親兄弟までも重き罪に至らん。さればそこの高恩中々言葉のいひつくすべきにあらねども、先づ當座の

御禮までに贈り奉る」と涙を流して悦ぶに、馬方大いに驚きし顔色にて「そなたの金をそなたに取り納めたまふに何の禮をいふ事あるべき」とて手にだに取らず。いろ／＼にいへどもさらに受けずして歸らんとする故、やむことを得ず拾兩とへらし五兩となし參兩となし、段々とへらしてつひには金貳歩となし「せめて是ばかりは我が心の悦びなれば受け給ふべし。さなくては我が心もすみ申さず、今宵もいねがたし」と理を盡くし詞を盡くしていふにぞ「此の金を受け申す程ならば貳百兩をも留め置き申すべし。かくかへし申すからには聊かにも謝禮を受くるは我が心にあらず。さりさて餘儀なくのたまへばさらば鳥目二百文をたまはるべし。是は今夜やすむべき所を是まで追ひかけ來れる賃金なり。是は我が取るべき錢なれば申し請くべし」といひて貳百文を受けて歸らんとす。飛脚も感に堪へかね「さるにてもそこはいかなる人にておはす」と問ふに「名ある者にあらず。又何一つ知れる者にあらず。只我が在所の近所に小川村といふ所あり。此の村に與右衛門といふ人おはして、夜ごとに講釋といふことあり。某も折ふし行きて聞き



治郎八 善山の通稱なり

侍りしに「親には孝をつくすべし。主人は大切にするものなり。人の物は取らぬものなり。無理非道は行ふべからず」などいふ事、常々語り給ふにより、今日の金子も我が物にあらざれば取るべき理無しと心得しまでの事なり」といひて歸りぬ。飛脚はそれより京へのぼりいつもの宿に到り、さても此の度は命生きのびておの／＼方には對面する事となりぬ」とて有りし次第をくはしく語るに、折ふし其の家の裏に熊澤治郎八、田舎よりのぼり居て學文修行最中の事なりしが、此の物語を聞きて「其の人こそ誠の儒といふものなり」とて其の翌日すぐ江州に到り小川村を尋ねて隨從を願はれしに「人に教へ申すべきほどの學徳なし」とてさうらに隨從を許し給はず。熊澤ひたすらに願ひて二日が間藤樹の門にたゝすみて歸らず。藤樹の老母是を氣の毒がり「よしや、先づ内へ入れ申せよ」とありし故いなみがたくて内へ入れつひに師弟の約をせられしよしなり。其の後藤樹を備前より招き給ひしに「其の身は病身なり」とて堅く辭し「門人熊澤といふもの有り御役にも立つべき者なり」とて熊澤を出されけり。いづれも格別の事ともなり。長

備前 岡山藩主池田侯

物語なれど藤樹先生の事跡くはしく知らぬ人も多ければ見聞き及ぶ所を書き付けぬ。江州に遊ぶ人は必ず彼の講堂を見るべき事なり。  
 (東遊記)

### 逢坂山の蟬丸

近畿國語讀本

これやこの往くも返るも別れては知るも知らぬもあふ坂の關

これはこれ昔蟬丸といひし世捨人、逢坂の關の邊に草の庵を結びて往來の人を眺めつゝ詠める歌なりといふ。此歌百人一首にも出でたれば、蟬丸といふ名と共に知るも知らぬも歌留多取る人の耳には親しかるべし。

蟬丸の傳記

蟬丸はもと醍醐天皇の皇子敦實親王に仕へ雑色とて賤しき走り使を勤めたる者なりしが、天才ありたればにや和歌の道には極めて巧に、又親王の好み給へる技とて琵琶弾くこともいつしか聞き習ひて遂には其秘曲をさへ會得するに至れり。然るに親王かくれさせ給ひて後は都を去りて此處に來り、かくは世を逃れて和歌を

逢坂山の蟬丸



## 博雅三位

詠じ琵琶を弾きて獨り心を慰めけるなり。然るに其頃都に博雅の三位とて風流なる人おはしき。詩歌を好み音楽には殊に熱心なりしが、世に傳ふる流泉啄木といふ琵琶の秘曲をば此蟬丸が知れる由を聞き、いかにもして之を聞かんものと度々人を遣りて招けども應せず遂に

世の中はとてまかくても過してん宮も藁屋もはてしなれば

の歌を以て辭しにけり。三位は之を見て益其人となりを床しがり、それよりは夜なく獨り逢坂山に到り、彼庵の邊にイみて今弾くかと耳を傾くる事三年に及びぬ。然るに或秋の夜の月いと清く澄みけるに、庵の中に蟬丸の聲していひけるやう「あはれさやけく澄める月の夜や。我かく世をば捨てつれども今宵は何となう人なつかしく覺ゆるぞや。かゝる時しも樂の道に思入りたらむ心會へる友もあらば一夜を語り明さましものを」と。三位之を聞きて胸をざり覺えず走り入りて「やよ許せ御身の獨語を聞きてかくは驚かしつ。我は都の博雅なり。過ぎにし年の秋の頃より御身の琵琶のきかまほしく、度々人して招けども宮も藁屋と思ひ捨て、

應せぬ心の却りて床しく、我も亦とてまかくても聞かではやまじと雨の夜も風の夕も怠らず通ひきて既に三年に及びつるものを、今宵こそは一曲を弾で、我に聴かせよかし」といふ。蟬丸はあきれて暫しは物もえ言はず唯三位の顔を見まもりてありしが、さていふ様「あはれ心深くもおはする君かな。かくまでにおぼし給はんをいかでかいなみ申すべき。拙れども聴かせ給へ」とやをら立ちて琵琶とり出で、塵打拂ひて彈出でぬ。關の杉むら吹く風か岩間を走る水音か、或は高く或は低く漸く緩うして訴ふるが如く、忽急にして咽ぶに似たり。妙音天地に漲りては神往き魂飛んでそゞろに我あるを忘れしむ。浮世離れし草の庵に主客對ひて唯二人夜は漸く更けて月いよく冴えたり。かくて三位は年來の望かなひてこゝに其秘曲を學び得て後の世に傳へきとかや。

京都驛を發して東すれば、稻荷山科の二驛を経て列車は大谷驛に着すべし。首さしのべて前路を望めば山に臨んで一大隧道の口の開けるを見ん。これ名にし負ふ逢坂山の隧道なり。昔はこゝより少し北方に當りて街道あり所謂逢坂の關に通じ

今蟬丸社上中  
下三社あり  
上さいふ大谷



町のもの分靈  
水町より分靈  
したるもの  
中は手向神  
合祀にて古  
有名  
下は清水町に  
あつて清水  
丸神社といひ  
内社も關寺の界

川合 櫻川村  
大字

い く 女  
三四二  
きとか。今の街道にそつて蟬丸の社といふありこれぞ蟬丸を祀れる社にて古の葉屋の跡も此邊なるべしといふ。縁樹鬱々として訪ふ人稀に蜩の聲獨り昔を弔ふに似たり。

### い く 女

明治孝節録

近江國蒲生郡川合村に木村留平といふ者の女いくといふ者あり。その性柔順にして家業を勵精せり。此女いまだ幼なき時に父を喪ひ母と姉とに孝悌を盡すこと數年、姉又明治のふたとせに死せり。もとより家貧しければ他の田畠をかりて作り月日を過すほどに、母も同じ六年の二月より病に伏して醫藥驗なくつひに五月に至りて死せり。いく悲歎にくれながらも埋葬より追福に至りて心の限りを盡し、喪を終りたる後はひときは稼業を勉め嘗ておひもたる舊債をやう／＼に償ひてわづかに參圓ばかり猶殘れるをも日ならずかへさんと益々働けるを、郷人もいたく感じて聲を迎へしめん事を謀る者あれども、家に負債あるをそれをも未だかへし終

おひもたる舊  
債 償ひもて  
る 舊債即ふる  
き 負債なり

らぬ程に夫を迎へ、もし兒の生れたらんには返金の目途も違ふべしとことわりてひたすらひとり稼ぎたるが、今年の夏の早魃にあたりて晝は他家に傭作し、夜は自家に従事しつゝいとゞ辛苦を嘗むるを、女にしてかゝるものまた世にもあるべからずと村人こぞりて感動せり。これによりて賞典にあづかれり。

### す み 女

明治孝節録

野田 日野町  
大字 日野  
すみは近江國蒲生郡野田村の吉永傳吉が妻なり。傳吉文久四年に死せしに、すみ其時廿二歳未若き盛なれども夫のなくなりし後、容色を飾らず老母に任へ男女二人の小兒を育て女の身乍ら農業に力を盡して相稼ぎ、且貞節を堅固に守りて未嘗て世の人の輕侮をうけず。母子のあはひむつまじくして貧しく賤しき者なれども些かも禮儀を失はず、十とせが間一日の如く過し來にければ隣村の者までも感心せざるはなしこれによりて褒賞として金三百疋賜へり。

す み 女

三四三



### 高島玄俊

明治孝節錄

府内 今の大分市

玄俊は近江國高島郡朽木宮前村みやのまへの人なり。西京に上りて醫師山本永吉の門に入り久しくその術を學びて、豊後國府内に知る人あるをたよりて下り開業しけり。質朴廉直常に節儉を行ひて衣食住の冗費を省き人に交るに信義を専らとせり。或時妻なりし者外に出づとてうるはしき衣をきたるをみて、汝さのみ粧ふ事なかれ己つねに木綿の外用ひねば汝も木綿に改むべし。よしや絹の衣もちたりとて今やうの花やかなるさまするは徒に人に誇るのみにて、却つていやしと禁めたりとぞ。今に至て里人その質素を稱譽せり。さる生れつきなりし故に富貴の人に向ひても諂ふ色なければ醫業も廣く行はれず故に家貧しけれども貧しきに甘じて心を動かさず、もとより餘財ありといふにはあらねども、或は鰥寡孤獨に憫みを加へ或は痲疾痲疾に藥を施しなごその善行いひ盡し難し。明治己巳の歳の凶荒に米價高く庶民飢餓に及ばんとせしを、みづからの居宅を質として金子を借り窮民を救はん

己巳年 二年

庚午 三年

事を中尾喜兵衛といふ者に相談ひけるに、喜兵衛いたく之を感じ、おのれも玄俊に力をそへ同志の者をすゝめ金子を募り五千兩の大金をと、のへ米を求めて市中近郷の貧民に施せり。是みな玄俊が至誠に感動したるなりけり。又明治庚午のとし閏十月府内寺町より出火、折しも西風烈しくて延焼百軒余に及べり。貧民のみ住める町にて殊に己巳凶荒の後諸品高直なれば營作の手だてもなく皆焼跡に露宿して寒暑に苦しむを憐み、又同志の人々に募り金二千五百兩を集め、之を造作の基本となして、これまでは藁屋なりしを瓦葺に改め百軒ばかり建てつらねて類焼の窮民に與へしは全く玄俊が仁心の實功あらはれたるなりと皆人感じあへり。かゝる陰徳尠なからねば府内藩より扶助米下し置かれしに、辛未九月廢止になれども、本縣に民費を以て學校を剏建せしも玄俊發起の一人にて、夙くより朝廷の御趣旨に遵ひ奉りて終始渝らざるによれる故なればとて、金千疋を賜ひて褒賞したまへり。

辛未 四年 本縣 大分縣

千疋 今の金 二圓五十錢に 當る



破鏡附曲翠

伴 蒿 蹊

曲翠 ばしめ  
曲水 さかく

破鏡は膳所の土菅沼外記が妻なり。外記は芭蕉の門人にて馬指堂曲翠といひて俳諧をもて世に知らる。妻は和泉國岸和田の士の女にして歌を好み筑紫箏の妙手なり。一年夫と俱に故郷に赴き、播磨路を行きめぐりし道の記をかけるなど、文章もいとよしと見知る人語られき。予も見むと欲すれど、未探し得ず。外記は傍輩の曾我權大夫といへる者、寵を恃みて上下の爲によからぬ事共重なり人皆惡めども詮方なく齒を噛みしを、己が家に招き入れ惡事を責めて殺害し、其身も心靜に腹切りて失せしが主君の非なる名を忌みて私の爭論にもてなしたれば、侯怒りて其子内記といへるが江戸に在りけるも自盡を命せられて家亡びぬ。されば今も彼處には語り傳へて忠誠を悲しむとぞ。妻は尼となりて堺津に隠れ住み、もとより好める歌をよみ糸をならして悶をやりける。其箏の手今もそこに残りて破鏡流といへりとなむ。破鏡再照さすといふ心をもて雉髮の名につきけるも貞操の意に風流見

破鏡云々 破鏡は夫婦離別の事なれども再照さすは

古語に 破鏡 不二重 照落花 難上レ枝 さある による

ゆ。曲翠の名は聞えても忠誠の實は隠れぬ。まして妻は俳諧によらざれば其徒も知らぬ人多ければ惜くて聞くまゝにしるす。  
(近世畸人傳)

宇野禮泉

伴 蒿 蹊

宇野禮泉

趙子昂 元代の書の大家

禮泉宇野氏名元章字は成憲、通名長左衛門。近江守山驛の人。若きより學を好みて博聞強記なり。初は詩を作らず。一旦手を下すに及びては凡ならず。且書は趙子昂を學びて一畫一點といへども其法によらずといふ事なし。故に宮筠圃について人之を稱す。然れども爲人活達不拘にして家産衰ふるをもて、或は郷黨の爲に諂を得ることあり。豪飲にして談笑の聲四隣を驚かす。屢京師に往來して交遊多く奇話も多き人なり。今一二を擧ぐ。

江村北海 通名傳 左衛門 東行のついで其門を訪はれしに、日暮に薄り雨も頻りにふり出しぬ。先さし入りて纔に寒温の言終り、聽て投宿の事をも乞はむと思ひしに主人忽見えす。客いかにともせむ方なく起つもはした、居るもはしたにて思ひ煩ひける

江村北海 京都 大詩人 天明八年二月歿す 年八十六

江村北海

宮筠圃 京都の儒者にて書をよくす 安永三年十二月歿す 年五十八



粟田宮 青蓮院宮門跡

間、雨ます／＼に盆をうつすが如くなるに、門外より主人の聲して今歸りたり、嘸つれ／＼におはせむといふに驚きて見れば、簑笠を着、手に網を携へて入り來り、一獻けんをすゝめむに肴なければ近き川の魚をとり來れりといへり。又在京の日は三條橋東に在りて粟田宮へも謁を奉りしに、或時門人望月立三といふ人の許にて古島伯子といふ老醫に對面す。伯子卒然そつぜん一百錢を出して酒を買ひ有合ひも枯魚やうの物にて獻酬に及ぶ。然るに其翌あけのあした、とく禮服をつけて出でらるゝを宮へ參らるゝにや、覺えしに程なく歸りて、伯子の許へ謝禮に行きたりといふ。こはこと／＼しき事かなと訝ければ、否彼の人は我門生に非ず舊交にも非ず故なくして我好む酒を勧めらる、厚く謝せずんばあるべからずといふ。其所しこ爲大むね此類ひなり。又折々膳所ぜんじよ候へも參らるゝに、或時近侍あわて騒ぐ所へ行掛りぬ。今云々しかくの事にて手討し給はむの趣なり、先生知らぬ振にて罷出で、紛はし給はゞ事平しやうぎなむといふ。是非なくふと御前に出でたれば候も流石にさた惡しとやおぼしけむ、白刃を隠し鞘に收め給ふ。それも知らぬ者の様にて今參る道の湖上にて

膳所 膳所城主本多候

羽田 平田村大字

老莊 老子莊子の心を練る學をいふ

脾 内臓の脾

杯中の物 酒をいふ

今度終ふ 永八年十一月二十日歿享年五十八

詩一首つかうまつりたれば申上げむとてゆくりなく罷出侍ふとはいひけれど、實には詩もなければ俄に一句／＼綴りて申出けるまに候も怒解けて快く物語らひ給ひけるごぞ。これらは心勇壯に詩も達者なる徳なり。疾病やまひなる時同國蒲生郡羽田といふ所守山より今の道六里ばかりありむに久祥庵といへる醫を招きて診せしむ。此醫藏書家にて頗文學もある人なり。病者いふ、予年來老莊を嗜むが爲に心志を勞する事なし。又數年身を慎めば腎氣は定まりて健なるべしと、醫領きて誠に然り。追手搦手の守はよけれど如何せむ城中兵糧盡きたり。城中は脾にあつべし救ひ難しといへりし。平生杯中の物のみならず魚肉菓餅の類まで頻に喫する人にてありしかば理に覺ゆ。六十に足らずして今度終られし。著述多けれども皆稿を脱せず惜むべし。其詩集も家に有りごぞ。今己が爲に寄せられし作を掲ぐ。

田園風月夜

藜杖忽相迎

燈照親朋面

樹傳喜鵲聲

酒聊酬厚意

談重結芳盟

此坐賓與主

何曾惹俗情

右予訪時席上作



隱就衛門晝尙關 柴桑幽趣畫圖間 黃花裏露香將散  
 碧柳無風條可攀 印綏一朝甘棄擲 琴善百歲老清閑  
 世人但說陶公醉 氣象由來萬仞山  
 右依予畫題陶靖節之畫圖

(續近世畸人傳)

免受兄弟

淺見 綱齋

免受兄弟その碑文参照すべし

賤ヶ嶽合戦軍記物語の其部を参照すべし

東野

天正十一年賤ヶ嶽の軍敗れ秀吉の勢惣懸りにかゝりしかば、佐久間玄蕃允が勢惣敗軍になりけり。柴田修理亮勝家は小性馬廻り其勢七千余騎、堀久太郎が要害東野を押へて對陣せしなり。玄蕃允勝に乗り引とらざるを悔み怒り、急に引取候へと使者敷波を立て言遣りしかども用ひざりしかば、其道に闇きものなりと散々に詈り腹立して在りし處に、按の如く夜半の頃より四方物騒しくなりいで、何ともなうひしめきあへりぬ。これはいかさま不可然事なるべしと家老共勝家の陣に

余吳湖

あつまりつゝ、玄蕃の不引取事に付千非を悔いける所に、未其舌も乾かざるに秀吉前の夕、夜通しに多勢を卒し濃州より、いたりこの表今曉着陣のよし何方ともなく沙汰しければ、軍中雜説をいひ、爰もかしこも以の外騒ぎ出で怯弱なる者共は多く頓病虚病に言寄せ夜の間に落ちしもあり、悉く色を失ひ度に迷ふ体はかゝしき事はあらしと思ふ所に、余吾の湖邊に當りて鐵砲の音事々敷鳴いでごよみあへる聲夥し。彌陣中危からむこと急になり、かたづを呑んで有りし折節、水野小右衛門尉が飛脚来て、玄蕃今曉賤ヶ嶽より退き候へば敵ひたと付いて危く見え候といひしかば、勝家聞きもあへずさもこそあらんと思ひつれ。任他我是にて一合戦すべきと勢を備へ待たれけり。痛はしや匠作、心は剛に勇めども西の方玄蕃兄弟が勢敗軍におよびらちなきを見、いよくいさむで衆を勵ませども旗本の勢もまたいつ滅するともなく、僅一千計に成しかば此勢にて勝に乗つたる多勢に向はむこといかゞあらむと長ども申せしを、修理亮合戦の習はさはなきものを、千計りとても心を一致にし十死一生に極め合戦に及ぶ時は勝つものなり、我



に任せよと勇みけれども、各尤なりと受けぬ良ざしなり。毛受勝介その趣を見、柴田に申しけるは御意の上とかく申すに相似候へども其は昔尾州に於て度々軍になれたる下々あまたもち給ひしに因つて其御働きも有りしぞかし。今度は見逃聞逃に數度逢ひたる人々にておはしまし候故過半落失せぬ。昨日より思召なりし事を先手のものごも不致も、また下々如此落散りしも、みな極運のしるし眼前に候。是にて云甲斐なき討死をなされ、名も知らぬ者の手に掛り給はゞ後代まで口惜かるべし。願くば北之庄へ御歸城なされ、御心靜に御自害候へ。某御馬印を受取奉り、御名代に此處にて討死を致候べし。其隙に急ぎ御歸城なされ候へ。斯く申上候事もとかう思召候はゞ見るが中に徒になるべう覺え奉ると急に諫めしかば、流石其道に得たる勝家なれば尤なりとて、五幣を勝助に渡し心ある者は毛受到に與みせよといひすて、鎧をあはせ退きしなり。勝助五幣を受取り我手の者三百餘人其外勝家の小姓馬廻り少々左右に隨へ、原彦次郎の居たりし要害幸ひにあきしかばこれに取入り、老母妻子方へ形見かたみの物を舊功の者に渡し遣しけり。斯くて盃を出

五幣は勝家の馬じるしなり

まばらがけす各一騎がけするをいふ

し、樽數多取散らし、それくといひし時皆土器おつとり酌みたりけり。追ひ行く兵共柴田の馬印うまじるしを見て、こゝに修理亮こそ扣へたれ。まばらがけすなど追行く勢を制し止むるも偶半せり。又勝家を討取り名を天下に揚げんと勇むもありてひたくど取巻きし處に、勝助名乗りけるは天下に隠れもなき鬼柴田といはれしは吾なりとてあたりを拂ひて突いて出でければ、二町餘りばつと開きにけり。斯る處へ兄の毛受茂左衛門尉殿りをして有りしが、此の由をきつてさらば弟と一所に討死せんと思ひ、向ひたる敵を追拂ひ來りしを勝助嬉しげに逢ひつゝ、敬ひ云ひけるは御志返すくも忝なく奉存候。去りながら數多討死とげ候とも此極運をいかで救ひ給はんや。貴方は老母への孝行に御退ありて撫育し給へ、さもあらば彌御恩賞深かるべき旨手をすりてわびければ、孝行といひし事尤其理なきに非ず。されども其方を見捨てなば汚名世と共にありなん。其上老母は其方存知の如く義理を好み給へり。義理をすて退きなば母の心にも違はんか、いかで義を汚さんやとて兄弟ともに忠死を極めたりしは異朝には高祖の臣紀信、吾朝にては義經の臣



佐藤兄弟 繼  
信忠信

佐藤兄弟なるべし。類ひすくなき事共なり。新<sup>あたら</sup>手を入れかへく攻入らんと再三  
なしけるに兄弟其外歴々の者共多くありて突きのけく息をもさせず戦ひしかど  
も、或は手負ひ或は討たれ残りすくなになりにけり。勝助兄弟主君勝家退き給う  
て一時にあまりぬべし。心易く退き給ひなん。いざく快く最期の合戦して腹切  
らんといふ儘に残りたる兵十余人引連れ突いて出で、散々に相戦ひ追散し、其後  
兄弟腹をぞ切りたりける。其身は柳ヶ瀬の流に沈むといへども、名は高嶺の雲と  
立上り、今に天晴剛の者なりと其頃は市豎孩童までも口すさみけり。

柳ヶ瀬

嗚呼以下原本  
漢文なれども  
假名交り文に  
改む  
其大なる者  
名義をいへる  
なり

嗚呼毛受兄弟それ忠孝義烈の士と謂ふべし。もし當時茂左衛門をして死を逃  
れて歸らしめば不忠の餘軀を以て其母を養ひ母も亦不忠の汚れを被らん。  
然るに兄弟死を同うして以て吾親義を好むの美を成し、其母をして養を得ず  
して没するも亦忠義の鬼となりて九泉に憾みなからんとすれば其れ亦大なる  
者を識りてよく處する者と謂ふべし。或人曰く謝枋得は何を以て母のある爲  
に死せざると、曰く枋得は安仁の戦敗る、後自ら山中に逸れ、宋亡んで元に仕

へざるのみ。故に母を養ふを以て忠孝の全きを害せざるを得たるなり。毛受  
の身、方に敵に當り鋒を拒ぎ、忠死の義を當日に決す。固より母の在るを以  
て生を遺すを得ざるなり。  
(忠孝類説)

繪の力

那珂通高

陸奥に來るは  
那珂氏の土地  
へ茂足の行き  
しなり

古跡 甲賀郡  
三雲村 大字三  
雲に在り  
藤房卿遺跡

下總の國の古河驛にその氏は忘れしが茂足といふ歌人ありき。その人、二十年ば  
かりの昔、陸奥に來りて物語せし事ありしを、今おもひ出でたれば、書綴りて人  
々に見せまゐらせん。茂足幼き時、東海道より京に登るに、近江の石部と水口と  
の間に萬里小路中納言藤房卿の古跡と彫りし碑あるを見たりしかば、その跡のゆ  
かしさに尋ね入りて見るに、妙感寺といふ寺ありてそこに卿の念じ給へりといふ  
観音を安置せり。其御佛の御前にわれよりさきに旅商人と覺しき五十餘歳の男入  
り來て、何事を嘆くにか、さめざめと泣き居たり。うちつけにその故を問ふべく  
もあらねば立去りて本の驛路に出でぬ。頃しも二月の初なりければ日影あたゝか



なるどころ見出で、憇ひ居たるに、かの男もいで來ぬ。茂足は「日影も暖なりちと休み給はずや」といふに、かの男會釋しておなじ所に腰うちかけたり。暫し四方山の物語してさて後に「さきには妙感寺にて見かけまゐらせしが、かの卿には深き由縁などおはしませるにや」と問ひけるに、はぢらひたる氣色にて「さては世に似ぬ嘆せしを見たまひけん。賤しき身にいかでやんごとなき御方に、由縁なごいふことの候べき。但し今日しも不圖思ひ出でし事あつて涙せきあへざりけるを、はづかしくも怪まれ候ひけん『懺悔には罪を滅す』と承れば、若き時の罪はろぼしに、道すがら語り聞えん」とてもろ共に立出でぬ。この男は津の國大阪の人にて稚かりし時に、父母を喪ひ、高麗橋あたりの商人の家に奉公してありけるが、その家の子は遊蕩に耽りて家繼がすべくもあらぬさまなりしかば、父は怒りて勘當しけれども母刀自は一人の男子ゆゑ、さすがにいとほしがりて、上總の東金に出店あれば竊にそこ守る人に頼みきこえんとは思ひよりしかど、遙々の旅路を一人遣らんも心もどなくて、この男を召出でて「おことは兩親共に世にまさねば

何處に住むとも心安からん。後にて必ず家分けて得さすべし。暫時が程わが子に具して上總の方へ行かずや」と金貳拾兩預けられて、その子と共に大阪を出たれども、若き人の習にて勘當受けし身のなほ過を悔いもせず日夜遊蕩を廢めざれば、中山道の蕨驛わらびに來りし頃はその金ものこりすくなになりけり。明日は江戸より船出せば、東金に渡らん事も難からじなど聞くにつけて、行末の事を思ひ續くるに「かゝるたのもしげなき人に具して出店に行きたらんには、假令母刀自の書ありとて同じむれのえせ者とや思はれん。よしさは思はれずとも、この人の心改らぬほどは大阪にも歸らるまじ。とにもかくにもよしなき人に伴ひて遙にも來りけり」とくやしき限なかりしが、又思ふやう「身を立て、よすが求めんには江戸にまさる所やはある。こゝまで來しこそ幸なれ。今宵のうちにこの人を棄て、奔らばや」と思ひよりしかど「暫時の程も貯なきをいかゞはせん。かくと知りなば預りし金あるうちにとにもかくにもすべかりしを後れにけり」とまた更に悔しかりけるが「この人の脇差はその父の物好より百兩餘のつひえもてつくりたるもの」



なることを思ひ出で、「よし／＼これを盗みて賣代となさんには十日二十日の日を送るに難き事はよもあらじ」と心一つに謀りすまして、さあらぬ様にもてなし「今宵かぎりの旅寝なれば」などいひ拵へて酒勸めて寝ねさせぬ。夜ふけて後にそと起き出で、枕邊に忍びよりて窺へば、立て廻したる屏風の内に鼾の聲のみ聞えたり「時こそよけれ」と徐に屏風に手を懸けて引きあくるに内より行燈の火影のささして後の襖障子に映りたるを「人や來る」と驚きて顧みれば今までは見も入れざりし其の襖に藤房卿の笠置より後醍醐天皇の御供して大和の方に落ちたまふ時松蔭に袖しきてその上に帝を寝ねさせ奉りし形かたをなん書きたりける。この男これを見て「あなあさまし。やごとなき御方だに君の御ためにはかゝるならばぬうき目をもみ給ふものを、いかなれば我は主の物盜まんごまで思ひたりけん」ぞくやしくも口をしくて寝ねたる人の枕邊に額づき、くりかへしつゝその過をうちわびたりき。かくて東金に至りて後も憂き事あれば此の夜の事を思ひ出でて六年七年過ぎたりしに、その人も心改まり家に歸りて父の跡を繼ぎしが、われも約

束のごとく家わかたれたり。それより次第に富み榮え今は家業を子に任せてあかぬ事なき身となりたれど、さてのみ居らんもうしろめたさにをり／＼はこのあたりまで物あきなひにまゐるなり。さればいつとてもこの御寺には詣でぬれど、今日しも不圖思ひ出づれば年こそあまた過ぎにたれ、かの脇差盜まんと思ひよりしその月のその日なりければ、若しその折しもこの卿の御姿を見まゐらせずば、いかでかく事なくて世にはあり經べきと、かたじけなさに涙のちり落ちて君にも怪まれ候ひぬ。われは賤しきうまれながらわかき時より軍物語の書讀む事を好める故、その時しもこの卿の事を思ひ出でてまさなき心を改めぬ。よりにて子供等にも物讀むことは常に厳しく掟きてはべり」と語りぬとぞ。茂足はその頃四十歳ばかりの人なりき。

## 繪を見て志を改む

堀 秀 成

昔秀成京に在りける頃東の方へ下りけり。時は六月の廿日ばかり、甚しき暑さを



田川 今の甲  
賀郡三雲村大  
字三雲の大字  
なり

繪を見て志を改む

三六〇

堪へて近江國水口驛のこなた田川といふ里まで來にけり。道の傍なる松の木蔭涼しげなれば立寄りて暫らく憩へり。さる程に行者めく者七人ばかり此蔭を頼み所とすめり。又六十ばかりなる翁の供一人具したるが、これもこゝに來て荷の内より袴取出で、南の方に向ひふしたるが、涙留めあへぬ許り思入りて拜むさまなり。彼行者めく者の「翁は何事のおはしましたるにか」といふ。翁答へていへらく「これにつけて忘れぬ我身の物語あり。こは世に恥しき業ながら語り聞えむ」とて語り出す。

秀成も何事にかと差寄りて聞けば、翁のいふやう「我は十二の時より相模屋某の家に仕はれたる者なり。さるに其家に世繼がねの若子あり。此若子若きすさびに金數多失ひしかば、親の家を逐はるゝ時そが母の我を傍に呼びて『汝が志は常に頼もしう思渡れば、今度若子に添ひて何處までも後見してよ。此金は事あらむ時に』とて預けられぬ。かくて若子に隨ひて下總國までさすらひぬ。さるに母刀自の賜ひたる金は、若子の皆遣ひ失ひたるに行くべき方もさだかならず、行末を思

後醍醐帝笠  
置を落ちさ  
せ給ふ圖

建武の帝  
後醍醐天皇  
相模屋  
五郎兵衛

編者いふ。前  
の繪の力こ  
れをなかつ  
たるものな  
るよりこれ  
但文にて前  
のよりこれ  
某の晩年し  
まを知らし  
なれかく有  
なる兩國學  
らによりて  
るゝも卿の

ひ續くるにつけて迷の心起りつゝ、いとも恥しき事ながらかく甲斐なくてあらむよりは此若子をすてゝ如何なる身にもと思ひなりぬ。されど此儘にては明日より末のたづなき者なるに、若子の腰刀こそいとよき物なれと思ふ儘に、若子が臥したる所に忍入りてそれ取らむとして思はず傍を見れば、襖の畫のいみじう色とりたるが、燈のかげにはほゞ見ゆ。松の梢より村雨のかゝりたるが其下蔭いと貴げなる人の肩に助けられて立たせ給ふ圖なり。これぞ此向ひの林の中に墓のまさしう残りたる藤房卿の建武の帝を負ひ奉りて笠置を遁出でさせ給へる心を描きたるものなりける。之を見て我始めて悟りぬるは、かゝるやんごとなきわたりにもかくおはしましたるを、賤しき我等の身にかばかりの事何かはあらむと、速に心改めぬ。かくてより若子にそひて上總國に三年過ぎて、若子は親の勘氣許されて家に歸り、我は店一つ與へられて相模屋の名をさへ免されぬ。名を五郎兵衛といふ者にて今は召仕ふ者も多く心易う世を渡り侍るを、其始を思へば此卿の事によりてと覺ゆるまゝに、こゝを過ぐる時は何時もこの卿の貴さをも身の昔をも

繪を見て志を改む

三六一



くしき力なるべしと感ずるにこそ

思出で、かく侍るなり」と語るを聞きておのれも旅の衣の袖をなむ濡しぬる。

### 比叡山

落合直文

「阿耨多羅三藐三菩提あのくたらみやくほだの佛たち我立つ袖に冥加あらせたまへ」とはこの山の開基、

傳教大師

天台宗の開祖たる傳教大師の詠なり。大師延暦七年始めてこゝに一乗止観院を起

延暦寺

してより、佛教の勢力は日を逐ひて盛に延暦寺の名は誰知らぬ人なきに至れり。

されば此後宗派様々に分れたれども何れか其本をこゝに取らぬものやはある。大師の徳いかにいみじかりけむ。我等中古史を讀む毎にこの山を思ひ出でぬはなく、京都に來る毎に此山を思ひかけぬはなし。されど障る事のみ多くして未登る事を得ざりしが、今年は何事もさしおきて先馳せ上りぬ。二條の橋を東に渡り加茂川に添ひて行く。吉田の方よりするが本道なりときげど時なれば近きによりて、赤山の麓修學院村八瀬村を過ぎて行く。谷川いと清く吹き下す風いと涼し。やう／＼深く入るに道は愈迫りて城門などに向ふが如し。實にや一たび此山に立

尹大納言の事軍記師賢登山の章を見るべし

籠らば百萬の猛夫ありともいかでか容易く動かし得べきと思ひなされぬるにも、かの楠公の建議の事など忍び出でられて悲し。まことや慈惠大師が兵力をかりて佛法をば擁護すべしとて惡僧共を集めて、専ら武技を講せしめしが、はては叡山の衆徒といひ山法師といひて我儘の舉動のみせしことも、一は天然の嶮を頼みたるにもあるべし。今は愈坂路にかゝれば草鞋にはきかふ。蝸の聲谷水の音さやかなれども道の嶮しきに息もきるゝばかりなれば物もえいはず。餘りつらき折々にはそのかみの行幸の事、彼尹大納言の事などいひて勵みあふ。辛うじて至りつきたる處に人のけはひするを見れば、鼻高く目窪き洋人なり。尙見るにこの松蔭かしこの岩がねに天幕數多張りつめて宿れる洋人多し。こは宣教師の徒、暑を避けかつは來む年の布教の法など議せむ爲に年毎に此山をかりて其會議所となすなるが、そもいかなる心にか、これも佛の冥加には叶ふやいかに。傳教大師を始めて數多の座主達の心になへるやいかに。到りつけば日はやう傾きたり。中堂講堂など見めぐり行くにも此堂より幾多の名僧出で、此山に幾多の佛の冥加ありき



延暦寺の沿革

と思へば、見るもの聞く者悉く懐古の種ならぬはなし。此寺織田公の一たび滅されし後、豊太閤の再興に成り、ついで大猷院の改修を経ていときらくし。維新前までは寺領も五千石程寄せられ、僧坊も百三十餘ありきとぞ、今は衰へたれど猶山徒修學の聲たえず。我等は横川中堂わたり見めぐらむと思へど日暮れて道遠しと聞けば又來む時を契りて同じ道を下る。さて洋人共の假館の傍を過ぐるに讚美の歌松風ときほひてたえなく聞ゆ。あはれ此山、初は佛教の靈場として世にあらはれ、中頃は一の城廓となりて鴨川の水と共に院の御心を惱ますあやしのもの栖となり、今はまた耶蘇宣教師の立籠る處となりて、國人の洋教を信するものは此山を仰ぎ貴ぶに至らむとす。されば此山は佛教惡僧耶蘇教を以て繋がれむとする山なり。この三つのもの、我國史に於ける影響はいかに又將來に於ける利害はいかに。此山を登る者此山を望む者此山を思ふ者深く考へざるべからず。麓につきし頃は日はや全く暮れて雨さへふり出でたれば月も見えず鳴きしきる蟲の聲いとゞ物悲しかりき。

(萩之家遺稿)

三井寺破鏡

女の手迹 其  
 瑕中鏡の形な  
 るは一女の  
 鐘の鐺らるゝ  
 時一鏡を寄附  
 せしも愛惜の  
 心甚しければ  
 かくなれるな  
 りさなり又曰  
 著の赤染衛門  
 何れも俗説

三井寺の古鐘について

寒川辰清

此鐘に瑕甚多し。これ兵亂の時瑕つきたる者なるべし。圓きもあれば方なるもあり何ぞ執著の鐘の迹といひ女の手迹といはんや。一度鐘に鑄たる者はたとへ手をさへたればとて鐘、手のなりにとらるゝ事あらんや。若し鐘熱うして火氣未さめざる時ならば手は焼け爛るゝとも何ぞ鐘手に随つておきん。手に随つて瑕つきかねのどらるゝ鐘ならば何の貴き事かあらん。泥佛は水に入れてとろけ木佛は火に逢うてやくることこそ佛氏の旨なるべけれ。惣じてかゝる事に限らず、女人は罪深し假令罪を犯さずとも其罪有り、女人は地獄の使、外面如菩薩内心如夜叉なり故に財寶を佛寺に寄附し變成男子を後生に祈るべしと欺く者都鄙に充滿す。女子は實なりと心得、反つて一生を過つ者少からず。天地陰陽乾坤は男女なり、いづくんぞ女子のみ罪ありとせんや。男子に罪あるもあるべく女子に罪なきもあるべし。殊に我日本の主たる天照大神は女體なり、又大神を齋き奉りし七十五代相續

三井寺の古鐘について



〔女人結界〕

の齋宮は女子なり、いづくんぞ男女の差別罪の淺深あらんや。佛經の中女人をいひて外面如菩薩といひ内心如夜叉と説き地獄の使などいへる事深き意あるべし。又當寺に限らず佛院ほと女人の參詣を禁制すること女人の罪深き故には非ず、若き僧徒の蛾眉の及嬋娟の斧に罹らんことを恐るゝなるべし。 (近江輿地志畧)

秀郷社

寒川辰清

社 栗太郡瀬田村瀬田橋畔に在り

〔秀郷社〕 龍王社と竝べり。所祭秀郷の靈なりといふ。始此社今の地より六七町南東に在り、土民何の神といふ事を知らず。寛永年中蒲生中務大輔忠知此地を過ぐる事あつて、土民を呼んで曰く橋邊に秀郷社あるべし我先祖なり明日詣づべしと、土民等尋ぬるに社なし。衆民等曰く是より六七町南東の小祠定めて彼社なるべしとて急に今の地に遷す。それより後、人皆秀郷社と稱す。忠知社を造營す。其後蒲生家斷絶につき社も亦荒れなんとす。辱くも贈大相國家綱公修造なさしめ給ひてより以來橋修造ある日は必此社も與る。雲住寺縁起に曰く、鎮守府將軍秀

第四代徳川家綱 雲住寺縁起

この寺も同橋畔に現存す

蒲生郡日野

〔秀郷退治〕

郷朝臣は江州栗太郡田原村の人也。世に傳ふ水府に入りて俵を得たり故に田原氏を改めて俵氏とすといへり。其先は天兒屋根命の苗裔河邊左大臣魚名公五男伊勢守藤成朝臣なり。藤成の男を下野守豊澤といひ豊澤の男を河内守村雄といふ。村雄下野掾鹿島の女を娶つて秀郷朝臣を生む。秀郷膂力絶倫殊に射藝に妙あり。當國日野に居して常に佛法を信じ園城寺に詣づ。人皇六十代醍醐天皇延喜十八年戊寅十月廿一日一説には朱雀院承平年中の事なりともいふ。秀郷勢多橋を過ぐるに物あつて日月の如く光り、身の毛よだち骨寒し。徐に行きて之を見れば大蛇の蟠まるなり、眼の光大に輝き口炎を吹きて甚凄じ。然れども秀郷英雄の士にて少しも恐れず。蛇を跨いで行く。蛇も亦動かす。僅に行く事一里許にして青き衣を着たる者來つて大息をついて曰く、我は嚮の大蛇なり勢多橋下にすむ事二千餘年なり。然るに我種類多く百足の爲に害せらる。勇猛の人を見て此の仇を報せん事を欲する者多年なり、未君が如き人を見ず、君願くは我爲に仇を報いよと。秀郷許諾す。相伴ひて行き白波を凌ぎ水路を分けて到れば門あり。玉の扉七寶の莊嚴



勝げていふべからず。是に於て人間の栖すみかにあらず龍宮水府の境なる事を知る。宴を張り饗を設く。更闌なるに及んで皆曰く我寇至れりと。俄に風雨晦冥四邊鳴動して天柱も是が爲に折け地維も是が爲に傾く。仰ぎみれば炬火の如くなる者飛來て電の如く閃き雷の如く轟く。世に傳ふる三上山を七卷半まける百足なり。秀郷弓を取り矢をつがひ持滿して發つに中るといへども自若として近づき來る。秀郷眼を張り齒を切りて暫く思ふに、古老の傳に百足は唾液を忌嫌ふと、因つて矢尻に唾をぬり之を射るに弦に應じて倒れ、炬火も悉く消え震動止まる。見るに果して百足なり。嚮の青衣の者來て、殊の外感喜し秀郷を拜し何を以てか今日の恩に報せんとして十種の寶を出して之を與ふ。所謂倭鎧かた太刀鐘砂金袋如意童子等なり。秀郷之を持つて相別る、則勢多橋の邊に出でたり。醍醐天皇叡感の餘、從五位に叙し下野の押領使に任せしめ給ふ。然して後、朱雀院天皇御宇平將門を討ち從四位下に叙し下野武藏守に任じ鎮守府將軍となる。百足を射し所の鏃長八寸銘尙宗とあり洛北妙心寺に納む。倭鎧は蒲生家に傳へ、其後淺野安藝守家に傳來す。

淺野安藝守は蒲生氏郷の孫中務忠知の弟なり。太刀は竹生島に奉納し、鐘は三井寺に寄附す。今祭る所二座の祠、一座は水府神一座は秀郷靈なり。又傍に寺あり龍光山雲住寺と號す。こゝに秀郷朝臣の始終をあげて當時の緣起とす。天和元辛酉年葭月穀旦連山道人題す云々と。この緣起漢文を以て書し秀郷より分るゝ所の諸氏等を記す。今其要を採る事斯の如し。臣按ずるに秀郷の事蹟【藤原家譜】【日本人物史】【蒲生記】其餘の諸書に出でたり。龍宮に入る事實錄に於て見ざる所信用するに足らざれば措いて論せず。水底に龍宮といふ世界かつてあるべき理なし。【俗説辯】に【南浦文集】【琉球記】等を引いて琉球龍宮聲同じ。琉球王宮の榜に龍宮城と書す、國中に天龍地龍の祠あり。旁龍宮は琉球の事なるべしと記せり。秀郷の琉球に入る事笑ふにたへたり。かゝる事をしひて論辯せば夢中に夢を説く類なるべし。(近江輿地志畧)



### 賤ヶ嶽

寒川辰清

北庄 今の越前福井市

賤嶽八本鎗

【賤ヶ嶽】 餘吳湖の西に在り。高山に非ざれども甚峻難なる山なり、其高さ例へば野洲郡三上程の山なり。蛭谷、尾の路、猿ヶ馬場、盲ヶ谷、皆山中の小名なり。柴田勝家北越北庄に在りて織田信孝及瀧川一益と志を合せ、秀吉を撃たんと欲し近江路に出張す。秀吉直に此地に向、柴田が先陣佐久間玄蕃允盛政と戦ひ、中川瀬兵衛戦死し、秀吉の近習石川兵助加藤虎之助清正福島市松正則加藤孫六嘉明平野權平長泰片桐助作直盛脇坂甚内安治糟屋助右衛門以上八人真先に進み柴田勢を追込め突崩す、世に之を賤ヶ嶽七本鎗といふ。凡吾邦の戦闘に鎗を以て第一の功とす故に一番鎗の名あり。臣窃かに按ずるに秀吉の命を受けて其戦功ありしは八人なり。然れども兵助は先達つて戦死せしを以て世人兵助を除きて七本鎗といふ。臣兵助が爲に論せずばあるべからず。夫大將の士卒の功を賞するは其志を貴ぶなり。秀吉近臣に命じて鎗を入れしむとも衆に抽んで忠志を懐ける士にあらず

石川兵助

んば敢へて進むべからず。秀吉の近習此八人に限るべからず數多あるべし。然るに八人進んで宿屋七右衛門山路將監拜郷五右衛門に突戦す。宿屋山路拜郷俱に北國勇功の士なり一番に鎗を入るゝ者は兵助なり、兵助が戦死せしは天命なり豈臆したりとせんや、其事の成ると成らざるは天なり其志は八人共に同うして一番に鎗を入れしを以て見れば兵助殊に勝れたり。あゝ七本鎗といふ事臣兵助が爲に之を忘む宜しく賤ヶ嶽八本鎗と稱すべし。兵助泉下に物しる事あらば眉を開くべし。

(近江輿地志畧)

### 琵琶湖志自序

徒然庵宗堯

いはゞしの近江の國は我幼き昔より老ゆく今日までも見なれ住みなれて生ひにし國なれば、湖を見つゝ山を見つゝも我物顔におもほゆるにこそあなれ。昔の人のいひ習ひぬる其國の山を嬉しく我家の山といへる心ぞうべなりけらし。偶旅に出で、餘所の國より歸り來て此國へ杖を曳きて、心あての山を目のうちつけに見てだ

琵琶湖志 宗堯著の近江地誌に於て二十卷あり弘化二年九月成る但出版せられず其本のまゝ傳はしがきなりけらし「て」であつたらうの意



にはや家路に歸りぬる心地するは理なり。されど故郷にのみ搔籠りては一つの事だにも知りたきがごとくものゝなさけの道にうとし。凡物事は見るにつけてこそ目を悦ばしむるのみならず、昔を忍び今をかこつ道のちまた別ちぬれ。余所の事は知らずとも實にや我國に生ひたちて國の事をしらぬ顔に過ぎぬるも、したしみの道をすつる心地しぬれば、年頃月頃舟に棹さして浦々のさゝ波に袂をぬらし、杖を曳きては山々の朝露に目の及ばぬ處もあれど、又夕霧に袖打しぼりて遠つ祖のひじりの月に嘯き花に戯れ給ひし大和歌唐歌のかぐはしきを思出てゝみるにつけ聞くにつけつゝ、昔の人のみ慕はれてまのあたり昔の様を見る思ひをなしぬるは、言の葉の道の古へ今の變らぬこそその枝折とはなりぬれ。又近き中昔の頃にも世に聞えたるたはれをの人々の口ずさみおき給ひぬるを拾ひ集め、今の人の唐やまこの草々をもかき添へ、一ひら二ひらと書集へおきしを今宵一卷となして、先づ卷の初に國の形を描き琵琶の湖の姿をかき流し、古今の文を其名所の下へかき集めて、此所にはかゝる人のふみなんありけるとあるじ心に、かすゝ多

き名所或は古塚の跡宮寺高どの、趾など、耳遠き所とても古の文びこのかき残せる昔のいはれ杯の筆の跡言の葉草のちり失せずして今に残れるを尋ね見るに便りともなりなんかしと、一郡づゝに分ちてしるしゝまゝ、卷の數廿許にみちぬ。又やつがれの根なし草の腰折までも書添へしはいとはちらはしう憚るべき業には侍れど、其所々に杖を曳きて春秋となく旅寢の床の草枕涙の露と袖打をばちぬる思ひのくさくさなれば枉げて見許し給へかし。此國にありしなにはこのことよしあしをしるされし文などを見つゝ、其洩れたるを補ひ改めなごして物しけるなり。民草の多く榮え茂りてかゝる國に生れあふみの幸さちなれば、天地の上に高く下に厚く限りなきを尊み悦びて、四つの海波靜に治まれる御代の千代萬代までもつきせぬ君のおほん惠のみ蔭を仰ぎぬる心の餘りをもて、此文に物しけるあらましをはしがきにしるすも、言の葉法の友なる我里の隣にすみ染の袖も匂へる香巖といへるひじりと相謀りてなり。もとより唯己が忘れ草の種とならんもほいならぬまゝにかきつどへしよし無し草なれば、四方の賢き文びとにみられんもいと耻らふべき

おほん惠  
御



事になむ。 (琵琶湖志)

仁王相撲に現す

種玉菴宗祇

守山 野洲郡  
守山町  
寺 天台宗東  
門院 仁王今在  
ふ仁王今在

東門院仁王

美濃國修行の折節江州守山を通り侍るに、道の左に観音堂あり。寺號は聞き忘れ侍り。此門に立ち給ふ仁王を人多く集まり供物うづ高く、燈明赫灼と挑げ參詣の老若市をなす。かたへの家によりて問ふ。是はしかくの寺にて本尊觀音にてましますといふ。本尊を供敬はなくて何ぞ仁王をのみ崇むるや。答へ是此本尊利生尊く諸願を満てしめ給ふ事の著しきにより崇め奉る人のなきにはあらず。此仁王に頃日奇異の事侍りてわきて崇め申すに侍り。去にし月十五日の暮方より朝まで二尊ともにいづ地ともなく見え給はず。寺守驚き盜人の所爲にこそと様々尋ね申せざ行方なし。其翌日又元の如く左右に立たせ給ふ。扱は盜み取りて益なければ返したる物といひをりしに當國膳所と申す所の農民數十人來りて此仁王を拜し、か

八幡 膳所別  
保の八幡なる  
べし

栗本 栗太郡  
をいふ

へさに當里の者に語つて曰く、我里の八幡の神事昨日にて侍り。嘉例延年の式に任せ神前にて若き者集まり、神すゞしめの相撲を催す。一在のみか遠近の力量の者群をなして集まる事稻麻竹葦の如く一在々々立別れて勝負を争ふ程に、堅田の岩船、栗本の山崩いばふね やまくづなどいふ強力の手たれ立出で、名乗りて秘術をとるに年々當所取負けぬ。此力量を好む者は我力を慢じて人を笑ふ。せむ方なくてある所に、當所方より健き男二人出で、取るに宵より朝まで一度も負くる事なく、當所數年の恥を清む。一人は金剛と名乗り一人は力士と名乗る。明け方に人皆退散す。跡にて問ふ。方々二人は當所には見馴れ侍らず何處の人にやといふ。二人答へて我守山わたりに住む者なり汝等常に我を信ず、よつて一在の恥をすゞぎて得さすと語り搔消ちて失せぬ。誠に年々相撲に取負くる事、うきことに思ひ此仁王尊に歩みを運びけるが、果してかくの如しと語りしより世人信仰のかうべを傾くるに侍りと語りぬ。

(宗祇諸國物語)

出草野山八幡宮十景並圖

仁王相撲に現す



比牟禮山八幡  
町 蒲生町八幡  
社

比牟禮山八幡宮十景歌並詞

北村季吟

天和三年四月  
十五日

卯月の十日あまり此山の八幡宮の神わざに詣で侍りて

世々かけて榮行く里に八幡山名に負ふ神のしるしをぞ見る  
夕つ方なれば、鐘聞ゆる尾上に登りて彼の湖目も遙々と眺め渡す。麓には麥の黄  
ばめる、蘆邊の青やかなるも見ゆ。茜さす夕日の影に、真砂地の白妙にて墨の色  
なる島つ鳥の養るもあり。土佐の日記に今一色ぞ足らぬといへるにも數そひつゝ  
暮の山の端紫にて水の面は濃きはなだなる、何れの家にか染出せると怪しく、市  
人の行交ひ、海人の釣するも見えたるなど總ていひ盡すべくぞあらぬ。伴可計案  
内していひけらく、東に差向へるは觀音寺山衣笠山ともいへり。三十三所の其一と  
ころになむ。それが此方に横ほれるは安土の山なり。そこなりける摠見寺こそ故  
信長おきの大臣遠景山下漫々とか、せ給へる所なりければ、秋の月の夜冬の雪の暮な  
ごぞ見せまほしき。辰己に願れば山越に三上の山聳えて木の間に定かならねど鏡

伴可計 季吟  
の弟子にて八  
幡の人  
三十三所云々  
觀音正寺の  
西國三十三所  
札所なるをい  
ふなり

八つの美景  
浦洲八景をい  
ふ

の山も見えぬ。彼の唐土の八つの美景に此山々を加へて十の景あるをいかでか唯  
に見過さむといへり。其衣笠は都の北山にありき、卷浦は榎の葉井の東にあなる名  
に通ひにたれど此の國のこれにはあらず。三上鏡山ばかりこそあれ、古き歌枕な  
らずばいかでかやまと歌には詠出でなむとためらひけれど、そはごもかく見ゆる  
してむなご強ひて詠ませければすべなく。

- 八幡晚鐘 入相にくるれば波の光かは神祭する數の燈し火
- 北庄夜雨 心ある里の住居の板庇雨きくよはの音さえむとや
- 衣笠秋月 何處にか月は見ざらむ浦山にもてはやさるゝ影や隈なき
- 遠景暮雪 更科も吉野もよしや月花に是もはなれぬ雪の夕榮
- 卷浦歸帆 浦路のみ待つらむ妹が門みえて歸る波路の船急ぐらむ
- 丸山晴嵐 嵐吹く此山松のうつろひて深緑なる波騒ぐらし
- 岩崎落雁 春過ぎて洲崎の芦も茂るまでいかなる雁の落ち泊まるらむ
- 檜杉夕照 我をだに知らぬ檜原も杉村もなべて夕日の色にうつろふ



樹間鏡山 おのが目に見れどもあかす鏡山青葉隠れや曇るといふらむ  
山越三上 近江路はむら山あれど其名さへ御上の嶽の下に立つらむ

笠塚の碑

僧 李 由

李由 犬上郡  
福満村大字平  
田光明寺(眞  
宗)十四代の  
僧  
某作者おの  
れないふ

季札云々生  
前の約をふみ  
て墓に剣を遺

江東平田の邑、光明遍照寺の地に先師芭蕉の笠塚あり。十四世の僧某、蕉門に入  
りて學を積むこと二十餘年、恩は琵琶湖より深く教は打出の眞砂より高し。朝に  
は香華を供へ夕には句を鍊りて推敲を定めんことを祈る。むかし芳野山に登りて  
は花の曙を見せかけ、竹植うる日は東坡が笠をうらやむ。月のあみだ笠に時雨霰  
のいかめしき音を侘びられたる傳もなつかしとて、死後に此笠を乞ひうけ終に土  
中にこめて門人各一句をさゝげてかの塚に同じく納む。世に報恩を殘したる、長  
崎に尾花塚、深川に發句塚、越中に翁塚、木曾塚は直に遺骨を葬る地なり。され  
ば西行の塚とて國々に殘したるも此類ならん。あなかしこ、死後の門人師に見え  
ぬことを嘆くことなけれ。早く此塚に來り季札が剣をかけて一句を奉らば生前の

りたる故事よ  
り此笠塚を死  
に芭蕉をよこ  
てあがめよこ  
の意

門葉にひとしかるべしと、弟子李由字貫年謹んでこれを書す。

(風俗文選)

月見賦

松尾芭蕉

木曾寺 今の  
義仲寺をいふ  
乙洲 門人智  
月尼の子  
泉川 銘酒  
正秀 門人膳  
所永田氏  
信樂 茶の名  
所 酒掌 門人瀬  
田濱田氏  
丈草 門人内  
藤氏 門人各  
支考 門人各  
務氏 門人醫  
木節 門人醫  
師 門人  
智月 門人  
惟然 門人廣  
瀬氏 門人  
欽中 八仙 賀  
知章 汝陽 王  
進讓 左相 李  
適之 崔宗之

ことし琵琶湖の月見んとて、しばらく木曾寺に旅寢して、膳所松本の人々を催すに、  
乙洲は酒をたづさへて泉川に三日の名をつたへ、正秀は茶をつゝみて信樂に一夜  
の夢を覺ます。こよひは茶といひ酒といひ、かたはらの人も二派にわかれて、酒  
堂は燈にかたぶきて其茶に玉川が歌を詠じ、丈草は月にうそぶきて其酒に樂天が  
詩を吟す。支考はわか木節は老いぬ。智月は物の覺束なう、かづきのあまのな  
ま浮びならず。それが中にも惟然法師は酒におごろき茶に感じ、ほむるもそしる  
も空に風吹いて、こゝに三子者の志をためさんや。ましてその外の友とする人も  
峨々洋々のこゝろざしを知れ、ば、すべて飲中八仙の遊びならん。まことやつれ  
くの法師だに、心をつくるはぬ友えらびは、かゝる月見の侘なるやと、思ひし  
まゝの草の庵に浮世の外の風狂を盡せり。



米くる、友をこよひの月の客

かくて三盃の興に乗じて湖水の月に船をうかべんと、ものこのむ人の風情をそへたるに、杖に瓢箪の唐子からこはなれども、扇に茶瓶の若男あれば、赤壁の船の乏しさにはあらざめり。さどなみや打出の濱の名にしおふ鏡の山もこなたにさし向ひ日枝は横川の杉につらなりて、比良の高根は雁をもかぞへつべし。うしろに音羽の峯高く、石山の鐘は粟津の嵐にさえて、そこに楓橋の霜も置きぬらん。矢橋の歸帆はこよひをもてなすに似たるべし。

名月や湖水にうかぶ七小町

されば吾朝の紫式部は石山に源氏の俤をうつし、唐國の蘇居士は西湖に越女の粧ひをたどふ。いづれも風雅の名に残りて今のまぼろしに浮ばざらんや。實にそも和漢の名蹤なりけらし。

さて松本に船をさしよせて、茶店の欄干に心をはなてば、目はよし蓬萊の水を隔てず身は只芙蓉の露にうるほふ。竹の林の酒も時ならで、松江の鱸はこよひなる

蘇晋李白張旭、兼逢以上八人何れも唐代名士酒を好みて豪宕これを飲中八仙といふ。風狂風雅の遊。赤壁蘇東坡の賦にて有名。の地名。楓橋かの唐詩選中、月落烏啼の詩は楓橋夜泊の題に詠まれしも有名なり。

竹の林 竹林の七賢をいふ

松江支那の地名にて鱸は特産といへり。千那門人堅田の僧。尙白門人大津江左氏

三井寺の門た、かばやけふの月

をや。猶はたかたぶく月の名残には辛崎の松もひとりや立てる。古き都の名もゆかしければ、尾花川のあけぼのをこそと、千那尙白をおどろかしぬれば、夜ははや五更に過ぎぬべし。

既望賦

松尾芭蕉

望月の殘興なほ止まず、今宵は二三子にいさめられて船を堅田の浦にはす。其日もたそがれのほどならん、何がし成秀といふ人の家のうしろに漕ぎ入れて、醉翁狂客の月にうかれて來れるありと、船の中より聲々によばふ。あるじは思ひかけ

推敲唐の買島僧推月下門。門を推か敲か自ら何れが是ならんを知らざりしといふをこしに思ひ浮べしなり。韓愈唐代有名文章家



三上 三上山  
水莖 蒲生郡  
岡山村 在り  
湖岸の岡の  
古來佳景を以  
て名あり  
十二峯 甲賀  
蒲生郡界の山  
脈をさす  
千休佛 浮御  
堂内の佛をい  
ふなり  
京極黃門 歌  
人定家をいふ  
惠心僧都 此  
の僧都千休佛  
を刻みしと傳  
ふればかくい  
ふ蘇城 唐詩  
姑蘇城 唐詩  
選月落烏啼霜

ず、驚き悦びてすだれをまき塵をはらふに、其後園に芋あり、さゞげ有りて鯉鮒のきりめたゞさぬにしもあらず。やがて岸上に榻をならべむしろをのべて、おのゝいざよひの宴をもよほす。月は待つ程もなくさし出で湖上はなやかに照りわたれり。かねて聞きぬ仲秋望の日は月の浮御堂にさしむかふを鏡山といふなるよし。こよひ猶このあたり遠からじと、かの堂上の欄干によれば、三上水莖は左右にわかれて其間に十二峰の影をひたす。とかくいふ程に月も三竿にして黒雲の中にかくれたれば、いづれか鏡山といふことをわかす。されどあるじの興をそへて折々雲のかゝるこそと客をもてなせる心ざしいと切なり。やがてその月の雲をはなる程、水面に玉塔のかけをくだきてあらたに千體佛の光をそふ。まことや、いざよひの空を世の中にかけてかたぶく月のをしきのみかはとは、京極黃門の歎息のことばなるを、我はこよひも此堂に遊びてふたゞび惠心僧都の衣をうるほす無常觀想のたよりならずやといふに、あるじは興に乗じて來れる客をなごさは興盡きて歸さんやと、もとの岸上に盃をあぐれば、月は横川にかたぶきて姑蘇城の

滿天姑蘇城外  
寒山寺の句に  
て有名なり

鐘もきこゆなるべし。

鎖あけて月さし入れよ浮御堂

やすくと出でいざよふ月の雲

(芭蕉翁文集)

幻住庵記

松尾芭蕉

岩間 西國三  
十三所觀音札  
所に有名なり  
岩間寺をいふ  
國分山 石山  
村大字國分に  
在り昔の國分  
寺の所在地今  
もその礎石殘  
り當時の瓦片  
土中より出づ  
八幡宮 今村  
社近津尾 社  
址この境内に  
ありてその内  
用水さくその  
菅沼氏 磨行  
藩士

石山のおく岩間のうしろに山あり、國分山といふ。そのかみ國分寺の名を傳ふるなるべし。麓にはそきながれをわたりて翠微にのぼること三曲、二百歩にして八幡宮立たせたまふ。神體は彌陀の尊像とかや、唯一の家には甚だいひなることを兩部光をやはらげ利益の塵をおなじうしたまふも亦たふとし。日頃は人の詣でざりければ、いざと神さび物しづかなる傍に住捨てし草の庵あり。蓬根笹軒をかこみ屋根もり壁落ちて狐狸ふしごを得たり。幻住庵といふ。あるじの僧何某は勇士菅沼氏、曲翠子の伯父になん侍りしを、今は八とせばかり昔になりてまさに幻住老人の名をのみ殘せり。予また市中を去ること十とせばかりにして五十年や、ちか



曲翠子 芭蕉の門人 曆所藩士  
五十年云々 此時芭蕉四十六歳(元禄二年)

やがて出でじよしの山やがて出でじよと思ふ身を花散りなばさひとやまばつらむ(西行)

南薰 南風をいふ 薰は薰風の意

城あり橋あり 膳所城 瀬田橋をいふ

笠取 山城圓の地名

士峯 富士山

武蔵野の古き 栖江戸深川

芭蕉庵をいふ 古人 猿丸大

き身は蓑蟲のみのをうしなひ、蝸牛の家をはなれて奥羽象潟の暑き日に面を焦し、高砂子あゆみ苦しき北海の荒磯に踵を破りて、ことし湖水の波にたゞよひ鴉の浮巢のながれとまらるべき蘆の一もこのかげたのもしく、軒端ふきあらため、垣根結びそへなごして、卯月のはじめいごかりそめに入りし山の、やがて出でじよさへ思ひそみぬ。さすがに春の名残も遠からず、つゞじ咲き残り山藤松にかゝりて、郭公しばし過ぐるほど、宿かし鳥のたよりさへあるを、木啄のつゞくともいとはじなど、そゞろに興じて魂は吳楚東南にはしり、身は瀟湘洞庭にたつ。山は未申にそばだち人家よき程にへだたり、南薰峰よりおろし北風湖を浸して涼し。日枝の山比良の高根より唐崎の松はかすみこめて、城あり橋あり、釣たる、船あり。笠取にかよふ木樵の聲麓の小田に早苗取る歌、ほたる飛びかふ夕やみの空に水鶏のたゞく音美景、物として足らずといふことなし。中にも三土山は士峰の俤にかよひて、むさし野の古きすみかもおもひいでられ田上山に古人をかぞふ。なほ眺望隈なからんと後の峯に這上り、松の棚つくり藁の圓座を敷いて猿の

夫をさす

王翁徐詮 老海客 集上。王翁主簿 峯庵。

(山谷集)

さくさくの雫 落つる岩間の 昔清水汲みほすまひかな(西行)

甲斐何がし 藤木甲斐守敦直 寛永時代 の能書なり

腰掛と名づく。かの海棠に巢をいとなみ、主簿峰に庵を結べる王翁徐詮が徒にはあらず。たゞ睡癖山民となりて屏顔に足をなげだし、空山に虱を捫つて座す。たま／＼心まめなる時は谷の清水を汲みて自ら炊ぐ。さく／＼の雫を佗びて一爐の備いとかろし。はた昔住みけん人のことに心高く住みなし侍りて、たくみおける物すきもなし。持佛一間を隔て、夜の物をさむべき處など、いさゝかしつらひたり。さるを筑紫高良山の僧正は加茂の甲斐何が子にて、このたび洛に上りい

まそがりけるを或人して額を乞ふ。いとやすやすと筆を染めて幻住庵の三字を送らる。やがて草庵の記念となしぬ。すべて山居といひ旅寝といひ、させる器たぐはふべくもなし。木曾の檜笠、越の菅蓑ばかり枕の上に柱に懸けたり。晝はまれ／＼とごぶらふ人々に心を動かし、或は宮守の翁、里のをのこ共入來りて、あししの稻くひあらし兔の豆畑に通ふなど、我が聞知らぬ農談に日すでに山の端にかゝれば、夜座靜かに月を待ちては影を伴ひ、燈を取つては岡兩に是非をこらす。かくいへばとて、ひたぶるに閑寂を好み、山野に跡をかくさんとはあらず。や

岡兩 我影坊子をいふ



仕官懸命の地  
武士となりて  
領地をうるな  
いふ

樂天 白居易  
老杜 杜甫

病身に倦んで世を厭ひし人に似たり。つらく年月の移りこし拙き身の科を  
思ふに、ある時は仕官懸命の地を羨み、一たびは佛羅祖室の扉に入らんとせしもた  
よりなき風雲に身をせめ花鳥に情を勞して、しばらく生涯の計とさへなれば、終に  
無能無才にしてこの一筋につながる。樂天は五臟の神をやぶり、老杜は瘦せたり。  
賢愚文質のひとしからざるもいづれか幻の栖處ならずやとおもひ捨て、ふしぬ。

まづ頼む椎の木もあり夏木立

(芭蕉翁文集)

幻住庵賦

松尾芭蕉

宗鑑 山崎宗鑑  
盤村 栗太郡常盤村志那の人  
和歌連 歌の名  
家其居に題し  
て上客は立處  
に歸れ中客は

五十年やちかき身は若栢の老木となりて蝸牛のからを失ひ、蓑蟲の蓑を離れて  
行方なき風雪にさまよふ。かの宗鑑がはたごを朝夕になし、能因が頭陀の袋をさ  
ぐりて松島しら川に面をこがし、湯殿の佐山に袂をぬらす。猶うとう鳴くそこの  
濱邊より、えぞ千島を見やらんまでとしきりに思ひ立侍るを、同行曾良なにがし

一日にして歸  
れ下客は一宿  
せよとこれよ  
り採りて一宿  
の意に用ひた  
るなり  
能因 百人一  
首に加へられ  
たる歌人  
頭陀の袋 行  
脚の袋  
うさう 善知  
鳥島名  
曾良 芭蕉門  
人  
六 眼耳鼻  
舌身意の六知  
覺をいふ  
曲水 曲翠さ  
もいふ

と云ふもの、多病いぶかしなご袖をひかゆるに心たゆみて、象潟といふ所より越  
路のかたにおもむく。さるは高砂子のあゆみくるしき北海のあら磯にきびすを破  
りて、ことし湖水のほとりにたゞよふ。鴉の浮巢の流とゞまるべき蘆の一葉のや  
どりをもとむるに、その名を幻住庵といひ、その山を國分山といへり。古き御社  
の立たせ給へば六根おのづから清うして塵なき心地なむせらる。かの住捨てし  
草の戸は、勇士菅沼氏、曲水の伯父なる人の、此世をいとひし跡とかや。ぬしは  
八とせばかりになりて、棲はまぼろしの巷に残せり。誠に知覺迷倒も、皆幻の一  
字に歸して無常迅速のことわり、いさゝかも怠るべき道にあらず。山はさすがに  
深からず。人家よき程へだたり、石山を前にあて、岩間山のしりへにたてり。  
南薰高く峰より下し、北風はるかに海をひたして涼し。をりしも卯月のはじめな  
れば、つゝじ咲残り山藤松にかゝりて時鳥しばく過ぐるほど、宿かし鳥の便さ  
へあるに木つゝきのつゝくともいひし。かつこ鳥我をさびしがらせよなど、ひと  
りよろこび漫ろに樂みて、吳楚東南のながめにはちす。五湖三江もこゝに疑はし



きや。日枝の山比良の高根より辛崎の松は霞こめて、膳所の城は木の間にかゞや  
 き、瀬田の橋に雨晴れて、粟津の松ばらに夕日を残す。三上山は富士の係に通  
 ひて武藏野の古きすみかも思ひ出でられ、田上山に古人を慕ふ。さゝが嶽千丈が峰  
 はかまごしと云ふ山あり。笠取山に笠はなくて、黒津の色や黒かりけむ。猶はた  
 眺望隈なからんと後の峰にはひ登り、松の棚つくり藁の圓座をしきて是を猿の腰  
 掛と名づく。傳く聞きぬ、徐老が海棠菓の飲樂も市に在りて喧しく、王道人が主  
 簿峰の住居も此處を捨て、羨むべからず。虚無に眼を開いて嘯き、屏風に風を捫  
 つて座す。たま／＼心すこやかなる時は薪を拾ひ清水を掬ぶ。小齒朶ひとつ葉の  
 緑を傳ふ。とく／＼の雫をわびては一爐の備いさかるし。前に住みける人もさす  
 がに心高く、たくみおける物數寄もなし。持佛一間を隔て、夜の物かくらふべき  
 所なご、いさゝかしつらへり。さるを高良山の僧正洛にのぼり居給ひしを或人を  
 して額を請ふ。いとやすらかに筆とりて幻住庵の三字をおくる。其裏には予が名  
 を書きて後見ん人の記念ともなれとなり。山居といひ旅寢と云ひ、させるうつは

篠ヶ嶽 千丈  
 峯袴山 いたつ  
 れも大石谷の  
 奥なる國境に  
 あり  
 黒津 下田上  
 村大字

すける事 俳  
 句正風を 吹  
 する事を いふ

物たくはふべきにもあらず。木曾の檜笠越の菅蓑ばかり枕の上の柱にかけたり。  
 晝は宮守の翁麓の里人など入り來りて、猪の稻くひあらし、兎の豆畑に通ふなど、  
 我聞知らぬ咄に日を暮し、かつは夫れ／＼とぶらふ人も夜座靜にして影をともな  
 ひ、罔雨に對しては是非をこらす。かく云へばとて、ひたぶるに閑寂を好み山野  
 に跡をかくさんともあらず、病身や、人に倦みて世を厭ひし人に似たり。何ぞ  
 や法をも修せず俗をもつとめず。いと若き時より横さまにすける事侍つて、しば  
 らく生涯のはかりごさへなれば、終に此一筋につながれて無能無才を恥づる  
 のみ。勞して功むなしく魂つかれ眉をしばめて、秋も半ばに過行くま、風景朝暮  
 の變化とても亦唯まぼろしの住居ならずやと、やがて此文をとゞめて立ち去り  
 ぬ。

(芭蕉翁文集)

芭蕉翁終焉記

榎本 其角

花やかなる春は頭重く眼濁りて心憂し。泉石冷々たる納涼の地は殊に濕氣をうけ

芭蕉翁終焉記

これが芭蕉翁  
 が元禄七年十  
 月十二日大阪  
 花屋にて歿せ